

ウチのキャラクターが
自立したんだが。リ
ファインド

馬汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴァーチャルファンタジー。

その地に足を踏み入れたのは、時間遡行により二度目の時間線を歩む女性魔法剣士、ケイ。

……という設定のキャラクターを操作する創也であった。

この世界で、ケイと創也は様々な『物語』に関わって行く。

作品要素

・ 大きじー1つ分のTS

・ 小さじーつと半分の恋愛

・ 小さじ半分のアクション

・ 適量のシリ阿斯

・ 適量のコメデイ

追記：多忙につき作者瀕死

追記：『注意しなくても良いけど忠告ぐらいはしておきたい事』

この作品は“リファインドじゃない方（投稿作品一覧を参照）”を、チラ裏ではなく表に出せられるかなという形に書き直した（ちよつとした修正しかない文も有り）ものです。

たまに大幅変更

目次

プロローグ

ウチのキャラクター、降臨。 | 1

第一章 俺はケイである。

ウチのキャラクター、出会う。

16

ウチのキャラクター、戦う。 | 30

ウチのキャラクター、買い物する。

40

ウチのキャラクター、泊まる。

56

ウチのキャラクター、依頼を請ける。

70

ウチのキャラクター、備える。

83

ウチのキャラクター、出発する。

95

ウチのキャラクター、切り裂く。

110

ウチのキャラクター、突入する。

120

ウチのキャラクター、探索する。

134

ウチのキャラクター、逃走する。

144

ウチのキャラクター、脱出する。

160

ウチのキャラクター、依頼完了。

174

閉幕 私の新しい友人

184

第二章 怪盗紳士イツミ・カド

閉幕 俺の声

189

ウチのキャラクター、退く。

194

ウチのキャラクター、催眠不可。

211

ウチのキャラクター、再び突入。

226

ウチのキャラクター、庇う。

242

ウチのキャラクター、自立する。

259

ウチのキャラクター、それと俺。

273

ウチのキャラクターと俺、再会する。

287

ウチのキャラクターと俺の、求める記

憶。

297

プロローグ

ウチのキャラクター、降臨。

「ううむ……」

いかにも悩み多き青年の声が、彼一人しか居ないこの空間の中でポツリと吐き出される。

しかしこれは、側から見れば「一人」と言うには間違っている。だからと、ここに「二人いる」と言うのも正確ではない。

それは何故か？ その二人の内一人の姿は生きた人間ではないからだ。

ここに居るのは一人の人間と、一つの等身大の人形である。

そしてここでは、何よりも不思議な様子を見ることが出来る。

なんと、この人形こそが先程の悩み声を吐き出した者であり、対して普通の人間の姿をしている筈の彼は、こちらこそが人形だとも言わんばかりに一切動くことがないのだ。

つまり、人形と人間の立場が、まるで入れ替わっている。

整った顔に程々の身長と筋肉を持つ、黒髪の男と、

目も口も無い、全ての特徴を無にしたような等身大の人形とが、
一体どういう事だろう。

その疑問を抱くと同時に、また別の疑問が現れる。

ここは、何処だ？

・
・
・

キャラクタークリエイートルーム。

それがこの部屋の呼称であり、役割である。

あらゆるV R M M O——このゲームにおいては、アクションを示す「A」も付き、V R A M M Oとなる——に、初めて訪れる者全員が必ず行うのが、
“キャラクターの作成”
だ。

「ううむ……」

その部屋で、俺は何度目かも分からない悩み声をひねり出している。

先人達もこうして悩んだのだろうか、などと言う考えさえも割り込む余地はない。

俺の頭は、目の前の存在をどうするかという議題で大会議を繰り広げている。

因みに、今の俺の姿はマネキンとなっている。

VRMMOの世界に降り立つ前に、身につける姿を決めていない新規プレイヤーは、マネキンの姿でこうしてキャラメイクを行わなければならない。

髪型、髪色、顔の輪郭、目や口、鼻、顔の輪郭。各部位の筋肉や脂肪、身長。

そして、これから行く世界にて生きる種族。職業。

これらを決め、完成したその姿で冒険を始めるのだ。

『バーチャル・ファンタジー』と呼ばれるゲームの世界に。

さて、未だに俺はこの男と睨めっこをしているのだが、俺の脳内で行われる会議では一切の進展がない。会議は踊りもせず、むしろ静まり返っている。

俺はこの男をどうするつもりかと言えば、勿論の事着せ替え人形の如く……いや、体型も変わるからある意味人形以上か。

兎に角この男の姿をあれやこれやと変えてしまい、これから行く世界での俺の姿となつて完成、とするつもりである。

一歩間違えれば男性同士がお互いを熱く見つめ合っているように見えるかもしれない

いが、俺にその気はない。

この黒髪の男性は、俺自身を模したものだ。多少……いや大幅に美化されているとは言え、こうして見つめ合っているのでは鏡を見ているのと変わらない。

「んん……」

何度目かも分からない唸りをまた上げる。

自分を模したキャラクターが何故ダメなのか、と言うのはワケがある。

この俺のような姿をした男が、ヤケに美しい顔をしているのだ。

美しいとは変な言い方だ、と思われるかも知れないが、確かにそこの少女漫画やらゲームやらに出ていてもおかしく無い容貌なのである。美しいという単語が、この男を評価するに最適だ。

これでは、俺の姿として今後のゲーム内で共にするには相応しくない。

相応しくないと言うか、俺には過ぎたものと言うか……。

「……」

とにかく、それがこの唸り声の原因だった。

……決めた。

何分、いや何十分以上も悩んだ末に出た結論は、「俺とは全く違う容姿の別のキャラクター

ターを作る」であった。

そうすれば、現実での俺とのギャップで勝手に罪悪感を感じる必要はない。

そうと決まれば、俺はこのキャラクターのデータの保存だけして、次にリセットしてから別のキャラクターを作り出した。

自分では無い何かの人物、知り合いや既存の創作物の人物を除外するならば、それは必然的に、俺が人物像をイチから想像し、形作るということになる。

なぜだろう。胸が高鳴るような、心が踊るような感じがする。これならば、満足できる姿が……

出来なかった。

何故だ、という疑問を誰かにぶつけようにも、ここには誰も居ない。強いて言えば、目の前に居るエルフ戦士だけである。

彼が「俺の写し」に次ぐ二人目のキャラクター……ではなく、五人目である。

二人目に作られたのは、如何にも青春を謳歌していそうな日本人少年の剣士。
三人目は、ドラゴーナと呼ばれる種族の魔法使い。

四人目が、低い背のドワーフと巨大な盾のギャップを感じさせる騎士。
そして五人目が彼、大剣を携え、耳の尖ったエルフである。

「どうすれば……」

これだけやっても満足できないのは、俺が人の姿を作る才能がないのか、あるいは満足できる基準が高すぎるのか。

「……」

【ピロピロン】

パラメータを弄る効果音と、時折鳴る俺の足踏みの音だけしか聞こえない空間に、異質な電子音が軽快に鳴る。

何なのだろうと思ひ、説明書の内容を思い出しながらとある一言を言い放つ。

『メニュー表示』

俺のコマンドにより表示されるのは、選択不可能の項目がいくつかあるメニュー画面。

選択可能となっている数個の内一つ、メールのアイコンに触れる。

確か、思考だけでも十分操作できるんだったか。機会があればやってみるか？

そんな事を思い出しながら、通知音の元であるメールの一つを開く。

母の名前が差出人の項目に書かれている。知識としては知っていたが、こちらでもアドレスの登録さえすれば現実世界からのメールも受け取れるらしい。

『差出人：母 タイトル：お昼の時間よ〜』

『その頭に被ってるものを取らないと、うっかりコーヒーをヘルメットにこぼしちゃうかもしれないわ』

タイトルだけで本題を全て伝え、本文の中身にユーモアのある文章を書き詰めるとは。俺の母が愉快なのは、何時になっても変わらない様だ。

メニュー画面に一緒に表示される時刻表示をみると、なるほど確かに昼飯時を示していた。

キャラメイクも一区切りとしよう。

メニューからゲームを終了させる項目を選択すると、視界が暗転し、意識が現実に戻される――

・ ・ ・

「あらま、本当に起きちゃった。ぶいあーるってところにもメールが届くのねえ」

頭に乗っかっていた装置を外し、食卓に向かえば母にそんな事を言われた。

あのVR装置を購入した時点で知っていたかと思っていたが。

「こう言っちゃうとアレだけど、半信半疑だったのよ」

へえ、半信半疑に。

まあ分からないでもない。今までテレビや宣伝で知るのみだった技術の最先端が、今手元にあるのだ。

一般人としては、よく分からない仕組みですごそうな物という認識だ。

「でも届いてよかったわ。ほら、今日のお昼は貴方が好きなハンバーガーよ」

ハンバーガーだと？ 例のバーガーレストランからお持ち帰りでもしたのだろうか。

しかし食卓に乗っている皿には、パンズもレタスもない、デミグラスソースを被ったパティ……もといハンバーグであった。またか。

むう、何時も言っている筈なのだが、母は相変わらずハンバーグの事をハンバーガーと呼び続ける。

何度指摘しても治らないのだから、俺は諦めている。

「ほら、冷めちゃう前に食べちゃいなさい。創そ也や」

現実に戻ってきってから空腹を感じていた俺は、母の言葉に反対もせず席に付いた。
頂きます。

「そういえば」

存分にソースの味の絡まった柔らかい肉を堪能していると、母が話しかけてくる。

食事を進める手は止めず、耳だけ傾ける。

「この前お部屋のお掃除をした時、こんな物が」

——は。

目を見開き、ハンバーグに刺さったままのフォークを忘れて固まってしまった。

母が手に持っているそれは、俺が封印するように保有していたノート……、所謂、黒歴史である。

当時の俺の奇妙な感性でもって書き、そして描かれた一冊だ。

「いやあ、創也って以外と絵が上手なのね？ 絵描きに就職しようとしなかったのかし

ら?」

それはどうでもいいんだ母よ。今すぐそのノートを、そのまま俺の手に渡すのだ。

だからページを捲るな、その中身を見るな、微笑ましそうな顔をするんじゃない!

しかし今の俺は動揺しきっていて、まるで凍結されたように動かない。思考も殆ど停止している中、あの一冊をじっと見つめることしか出来なかった。

「あら?」この子可愛いわねえ。この女の子は貴方が考えたの? それとも初恋相手がモデルだったりして!」

そう言つて俺に見せつけてきたページは、当時の俺が思いつくがままに書かれたであろうキャラクターが並べられたページだった。

そんな事を言われても、その本のキャラクターの7割以上は女性なのだが。それよりもその本を今すぐ手放してはくれないだろうか。

一部、奇妙だったり、際どかったりするキャラクターまでもが居るのだから、勘弁して欲しい。

「……確か、キャラクター、って言うのかしら?」

母がその言葉を発した直後、俺はピシリと固まった。

脳裏に過ぎったのは羞恥心などではなく、何かの輝きであった。

一瞬だけ光がピカリと輝いたのは、アイデアを伴う豆電球によるものか、あるいは何かの神がもたらした救いの光だろうか。どちらなのかは知らないし、誰にも分からない。い。

けれど、その光が俺の動揺と羞恥を掻き消し、そして行動力を呼び起こしてくれたのは確かだ。

俺は右手を真つ直ぐ伸ばすと、黒歴史ノートを掴み取る。特に強引に引つ張る必要もなく、母はあっさりと手放した。

本を取り戻した俺は、まるで思い出すかのようにキャラクターのページを丁寧に、何度も捲り……、そしてとあるページに辿り着いた時、俺はこの本を書き上げた過去の俺を褒めたくなった。

俺の様子を見ていた母の視線が、まるで「一体どうしたの？」とでも言うように訴えかけてくる。

しかし俺はその視線にさえ気にならず、俺はそこに書かれた文章と立ち絵にのみ意識を向けていた。

ページ毎に書かれている「キャラクター」を説明する文章。その殆どは立ち絵などは描かれていないのだが、とあるページだけは例外であった。

俺は、“彼女”の姿をじっと見つめた。

頭に六法全書でもぶつけられたかのような錯覚をなんとか押さえつけ、その姿の横に書かれた文章に食い入るように読み始めた。

ケイ

・若くして老熟した精神を持つ。

・本質はややお茶目な性格。

・その経験から、戦いの技術、特に魔法に関しては横に並べる者は、世界中に数人居るか居ないか程度。

・未来の数十年後、とある日に恋人を亡くす事を、彼は経験していた。この運命を覆すため、長年の研究を経て作り出された魔法を使い、誕生^{セロ}へと時間を巻き戻したのが、彼女だ。迎える二度目の人生で決意したのは、来る日の為に、誰かを守る力を高める事。これ一つだった。

が、何かの間違いか、2度目に自身が誕生したその日、性別が反転していたことに気付く。元は男性だった筈が、今世では女性として命を授かった。授かってしまう。

元男性とは言え、女性としての人生を16年間歩んできたので、心身ともに女性のそれに染まりかけている。変わらないのは、前世から染み付いた、彼女への想いだけだった。

「……」

その設定を見て、俺はほんの数秒の時間を思考に費やす。

……そう言えば、あのゲームでは男でも女性キャラで遊ぶことが出来る。

それと、演技ロールプレイを行う者たちもある程度居ると聞いたことが……。

思考の末、口が右の頬へと引きつられる。

残りの食べ物をお早々と口へかきこむと、母の事を見向きもせず、再びVR世界へと

飛び込んでいった。

・ ・ ・

はて、さつきまでこの空間には、唸り声を上げるマネキンがいたはずだが。

しかし今では、迷いもせずキャラクターの容姿を次々と変えていつているマネキンが

代わりに居る。

しかも今度はさつきとは違って、作っているのは女性の姿である。

一体どんな変化があったのか、姿を組み上げる作業には迷いがなく、完成した所で『モデルデータ保存』と書かれたパネルに触れ、作業を止めた。

「……」

その女性は銀髪を持ち、ポニーテールの形で纏められている。

裾がやや短めの灰色のマントで肩を包んでいて、その下に白いシャツを着ている。

スカートを履いているが、腰の辺りにポーチが備え付けられたベルトが巻き付いている。

どこか見覚えがあるその姿……、いや、見覚えのあつて当然の姿がそこに在った。

年は10代の真ん中辺りか、それぐらいの若さの姿のそれを作成したマネキンは、ただその姿を見つめていた。

その視線に性的な意図は全く感じられない。ならば無感情に視線を向けているのか。しかし、それもまた違う。

ならば、その視線をどう例えるべきか？

絵を評価するように見る絵師の視線か、

決闘の場でお互いを睨み合う剣士の視線か、
作り上げた砂の城を見上げる子供の視線か、

あるいは……

第一章 俺はケイである。

ウチのキャラクター、出会う。

『ミッド王国』

『5つの国は、東西南北とその中央に位置している。』

その中央に位置するというのが、このミッド王国である。

この国は、他国全てと面すると言うこともあり、それぞれの国に分かれて分布しているエルフ、ドワーフ、ドラゴナー、そして人間が入り混じっている王都の大通りを目撃することができる』

・
・
・

自前情報では、そう聞いていた。

そして実際にも、そうだった。

「どうやら俺は噴水のある広場に出てきたらしい。吹き上げる水の匂いが、やけに涼しげだ。」

「感覚が殆ど再現されているこの世界。足を踏みしめれば石畳の感触が返ってくるし、空から差す太陽の光は、肌の上から温かみを伝えさせてくる。」

「すごい……」

あの文面通り、エルフにドワーフにドラゴナーに人間と、やや人間の割合が多い気がするが、概ね均一に入り混じっている。

街並みに関しては、現代では全く見かけない構造物ばかり。歴史の教科書にあるモノクロの写真資料に、少しばかりのデフォルメとファンタジーを加えて色付けた様な街並みが見られる。

「感嘆して思わず出た言葉に、思わず喉を抑えてしまった。」

「……」

声が出た。しかし男の声ではない。

この姿の性別は女。なれば、その喉から出て来るのは女声。

なるほど、この『ケイ』は、こんな声をしていたのか。なんて思う事はない。この様な声を設定出来たのは、キャラクタークリエイトの機能の一つによるお陰である。

「あ、あ……。完全に女の声だ」

またまた感動してしまった。

うむ、すごい。新体験だ。ボイスチェンジャーだとか言うレベルではない。

試しに俺は、簡単な言葉を何回か声にしてみる。

「俺……いや、違う。私はケイ、今は女で、随一の大魔法使い。……あ、魔法剣士か」とにかく、私はケイである。

その事を何度も認識して、その事に何度も感動していると、ふと視界がぐらついて、バランスを崩す。

「う……………」

なんだか気持ち悪い。

一体なんだ？ 乗り物酔いに似ている気がするが、そもそも乗り物などには乗っていない。

頭がフラフラとするのを、噴水の端を掴んで抑える。

そこまでして、そういえばと、説明書の一文を思い出す。

「VR酔い……………」

その説明書によれば、これは一時的なものらしい。と言っても、これがいつまで続くのかまでは分からない。

まずは落ち着きたい。そう思って、目に付いたベンチへ向かった。

この世界は、見れば見るほどに精巧で、現実じみていて、しかし現実世界ではなく、そこには魔法が実在していて……。

とにかく、すごい。

……しかも俺は、その魔法を使うことができる

「VR酔いも少し落ち着いたか……。えっと、『ステータス』」

目の前に、半透明の板が出現する。そこに記された情報が、俺の能力値を示している。職業、魔法剣士。スキル欄も呼び出せば、その職業に相応しい程度のスキルが複数並んでいた。

戦う分には不足はないだろう。下級のモンスター相手に限つての話だが。

戦うといえ、初期の装備として安価な武器防具が与えられているようだ。

ついさつき気付いたが、腰には短剣が鞘に収まっている状態で固定されているし、ポーチの中には回復薬があった。

防具も、申し訳程度の物だったが、ある。

それと、もう一つ。

チュートリアルノートと表紙に書かれた本。これもポーチの中に入っていた。

チュートリアルと言うのであれば、説明書をちゃんと読むぐらいの慎重派である俺が

無視する訳には行かなかった。

相変わらずベンチで寛ぎつつ、ノートを開いてみる。

目次。この世界について、システムUI関係の使い方、アナタの身体、スキルの使い方、戦い方……。

情報量としては多くもなければ少なくないが……。

「こんにちは！」

「え？」

すぐ横から声。そこへ振り向くと、何時の間にか少女が隣に腰掛けていた。

晴天の青空のように青い髪をおさげにして、魔法使いっぽい格好をしていた。

ただ単に魔法使いと呼ぶには可愛らしい、女の子らしい装飾が多かったから、どうしても「ばい」と後ろについてしまう。

そんな少女だった。

「あ、こんにちは、は」

何故だか緊張して、挨拶の一声さえも喉に詰まる。しかも出てきたのは夕方以降の挨拶。

この喉から出てくる声が女の物だからか、それとも相手が女の子だからか。

それとも、この身体と中身の違いが、他人との関わりを抵抗を感じさせているのだろうか。

「もしかして初心者さんですか？」

「え……つとー」

俺らしくもなく、目を泳がせる。

いや、落ち着け。今の俺はケイだ。彼女ならどう答える？

答えるのは俺じゃない、私だ。

「……うん。初めてここに来た。凄いな、この世界」

自己暗示のように自分自身に訴えかけると、不思議と言葉が喉から出てきた。

はて、俺には演劇の才能などあっただろうか。

目の前の少女は、「やっぱり！」と言わんばかりに頷いた。

「つて事は、VR自体初めてだったんですね！ VR酔いの方は大丈夫でしたか？」

「うん。今落ち着いた所」

「それは良かったです！ 私も一番最初は辛かったですけど、後はまたログインし直しても大丈夫なので、安心してください！」

……純真無垢な笑顔とはこの事だろうか。俺には眩しく見えて、思わず目を逸らした。

「心配してくれてありがとう……」

「いえいえ！ あ、そうだ。私の名前はレイナって言います！ 魔法使いですけど、ポーション作製も兼ねてますっ」

「私はケイだよ。駆け出し魔法剣士って所かな。よろしく、レイナちゃん」

「はいっ。よろしくお願ひします、ケイさん！」

元気の良い返事が返ってきて、目の前の少女から滲み出る若々しさに目を逸らしていると、ふと「何がよろしくなんだろう」と疑問に思う。

これから彼女に、何かよろしくされるのだろうか？

「それで……何か、私に用事があるのかな？」

用事がないのであれば、このままスライムなりゴブリンなりを手慣らしに狩るつもりだが。

「あつ。い、いえい！ 特にこれといった用事はないんですけど……」

「？」

それにしても、何やらモジモジとした様子。

頬を紅く染めて、目線は地面と私の顔を行き来している。

まるで告白目前の葛藤でもしているかの様な振る舞いだが、実際にはなんなのだろうか。

なるべく穏やか表情を維持して、彼女の言葉を待つ。

「そ、その。お友達になつてくれると……」

「友達？」

ともだち。

なるほど、ともだち。

……え、大丈夫か？

彼女の頭というわけではなく、私という存在が友達になるということに対してだ。

「その、こちらでは女の子の友達が少なく……もし良かったらで良いんですけど、ど、
どうか……」

要するに女の子の友達が欲しいらしい。

彼女は、この俺に向けて、そう言った。

そう、この俺にだ。

どうしよう。

これは、「中身の性別は違うのでご期待に添える事は出来ない」と辞退するべきか。し
かしやんわりと断つたとしても、彼女の表情が曇ってしまうのは間違いない。

どうすれば良い。どうすれば良いのだ。

付き合いの長さは短いどころか、数分もしないぐらいだ。

お互いを全く知らないに等しい現状で、お友達になると言うのはお互いにとって良い結果をもたらすとは思えない。

だがあの表情を見る。心配そうに、じつと俺の返事を待っている。

あの少女は、見知らぬ女性に声をかけ、お友達のお誘いをする程の勇気を振り絞ったのだ。

これを断る事が何を意味するかは、分かっている。

「……私じゃ、ご期待に添えられるか分からないけど……」

気付けば、言葉は勝手に出ていた。

悩みに悩んでいる俺に、痺れを切らしたかの様に、口は言葉を紡いでいく。

「キミが望むなら、友達になるよ。私、そんなに友達付き合いには自信ないけどね」

ああ、言ってしまった、口に出してしまった。

OKの返事が出ってしまった。

ケイの正体は俺だと言うのに。俺だと言うのに………！！

しかし俺は、彼女の期待を裏切る事なんて、出来ない！ 出来なかった………！！

「………！！」

……ああ、目の前の少女の笑顔を見る。

俺は、あの笑顔を守ったのである。

俺は守りきったのだ。

・
・
・

……俺は、初ログイン最初の10分で何をやっているのだろう。

お互い『友達の証』と呼ばれるカードを交換する事になったが、これはレイナの手伝いもあつて、俺でも滞りなく出来た。

このゲームでは、お互いのカードを交換する事でフレンド登録がされるらしい。社会人がよくやる名刺交換を想像させる方法で、どうにも友達になる為の儀式としては微妙に思えた。礼節というものが無い分幾分か楽か。

対してレイナは、非常に楽しそうにカード交換をしていた。俺が乗り気じゃなかった事には気づかないほどに。

「あの、よろしければ、何かお手伝いしましょうか？ 一番最初の頃は大変なので、私程度でも少しは助けになると思っています！」

フレンド欄に載っている『レイナ』の名前を見つめっていると、横からそんな提案が飛んでくる。

「そんな、悪いよ。外に出て、ちよつと戦い方の確認するだけだし。ついでにレベル上げも」

「いえいえ、親睦を深めるついでですよー!」

俺の手慣らしに付き合わせる必要はない。

そう思ったのだが、レイナは俺の遠慮に構わず付き合うつもりらしい。

「まあ、それでも一緒に居たいなら、止めないけど」

「い、一緒に……、お、お友達なので当然ですよ!」

当然の事らしい。俺も友達と言うものをあまり良く理解していないが、そう言う事なのだろう。

それに、見たところ善意と友達としての期待から来る提案の様だし、断るのもレイナを落ち込ませてしまいそうだ。

……そうだ。ついでだ、早速「先輩」に質問してみよう。

「そうそう。ちよつと質問いいかな、レイナ先輩?」

「せ、先輩?」

「うん。私よりもこの辺りに詳しいでしょ? 何処か、良さそうな所はあるかな?」

「先輩……私が先輩……えへへへ」

ダメだ、聞いちゃいない。

・ ・ ・

王都を出てしばらく歩くと、道の外れの所々にモンスターを見かけるところまで来た。

遠目に見ても分かる。スライムだろうか、不定形の水色がのっそのっそと地面を這っているのが見える。

「魔法剣士さんなら、もう少し先に行っても良いと思いますよ。この辺りのモンスターは、本来戦闘しない職業の方が、改めて戦闘スキルを習得したい時ぐらいしか用事がありますね」

ふむ。

スライムは生産職の戦闘訓練に良いという事で覚えて良さそうだ。

「なら、無視してもつと奥かな？」

「そうなります。あ、私は伐採場周辺がちょうど良かったですね。タイミングが良ければ、木こりさんが周囲の安全確保という依頼をしてくれれます。その時は報酬がちよつと出るのでお得ですよ」

「依頼か。そういえば依頼処っていつの間があるんだっけ」

「カフェ兼居酒屋兼交流場って感じのところですね。王都の依頼処は凄いですよ。周辺の村や町、そして他国の依頼さえあるぐらいですから」

「ほん」

「今度私たちで行ってみましょう。……あ、ここから左です。馬車がありますよね、あれが丸太を運んでいる馬車です」

つまりあそこらへんが伐採場というわけだ。

寄ってみると、なるほど確かに切り株やら草のない土やらが見つかると。今も木を切り倒しているのか、倒れるような音が時々聞こえる。

「木こりさんー！」

レイナが突然大声を張り上げて、この視界には見えない彼らを呼びつけた。

……しかし、ちよつとばかり待っても誰も来ない。ちょうど忙しい所に来てしまったのだろうか。

「来なさそうだけど」

「そうですね。……うーん、まあ、木こりさんから報酬を頂くのはついでですし。このまま狩りに出かけましょう！」

「うん、そうしよう。あ、森の中で迷わないようにしないと」

「大丈夫です！ 帰ろうと思ったら太陽を頼りに東に行けば良いので！」

「頼もしい。じゃあ、ピンチになったらよろしくね？ 頼りにしてるよ」

「ケイさんこそ、頑張ってくださいっ！」

天使だろうか。しかし彼女は魔法使いである。

魔女の三角帽子が彼女の歩調と共に揺れるのを見て、俺も横に並んで森の中への歩みを始めた。

ウチのキャラクター、戦う。

『セントル王都北伐採場』

『未だに発展を続ける王都。その発展に必要な物は、決して少ないとは言えない。その中でも代表するのが木材だ。』

この伐採場は王都、又は近隣の町村への木材供給の役割を担っているが、しかし本来の目的はそれではない。

ここから北西のやや遠くに位置する、常闇の森。これの拡大に対処する為の拠点となる砦を建設する、その前準備である開拓、そして資材確保が、この伐採場の本来の使命である』

森。こういった地形は、獣道を辿るにも人間の足では歩きづらい。

木の根につま先がつかえ、僅かな凹凸が足を掬い、気を抜けば枝の先が自身の身体に切り傷を作る。

酷いと、そもそも進路が倒木や枝葉で塞がれていることもある。この辺りはそこまじやないが……。

「……」

『スキル「悪路踏破」を習得しました』

「あ、スキル習得」

都会っ子には辛い環境だが、それは現実の話。そろそろうんざりしてきた所で、スキル習得を伝えるメッセージが視界の傍に現れた。

「スキル……あ、そういえば最初はスキル補正がないから大変でしたよね！ ごめんなさい、私気付かなくて……」

「え？ いやいや、レイナはよくやってくれてるよ。それに、どっちにしろ習得する為に歩かないとだろーし」

心なしか歩くのが楽になったかもしれない。

それにしても、こういった動作の補助をする様なスキルと言うのは、機能する時は不思議な感覚に見舞われる。

不安定な地面を踏んでも、体のバランスは崩れない。今までの様に転ばない様に踏ん

張らずとも、身体はちゃんと立ってくれる。

違和感というか、なんというか。……そう、乗り慣れない自転車を、誰かが転ばない様に支えている感じ。補助輪と言ってもいいのだが、とにかくそんな感覚だ。

「これ、スキル抜きでも元々森を歩き慣れてたら、どうなるんだろう」

「スキルとは別で、『なんとかの才能』とか、そういう項目が出てきますよ。しばらくこの世界で活動していったら、現実の特技に対応したのが揃ってきます」

「なるほど」

俺なら何が特技となるのだろうか。母の教えによって料理には多少心得があるから、その辺りかもしれない。

未だに母からは免許皆伝を貰っていないのだが。皆伝されると何があるのかは、知らない。

……さて、VRと言えど、ここはゲーム。

もしかしたら料理の勝手が違うかも知れない。

「料理はやった事ある？」

「はい、ありま……ああー」

「へ？」

「もしかしてケイさんもお料理をしてるんですか?! でしたら後で一緒にお料理しま

「しょうー！」

「え、あ、うん」

テンションの上がり様に驚いてしまった……。

いや、レイナは料理を嗜んでいる様だし、この世界での料理スキルについて知らない
と言うことはなさそうだ。

「えつと、現実でやるのと似た感覚なのかな？ 料理って」

「そうですね！ 実際の技術がない場合は、スキル習得時にガイドが発生しますけど、技術があればそれをすつ飛ばして完成させられますし、加えてスキルのレベルが高かったら手順の簡略化や手法の発展、更なる品質の向上も図れます。あ、そのスキルの『才能』が発生すると成長ボーナスも入りますよ」

「現実の技術とこっちのスキル、両方あって損は無いんだね」

「はい！ 運動神経に依るスキルに関してはちよつと違いますけどね」

「ふんふん。やつぱりレイナは物知りだね」

「えへへ、しつかり勉強してるので！」

可愛いなこの魔法使い。

さて、ここまで森を歩いたんだ。敵にエンカウントしないと言う事は無いはずだが

……。

レイナに聞いた話では、この森に生息するモンスターの種類はやや多目。狼と蛇にカラス、その他多数と言ったところだが、危険なのが熊と猪である。

「……一応、痕跡とか探して追ってみる？」

「やってみます？」

追跡やストーキングの心得は無いが、まあやらないよりはマシだろう。

「んー、と言つても……私、狼がマーキングで縄張りを作るっていう知識しかないけど。

あと……匂い付け？ あ、これは猫だっけ」

「あとは足跡ですね。私もそういう経験はあんまり無いんですが……あ、居ました」

痕跡を探そうとしたところで、狼を発見。これを早いと思うか遅いと思うか。

どちらにせよ、これから俺はソイツに戦いに挑むのだが。

「よっし！ レイナ、後は頼むよ」

「はいっ」

相手もこつちを認識している様だが、動いている様子は無い。

ならば先制攻撃はこつちのもの。魔法の詠唱を開始する。

『詠唱』

この世界における魔法は、殆どが詠唱を必要とする。

各魔法にはそれぞれ必要な詠唱時間が定められており、それを超えた詠唱を続けると『追加詠唱』となつて威力上昇等の強化が発生する。

狼がこちらを様子見している間にできる限り詠唱を続けて……。

「『ファイヤーボール』！」

初期で既に習得していた魔法、ファイヤーボールを放つ。

全ての属性のボール系を習得しているが、攻撃といえば炎属性だろうという事でこれを選んだ。

戦闘態勢にも入つてなかつた狼はそのまま焼かれて、ダメージ。

初期の魔法というだけあつてか、一発とまでは行かない。……が、無視できないダメージはあるはずである。

牙と爪ぐらいいしか攻撃手段のない狼は、やや細い筋肉を浮かばせた体を動かして俺の方に接近する。

「『詠唱』」

詠唱中、移動したり大きな動きをとると、詠唱の効果は失われる。

勿論攻撃されても失われるが……。

「『エアボール』！」

風属性の魔法は、極端に射程が短い、詠唱時間も短い。

この小さな距離を牽制で間合いギリギリに抑えるには、ちょうど良い魔法だ。当てる事は叶わなかったが、攻撃を察知して俺を攻撃せず警戒だけ続けた。警戒と言つても、隙を見せればすぐ攻撃してくるだろうが。

「的当ては終わりかな」

遠距離攻撃出来ないこともない距離だが、この状態だと風属性でも詠唱を狙われるかも知れない。

魔法「剣士」には心細い気がする短剣をしっかりと握りしめて、敵に向ける。

武器がある分、間合いは俺の方が広い。しかし、牙や爪程度の間合いでも十分に届かせる程度の機動力が相手にはある。

なら、カウンター狙いだ。

「そら、来い！ 私がこの短剣で迎え撃つぞ！」

戦闘によつて昂つたテンションで、相手を挑発。でも俺としては片手剣ぐらいが良かった。

テンション任せの挑発に、しかし敵は反応しない。それどころか、敵の顔は真上に向かっている。

そして響く、狼の遠吠え。

……今遠吠え？ つて事は……いや、それはとにかく、この隙を見逃すわけには行か

ない！

『詠唱』——」

「あ、仲間を呼んだみたいです！」

「——『エアボール』」

仲間を呼んでいる隙に攻撃。怯んだ。距離を詰める。切り裂く。

危うく反撃を受けそうになるが、牙を向ける顔を目掛けて攻撃すると、その牙の前に俺の刃が突き刺さる。

すると敵は光の煙だか粒子だかを傷口から漏らしながら、倒れた。

「……ねえレイナ、狼の増援って何匹来ると思う？」

「ええつと……少なくとも2匹は。平均5匹来るって聞きますけど」

「……ここは初心者向けの狩場じゃなかったんですかあ?！」

「撤退、てったーい！」

「は、はい！ あ、ドロップ素材……」

「そんなの無視無視！」

初めての戦利品を置いて行くのは勿体無いが、それ以上に初戦闘でやられるのはお断りだ！

スタミナ値の低下を示す、視界が若干暗くなり動きが鈍くなる挙動を経験しつつ、西側へと走り続けた。とつくのとうに森から脱出しているが、俺たちが目指しているのは、安全地帯の目印である、草のない地面が伸びる王都への道であった。

森の中と比べるまでもなく歩きやすい平原を超え、俺とレイナはようやく道に合流することができた。

「はあ、はあ……いやあ、ここまで走ったのって何時ぶりだろう」

ぐで、と地面に腰を下ろして息を整える。

朝のランニングでもここまで全力で走る事はなかった。この身体に関しても、現実でも、体力の不足を思い知らされる……。いや、別に辛いつて程ではないのだが。

それよりも、魔法職なのにここまで走らせてしまったレイナの事だ。

女子力を欠かした様な仕草で地面に座っている俺に反して、彼女はお淑やかに息を整えている。

「大丈夫？」

「いえ……ちよつと疲れちゃいましたね。でも、なんか楽しかったです」

汗掻いても女子力高いな……ゴホン。

まあ、全力で走る機会なんて中々ない。だからか、途中からはどうしてか走る行為を楽しんでいた。

それも、俺たち2人。両方ともが。……いや辛い辛いんだが、妙に清々しい。

「やっぱり、お友達と一緒にの方が楽しいですね」

「そうだね。1人で走っても疲れるだけだし」

「はい。また走ってみたいですね、なんて」

「あはは。……このまま、ちよつと一休みしよつか」

出逢って数時間もしない2人。

お互いの気性が噛み合っているのか、それとも一緒にゲームをしているという仲間意識が手伝ってか、

「いいい」

「いえーいー！」

私が挙げた手の平に、レイナがハイタッチで返してくれる流れは、かなり自然だった気がした。

ウチのキャラクター、買い物する。

『魔法剣士』

『貴方は魔法の知恵を得た剣士である。近接戦闘への適性と、魔法による遠近距離への攻撃能力により、例えば単独でも戦いを有利に進められるだろう。』

貴方に必要なのは、強固な防御力で魔法の隙を守る騎士でも、後方から絶大な火力で支援する魔法使いでもない。力と、知恵と、そして孤独に耐える精神である』

．．．

1匹の狼と戦った後。一応スライムも短剣や各属性の魔法で相手しつつ、王都へ帰還した。

出発の頃には十分高かった太陽が、ふと見るとオレンジ色で滲んで西へ傾いていた。

「確か、1日1時間なんだったけ」

「はい？ ……あ、この世界の時間の流れの事ですわね」

この世界にいる間、どの様な理屈なのかは知らないが、俺たちプレイヤーの体感時間が引き延ばされる。

それが、「1日1時間」である。

言うまでも無く、この世界においてはこの言葉が意味するのはゲームが遊べる時間ではない。俺たちの過ごす1日が、現実での1時間なのである。

言い換えれば、俺たちが体感する24時間がゲーム内の1日であるが、現実での1時間でもあると言う事になる。

「ケイさんはいつまでやるんですか？」

「んー……決めてないな。その時の気分次第だけど……そうだね、まずは2日やってみるつもり」

「それじゃあ、お泊まりですわね！」

「そうなるね。あ、じゃあ寢床が要るのか」

太陽はまだ沈んでいないが、寢床を用意できるに越した事はないだろう。

……そういえば、この時代背景から鑑みて、宿屋の品質が心配だ。街灯やらが並ぶぐらいには文明が発達している様だが、実際のところはどうだろうか。

「レイナはどうしてるの？ 夜の間だけログアウトしたり？」

「私は宿のお部屋を借りてますよー。確か空き部屋があつた筈なので、もしかしたら同じ宿に泊まれるかもしれませんね」

ふむ……。

奇妙な出会いだったとは言え、折角の縁。ケイとしても、同じ宿に泊まれるならば喜んで泊まりに行くだろう。

打算は、まあ有るかも知れないが、その分の借りを返す事を忘れなければ良いだろう。「じゃあそこへの案内、お願いできる？」

「勿論です。どうせなら友達と一緒に宿に泊まりたいですからー!」

やけに「友達」に拘る子だな。

そう思いながら、うきうきと歩調を早めるレイナの後ろをついて行く。

……「ケイ」の言動を模倣する事に拘っている俺が言えた事じゃない。と気づいたが、俺は気にしない事にした。

しかし……速い。

いや、速いと言うか、滑らかと言うべきか。小柄なお陰か、人通りが多い道を難なく行っている。反してケイの体格は平均女性にプラスした程度のもの。同じ様に通り抜けることは出来ない。

加えて、レイナの背が小さいから、やけに見失いがちだ。

人混みをするすると通り抜けるレイナ。その間に居るのがドワーフとかならともかく、体格の大きい人だと彼女の姿がすっぽり消えてしまう。

「ちよつとー?!」

いよいよ追いつけなくなってきた。

この辺りは市が近い様で、人通りが多い。見失うのも時間の問題……いや、もう見失ってしまったかもしれない。

「レイナー!」

……返事が来ない。

これは失敗したかも。レイナが夢中になってしまっているのはともかく、到着する前にアクシデントでもあったら立ち会えない。

そうだ、レイナとは既にフレンド登録がされている。

フレンド相手ならばメッセージを送れると思いついて、その為にメニューを――

「わ」

人混みの中で立ち止まったのがいけなかったのか、背中から押されてバランスを崩す。

「すいません……」

そうだった。ここで棒立ちしていたら邪魔になるし、怪我しかねない。

せめて道を外れれば人混みを回避できるだろうと、無闇に人の流れに逆らわない様子つつ、なんとか道の端の方へと向かっていった。

・
・
・

「落ち着いた……」

建物と建物の間、大通りから伸びる小さな裏路地に辿り着いた。

ちよつとばかし暗いが、まあメニユーの操作には関係ない。

手慣れている訳じゃないが、かと言って戸惑いがある訳でも無く、それらしいアイコンを2つ程選択したところで、メッセージ画面が現れる。

ここまで来れば、あとは送るだけだ。

『ごめん、ついに行っている途中ではぐれちゃった。案内を始めてくれた所の少し先にある市場に居る』

「……よっ」

いや、はぐれた時点で良くはないのだが。とりあえずこれで送信。あとは相手の返事を待つぐらいか。

「……それにしても、疲れた」

大きく息を溜めて、力を抜く様に息を吐く。

精神的な疲労と言うべきか。やはり、俺がケイである様に行動すると言うのは負担がある様だ。

性別が、と言うのもあるが、どうしても“相応しい”態度と言うのを考える頻度が高くて、頭が休まる暇がない。

「……しかも、声が、な」

それに、あんまりこの状態が続くと、本当の身体で本当の声を放つ時に違和感が現れそう、少し不安だ。……こればかりは致し方無いが。

「……はっ」

もしかしたら元の声を忘れるかもしれない。

という考えが頭の中に浮かんで、馬鹿な考えだな、と一笑に付した。

『ガコン』

「うん?」

何か地面に落ちたのだろうか。音に反応して顔を上げると、何かが見えた様な気がして、

「失礼、お嬢さん!」

「わ」

その姿が俺のすぐ目の前を掠るように通り抜ける、目で追いかけるも、不思議とその黒い姿は裏路地の影に同化しているように見えた。

自身の目を疑い、一度瞬きをしてしまうと、その存在を知覚することは出来なくなってしまった。

「? ……?!」

「こつちだ! 奴を逃すな!」

「また来た?!」

今度は軽装寄りの鎧を着た騎士達が、カシヤカシヤと金属の鳴る音を伴ってやって来る。

いや、なんだこれ、なんだこれ?! イベント?!

「その冒険者よ、黒尽くめの姿を見ておらぬか!」

「と、通り過ぎて行っただけ……あっちの方に。でも見失った」

「この先は行き止まりになっていきます！」

「つち。また化かされたか……。隠し扉を探せ！ 奴は幽霊や何かじゃないんだぞ！」

「……ご協力感謝する」

「え、ええ……」

「……ここから離れよう。」

どこの世界でも路地裏には関わるべきではなさそうだ。

・ ・ ・

背後の騒ぎをわざと無視して、先程の人混みに戻ってきた。

辺りを見渡すと、買い物袋やら何かを抱えて帰っていく者が目立つ。いい加減日も暮れて、客足も落ち着いてきたのだろう。

お店自体は、荷物を纏めている所とそうでない所があるようだ。

「……」

気分転換も兼ねて、少しだけ寄ってみよう。レイナが返信するまで。

歩く方向を変えて、並ぶお店を見て眺める。

品揃えは……この近くには食べ物やアクセサリ類の多いようだが、どうやら向こう側には冒険者が好みそうな品揃えが遠目にでも見える。

一般人と冒険者の棲み分けがされているらしい。

客寄せの声に時たま目を向けつつも、俺は向こう側で物色して見る事にした。

ここから見えるのは、瓶に詰められた液体……所謂ポーションの類だ。そして武器や防具だが、これに関しては金属物が少ないように思える。

そう言えば、所持金は幾ら有っただろうか。

ポーチの中身を探り、そこから財布を取り出して見る。5枚の1000Y紙幣が入っていた。

「……日本円？」

と疑ってしまったが、右側に載っている人物はこの世界に生きる人物の様だし、まあ違うだろう。

それにしても著しく似ている気がするのだが。

露天の値札を読んでみるが、安い値段をしている所で装備が1000Y前後。高くても5桁6桁であるが、その店番は冒険者という風な身なりだ。ダンジョンか何処かの掘り出し物を商品としているのかもしれない。あとはお下がりか。

ポーションを始めとした消耗品は、少なくとも200Y以上はするようだ。

……そうだな、先ずは剣が欲しい。

そう思ったのは男の性だろうか。でも剣が欲しい。

短剣だとリーチが心許ない。例え叩き切る様な切れ味の物でも、それなりの長さの物が欲しい。

攻撃する為に短剣の距離まで接近するのは少し怖い。

露天を見渡し、これぐらいかなと思える様な剣を見つける。

「こんばんは。……あ、4300Yか」

期待通りの刃渡りで、一見片手でも扱えそうだが、今の俺には高い。その分良い品質をしているのかもしれない。

「こんばんは、剣をお求めですか？」

「うん。片手剣を」

「職業をお聞きしても？」

「魔法剣士」

「ほう！ 魔法剣士、珍しいですね」

……珍しい？

と言うのは、この職業は人気がないと言う事なのだろうか。

「物理と魔法という2面の両立が、魔法攻撃力と物理攻撃力の物足りなさを招きます。……紹介ではこの両立が利点とされていましたが、決定打の少ない職業と云うことで不人気になってます」

……あー。

「ごめんなさい名前とフレーバーテキストだけで選びました。

だってケイの設定に妙に似合ってるんだし、仕方ないじゃないか。

「……多様な状況に対する対応能力も確かに利点ですし、属性持ちの武器を持てば、それを覆す力を発揮するらしいですが」

「おお、成る程。ありがとう」

「因みにこの商品は純粋な物理武器なので、お勧めしません」

……属性持ちの武器って言ったたら、それだけで予算オーバーしそうだな。

そしたら、依頼で稼ぐべきか？

しかし依頼をこなすための武器が欲しい。ついでに防具も。

「……親切にしてくれてありがとう。ついでにコレの数字が少なくなったりは？」

「しませんね。初心者知識不足に乗っからない分、良かったと思ってください」

「そっか。仕方ない」

残念だ。

属性持ちの武器は、今は手に入らないだろうし。……そうだな、先に防具から買った方が良さそうだ。

「防具なら知り合いが向こうで露天開いてますよ。革系の装備を作っているので、興味があれば寄ってやって下さい」

革……それだ。

狼と戦ったときは、間合いを意識している時間が多かったし、立ち回りを邪魔しない程度の装備が良いだろう。

「ありがと。……あれ、待って。さつき心読んだ？」

「いいえ、商人の心得でございます」

「はあ……。まあ、お世話になる機会があったらよろしく」

「ええ、是非とも」

この商人とは関わらないでおこう……。

とは思いつつも、言われた通りに彼の言う露天に寄ってみる。

そこに並べられているのは……確かに毛皮や革を防具に仕上げた物が多かった。それと魔法職が好みそうな装束か。

そんな風に並べられた品物を前に座っているのは、エルフの少年である。

日本人の特徴をそのままに、ほっそりとした身体と長い耳だけ与えた様な姿である。

多分プレイヤーだろう。

……今更になるが、この世界ではNPCとプレイヤーを判別するアイコン等が表示されたりしない。

「ご機嫌様」

「ごき……。つていうか、その声は」

「私の声？」

「……ああ、やっぱりあんただ。レイナさんの知り合いだろ？ その声で大声出して呼んだ」

……ああ、あの呼びかけが聞こえていたのか！ 何事かと思つて身構え掛けたが、その心配は無用らしい。

ふむふむ。という事は、彼はレイナの知り合いだろうか。

「初めまして、私はケイ。君もレイナの友達？」

「僕はトーマ。友達……と言うよりは、知り合いに近い」

そこまで聞いて、そうなのか、と少し驚いた。

「へえ。あの子の性格なら、友達認定されても変じゃないと思つただけど？」

「いや、それが――」

【ピロピロン】

『レイナからのメッセージ 1件』

と、システム音と共に、レイナからのメッセージを告げる通知が現れる。

トーマという少年の声と被り、その内容も聞き取れなかったが……。

「ごめん、レイナから連絡。一旦失礼して良い？」

「……話の途中だぞ。まあ、仕方ないけど」

彼はげんなりとした様子であるが、タイミングが悪かったとでも思っていて欲しい。

『通知』

UIを意識してその単語を発すると、今まで通知されていた物の内容が全て表示される。

レイナとのフレンド成立に関する通知から、先程までの探検で発生したスキルを通して、そして最後にメッセージの件が表示されている。

メッセージの通知を選択すると、お互いのメッセージログが現れる。

『ごめんなさい！ 宿屋に着いて要約気づきました……今から迎えに行くので、ほんの少し待ってください！』

誤字を修正しない程に慌てているらしい。

忙しい子だと思いつつ、宥める様な言葉を、画面と共に浮かぶキーボードで打ち込む。

「そういえば君は何処に住んでる？」

「年樹九尾っていう宿、……レイナさんと一緒だ。と言うかその指一体どうな」
「ならちようど良い」

たつた今打ち込み終えた文章に、トーマの事を付け足す。

『慌てなくても大丈夫だよ。この市場も興味深い品揃えだし、のんびり見て回ってるよ。それにトーマに会えたから、彼が案内してくれるかもしれない』

「じゃあ、商売が終わった頃合いに案内お願いね」

「……せめてYESかNOかを聞いてからにしてくれるか？」

「YESで」

「あんたが質問する側だ」

捻りのないツツコミどうも。

時にはシンプルな物がベストだとは聞くけど。

『優しい男だね。良い知り合いじゃないか』

2言だけレイナへ送信する。

エルフとしての特徴を除けば、彼の容姿は、穏やかで優しげな雰囲気少年といった風である。

「じゃあトーマ君。案内よろしくね」

「話を聞けバカ」

口調は少々荒いが……。

あと、こつちの口調に関しては、この性格を持つケイか、ケイを書き上げた過去の俺に言っつてほしい。

俺は心の中で舌を出した。俺は関係ありませーん、と口にはしないが。

『トーマさんですか？ 確かに優しい人だと思います。お願いしてもらってもきつと大丈夫です！』

『あ』

『トーマさんは革とか布の防具を作ってる方なので、その類の防具が欲しかったらお勧めしますよ！ 私の防具も安く修理をしてくれてますし！』

「へえ……本当に友達じゃないの？」

「だから知り合いだって……」

この世界での振る舞い方も、大分身についてきたかもしれない。

……ちよつと遠慮がなさすぎる気もするが。

ウチのキャラクター、泊まる。

『エルフ』

『元は精霊だった。元は神の使いだった。元はモンスターだった。元は異界の住人だった。』

彼らが何に由来する種族であるかは諸説あるが、エルフ達が受け継ぐ伝承も含め、どれも有力な説とは認められていない。

人間に比べ非力だが、魔法能力に秀でており、精霊と呼ばれる存在との親和性が高い。エルフが多く住う国であるノース魔導国を始めとして、学問を重視する傾向が強い』

・ ・ ・

「いや、悪いね。案内を任せてもらって」

最初は露天の後ろでトーマの長い耳をじっと観察していたが、何もしないのも悪いか

と違って、おもむろに近くの冒険者達に声をかけて客寄せしてみたり、そしたら彼に慌てて止められたりと、そうする事約数十分。

幾らかの品が売れたところで、商品を片付けて帰る事になった。

「あんたは少し遠慮と言うものを覚えてくれ……」

「友達に遠慮はいらないでしょ？」

「親しき仲にも礼儀ありと言うぞ。あと友達になった覚えはない」

相変わらず堅い男である。

俺も俺で随分と軽い態度かもしれないが。

一応、エルフのトーマの代わりに、彼よりかは幾らか高い筋力値を持つ俺が荷物を持っている。

頼み事の対価に多少の手伝いはしているつもりだ。客寄せが余計だと言われたのは解せないが。

何となく会話が終わっても、彼は会話を好まない性格なのか、再び口を開こうとしないか。

お互いの沈黙に何とも思っていないらしく、黙々と帰路を進んで行った。

「……友達と言えば、あんたに言いたいことがあったんだ」

トーマが思い出す様に沈黙を破る。

「言いたい事？」

「レイナさんだ。……彼女と友人になるなら、誠実に接してくれ。それが出来なければ、縁を切つてほしい」

「……うん？」

縁を切れ……？

そこまで言うとは。よっぽど俺のことを信用していないか、或いはレイナの事を過激に気に掛けている様に聞こえるが。

「ある程度話していれば知ってるだろうが……レイナさんは純粹すぎる。リアルの知り合いと一緒に遊ぶのは兎も角、あんたみたいな見ず知らずの人間と友達になるのは危険だ」

……なるほど、俺への不信とレイナへの過保護の両方らしい。

門等無用で縁を切れと言わないだけマシだろう。彼の言葉も、最もであるのだし。「わかったよ。万が一にも邪な思いは抱かない。誠実な友達でいる」

俺も彼女の無邪気には楽しませて貰っているが、一方で心配になることもある。というかこの現状もレイナのその性格から起因したものだ。

トーマに言われずとも、俺はレイナには誠実な関わりを意識するだろう。中身が“俺

“という事もあるから、より一層。

それにしても、トーマがそんな事を言うとは……。

よほど大事に思っているんだろう。いや、模索する気はミリもないが、しかしミクロ単位程度には気になる。もしかしたらトーマはレイナの兄かもしれない。

と、説教だか忠告だかを受けて、しばらく歩いているとようやく目的の宿に辿り着く。看板には、事前に聞いていた通りの4文字、『年樹九尾』と書かれていた。

「おお、なんとなく小綺麗」

玄関を入ってみると、入って直ぐの所にカウンター。そして机と椅子の並ぶ大部屋があった。いや、大部屋ではなく食堂かもしれない。

が、内装は完全な和式という感じではなかった。もしかしたら、と現代日本の旅館を想像してしまっただが、少し残念だ。

「ええつと、ここがカウンターか」

「呼び出しはそのベルだ。宿主さんが来る」

「ベルね。うん、ありがと」

「どうも。俺は部屋に戻る」

それじゃあ荷物持ちもここで終わりか。

預かっていた彼の荷物を渡し、階段を上がっていく彼を見送る。

「じゃあ」

「うん」

「さっきの件、忘れないでく——」

「お帰りなさい！」

「——……うん、ただいま」

階段の上で、トーマとレイナが鉢合わせた様だ。

遠くて少し聞こえづらいが、トーマの声の調子が少しだけ柔くなった様な気がする。

「ケイさんの案内をしてくれてありがとうございます。あと、これを。お手数を掛けた

ので、お礼ですー！」

「い、いや。いいよ」

「遠慮しないでください！ほんの気持ちですから！」

「……じゃあ、うん。……ありがとう」

「はいっー！」

……俺の時と対応の温度違いすぎない？

レイナとトーマの関係性に改めて疑問を抱くが、今のところは置いておこう。

パタパタという足音と共に階段を下りきったレイナが、俺を見つけて手を大きく振

る。

「やあ。……もしかして私の事待ってた？」

「いえ！ あ、いや……ちよつとだけ、まだかなーなんて思ってたりました」

「ごめんね。早速で悪いけど、ちよつとチエックインしてくる」

チエックインという言葉だと若干高級ホテル感があるが、まあそれはとにかく。

ベルをチリンチリンと鳴らして、カウンターの向こうにある扉の方を……に、居た。

「……」

言い直す。扉の方に居た。

半開きの扉から、顔を半分だけ出している女性が居る。

どうやら、俺がベルを鳴らす前から俺たちの事を観察していたらしい。

「あー……。君が宿主さん？」

「……あなたが、レイナの友人さん、ね。用意は、してる」

声が……小さい。

言わんとしてる事はわかるのだが、この場に少しでも他者の話し声があれば聞き落とすかもしれない。

「この紙、書いて。置いて。裏面のルールも、読んで」

「う、うん。わかった」

すると、ペンと紙、そして部屋の鍵をカウンター置いて、宿主は扉の方へ戻ってしまっ
た。

「……あー。うん。すごく、物静かな宿主さんだね」

「それと筋金入りの面倒くさがりさんです」

そこまで言うんならよっぽどなんだろうな……。

置いて行かれた紙を見ると、名前や利用期間に関する項目が一番初めに、続いてログ
インする（現実における）時間帯や、食事の希望、料理当番の項目……んん？

料理当番？

一体どう言う事か、と思い、ルールが書かれていると言う裏側の方を見る。

『共用部の設備等は大切に扱ってください』

『希望する場合、朝食（一食200Y）を提供します。朝食を取らない場合、カウンター

横のカレンダーに記入してください』

『この宿屋では、宿泊者が任意で朝食を担当して頂きます。朝食の為の予算と報酬は、そ
の日の夕方までに宿屋へほうりこまれます』

『場合によっては朝食を様意 用意できないかもしれません』

『家はだいいじに』

……らしい。

後半につれて文面が適当になっているのは気のせいだろうか。

「ちなみにこれ全部宿主さんの手書きらしいです」

「面倒くさがりつて言つてなかった？」

「……正確には、〃人と関わる事に關しては面倒くさがり〃です」

苦笑いで伝えられる。俺も苦笑いしてしまう。通りで文章が傾いてると思つたんだ。

この世界には印刷技術が無いのだろうか。せめてタイプライターがあつても良いだろうに。いや漢字が入り混じる日本語じゃ難しいか。

……つて、そうじゃなくて。

「ていうか、料理当番つて一体」

「紙に書いてある通りですよ。私たちがお料理するんです」

「……頭痛くなつてきた」

見たところ宿代は……相場は知らないが、装備の買い替え等で使いたい分を取つても、今の所持金でも7日間は過ごせそうだ。

料理を担当すれば、手数料を含んだ材料費を貰える様だし、実質更なる宿代の節約にも……今から順番に加わつても、俺の当番は暫く先になりそうだ。

「……まあ、料理は出来るし。一応チェックしておこう」

スキル無しでも料理自体は出来るらしいし、問題ないだろう。

一応試運転は要るだろうけど。

さて、特別目立った項目はこれぐらいか。後は適当に埋めて……よし。

「空きは……なし。じゃあここに置いておくね」

聞こえているかは知らないが、扉の向こうに一声だけ掛けてから鍵を持って階段へ向かう。

鍵に部屋番号が書いてあるから、迷いはないだろう。

「ケイさんの部屋番号は何ですか？」

「8号室だって」

「それじゃあ隣ですね！」

「お、先輩ちゃんが隣なら安心だね」

キイキイと軋む床に頼りなさを感じつつも、部屋へ向かう。

どうやら一番端の部屋の様だ。

内装は……予想以上に、そして期待通りだった。

清潔な室内である事はもちろん、もふふかベッドと木製の机と椅子が備えられている。床は何かの毛皮を使っているのであろうカーペットが敷かれている。

「良いね」

「この宿主さん、拘ってるので。他の宿が酷いというわけではないですが、宿賃以上の

価値はあります！」

「うんうん、確かに宿賃以上……あれ、そういやお金払ってないけど」

「あ、私が払っておきました！」

「おお、それはありがた……ええ？」

「いやいや、流石にそのお金ぐらいは払うつもりだったんだけど……」

「えっと、幾らしたの？」

「取り敢えず一週間で1600Yです。あ、一週間も泊まらないならキャッシュバックも出来ます」

「はい2000Y。生憎1000Yが5枚しかないんだ、余りは要らないよ」

「いえいえいえ！ 私の好意ですから、受け取ってください！」

紙幣がレイナの手によって丁寧に押し返される。

「いやいや。助けて貰ってばかりだからね。借りが多いと申し訳ないよ」

「いええそんな事は！」

「いやそつちこそ」

「いええ——」

「いいや——」

「……何やってんだよ、あのケイ」

結局、ご近所迷惑と言う事で、この場合はレイナが宿代の6000Yを、俺が10000Yを持つ、で決着が付いた。

・
・
・

宿は決まり、日は沈み、店はポツリポツリと灯りを消し始め。逆に街灯や民家の窓から光が漏れるのが見られる様になった頃。

「ん、暇だ」

俺は宿の部屋で孤独に寛いでいた。

このもふふかベッドはなかなか寝心地がいい。毛布を背にして横たわっているだけだが、この仮想の体が眠気に沈んでしまいそうである。

仮想の体といえば、ケイ。彼女の事だ。

今の俺は、言ってしまうえば「役者」のそれである。ロールプレイヤーとしては当然の

事当て嵌まる単語であるが……。それはとにかく、役者として振る舞うには問題が一つある。

俺は、ケイの事を殆ど知らない。

キャラメイクを終えてこの世界に降り立つまで、ずっと衝動の様なもので行動していたから、あれ以上の情報を知らない。

あれとは、そう。ケイの設定。或いはケイの人生のあらすじとも言えるあの文章。

そこには、彼女が人生2度目で且つ性転換の経験者であり、魔法と剣に関しては熟練していると書かれていた。

後は時間遡行に至る迄のきっかけだろうか。

「よくよく考えたら、知らない事だらけ、か」

……思えば、あの本。俺が黒歴史ノートと呼んでいる、あの本。

キャラクターの設定ばかりが並んでいたが、

「ケイにだけは、絵が……あつた」

そうだ。ケイ以外のページは流し見ていたが、確か他のキャラクターは文章で設定が書き上げられているだけだった。

だが、ケイには絵がある。それも落書きの様な、取り敢えず大まかな特徴だけといった絵ではない。なんというか……。綺麗だった。

綺麗、と言うのは……まさにその通りとしか言いようがない。

特徴はもちろん、明文化されていない特徴まで詳細に描かれていたのだ。体格、髪型、顔立ち、目つき、そして装備品。

最後の物だけはこの体に再現する事が叶わなかったが、そこまで絵が描き込まれていたので、俺はこの姿を正確に写すことができた。

それだけ、このノートを作っていた頃の俺は、このキャラクターにご執心だったのだろう。

最も、とつくにその頃の記憶など失せてしまっているのだが。

……寝てしまおう。

一度頭を休めて、明日には何か依頼を受けて小銭を稼ごう。

冒険だ。俺がこの世界に求めるのは、冒険と、それと程々な仲間である。

ああ、昔の記憶をすっかり忘れてしまった俺でさえ、冒険心というものは未だに根を張っているらしい。

そう思うと、なんだかい夢が見れる気がしてきた。

根拠もなくそう思って、天井から垂れる紐を引き、暗くなった部屋でベッドへ潜り込んだ。

……この世界、普通に電気通ってるんだな。

ウチのキャラクター、依頼を請ける。

『依頼処』

『冒険で得た財宝ぐらいならば、路銀を賄う分には足りる。が、財宝を得られる保証はどこにもない。』

装備の購入、その修繕、道具の補充、治療費。これらは、場合次第ではその額が天にまで届いてしまうとまで言われている。この金額を稼ぐ為に、いつしか冒険者達は、あらゆる町や村で依頼を請ける様になった。

そして今日も、冒険者は資金と冒険の為にまた集う』

冒険者の朝は早い。

装備とは言える、という程度の心許ない防具を着込み、未だに買い替えていない短剣

を腰に提げる。

天候、見るからに快晴。

気温、比較的涼しげだが夏らしく湿った空気。

体調、仮想の空間で仮想の身体だと言うのに、寝起きの時点では快調である。

「行くか」

依頼処……ではなく、朝食に。

チュートリアルノートによれば、依頼処という施設は、

『討伐、採集、製作、雑用等の依頼を請け、報酬を得ることができる。また、逆に依頼を出す事も可能』

らしい。

フリーバーテキストめいた文章もあつたが、あれは説明の義務を二の次にしているから分かりづらい。

そこらのファンタジージャンルのライトノベルやゲームでは、依頼処の様な機能を持つ施設を「冒険者ギルド」と呼ぶことが多いだろうが、ここでは前述の様に呼んでいる様だ。

「なんで冒険者ギルドじゃないんだろうね？」

「あー。確かに、そうですね。あそこの運営は冒険者ギルドですし……」
何故だろうか。

その答えがなんであろうと弊害は無い、些細な疑問ではあるが。

……因みに、目の前ではレイナという女の子が朝食のベーコンエッグ、そして主食に類する食パンを食べている。

対面して席に座っている俺も同様に。

どうやら、彼女は今日も俺と一緒に行動したがつている様子だったから、依頼処に行ってみて、一緒に依頼を遂行するという予定を共有した。

具体的な依頼内容は決めていないが、魔法剣士としては、戦闘が伴う様な依頼が良い。それと拘束時間が少な目のものが良い。だから護衛依頼は考えていない。

「どんな魔法使えるのかな、そういえば」

「魔法ですか？ 例えば……爆弾みたいなのを実体化して投げられる魔法を最近習得しましたよ」

「実体化」

そういう魔法もあるのか。

今俺が持っているのは各属性のボール系魔法だ。それぞれ火、水、土、風、雷属性の

5つがある。

使い勝手は……ただ射出するという、シンプルな物だ。掌から放てるが、人差し指を立てても出来るかもしれない、らしい。……もし出来るのなら、その方が指向性を認識しやすいかもしれない。

「ケイさんはまだボール系しか持ってなんでしょうね。習得できる2つ上の上位互換に、ジャベリン系がありますけど、確か手に持って攻撃も出来たと思います」

「おおー」

「ただ、魔法使的には接近戦はご法度ですから……でも、魔法剣士なら上手く使えるかもしれませんね」

「良いねえ。早く習得したい」

「魔法書が欲しい、本屋や魔法道具店から買えますよ。もつと難しい魔法は、それ専門のお店に行かないと無いですが」

「なるほど。と言つても、今はステータスもお金もないから、後の話になるかな」

基本は、素材が秘めるエレメントを使用した魔法開発での習得になるが、魔法書があればこの過程をすつ飛ばして直接習得できる。

自分で開発すれば魔法をアレンジできるとの事だが……。

まあ、研究するにしても『知識』とか『思考』とかいうステータスが要るのだが。

確か魔法書の時は『思考』の代わりに……思い出した、『意思』が必要だった筈だ。身体系のステータスは兎も角、『知識』『思考』『意思』と言った、精神系のステータスは分かりづらい。4つ目の『魔力』は単純に分かるけども。

因みに身体系には『筋力』『器用』『俊敏』『感覚』がある。

自分の分は既に食べきり、レイナの食事もそろそろかな、とぼんやり待っていた頃、そばに寄ってくる誰かの気配を感じて、横を見る。

「あ、トーマじゃん。おはよう」

「おはよう」

「おはようございます。トーマさん」

彼は食事を終えたのだろうか。手に持っているのは食器ではなく、何故か革の胸当てがあった。鱗の模様が見える表面からして、爬虫類の皮だろうか。

「それは？」

「蛇革の胸当て。今、色んな種類の革で練習していて、これはその一つだ」

「へえ……素人目だけど、綺麗に出来てるじゃん」

「お前にやる」

「え」

渡される胸当てを受け取り、確かに爬虫類っぽい肌触りだなあと思いつつ、半ば放心的な状態になる。

「おおー。なんか見た目が物々しいです。なんか冒険者っぽいですね!」

「う、うん……。えつと、ありがとうね。でもどうして?」

「それは出来がわる……。いや、友好の印というか、そんなもんだ」

ああ、うん。なるほど。粗悪品の押し付けという事ですか。

チラと見てみるが、なんとなく縫い目や革の状態がやや悪い様に見えるか。大した問題には見えないが。

「まあ、ありがとう。上等な物が手に入っても大事に取つとくよ」

「いや、別に売るなりしてくれてもいいんだが」

「ふうん? ……じゃあ、勝手に扱わせてもらうよ」

後輩冒険者の知り合いでも出来たら、もしかしたら譲るかもしれないし。

その時までには手入れも欠かさず……。

「昨日、当たりが強くなつてしまったから……」

「え?」

「そう言うことだ。じゃあ、俺は部屋に戻る。もし点検や修復が必要なら訪ねてくれ。部屋は5番だ」

……ツンデレ？

俺への囁き声だったが故に言葉を聞き取れず、レイナが首を傾げる。それをよそに、俺の頭の中では、彼に対する印象が塗り替えられていた。

・
・
・

棚からぼた餅を得た私は、早速と独特な触り心地の胸当てを装備した。

ベルトである程度締め付け、道の上で軽く体を動かしつつ調整する。

付け心地は大分良い。女性の胸部に合わせた設計だから、胸はキツくない。

「どうですか？」

「うん、良いね。無料で貰えたのが不思議なくらいだよ」

これで少しは安心して戦えるだろう。

丁度良い具合に調整し終えたぐらいで、俺とレイナは依頼処に到着する。

中からすでに喧騒が聞こえてくるあたり、人気はかなりある様だ。

レイナが扉を開ければ、やはりその喧騒がドツと外に溢れ出てくる。

「おー」

見れば見るほど冒険者ばかりだ。鎧、剣、斧、弓、杖、そして肉体があらゆる所に見える。

カウンターで受付と向き合っているのは殆どが一般人だ。

左を向けば、あれは面会場みたいなものだろうか。机を挟んで冒険者と一般人が話し合っている。

「冒険者登録みたいなのは」

「ないですねー。やろうと思えば普通のパン屋さんだって依頼を受けれますよ」

「へえ」

「あんまり実力がないと、依頼主が却下しますけど」

なるほど。依頼主と冒険者が直接顔を向き合わせて、その判断をするのか。

「一応、依頼の受領から完了までを受付で手続きする物もあります。これは依頼主が手紙などで依頼を送り出している場合と、ギルドからの依頼の場合ですね」

「ふむん」

「……興味なさそうです?」

いやそんな事は。

「んー、まあ、習うより慣れろって言いますからね。早速依頼を見てみましょうか」

「そら来た」

「やつぱり。ケイさんはせつかちさんですね」

と言いつつも嫌そうには見えない。俺の新しい一面が見れたとでも思っているのか。

いや確かに、この通り目の前の冒険に我慢する苦手だ。むしろあんまり宜しくない、我慢は体に毒なのだ。

「冒険を我慢するほど落ち着いた性格はしてないんだよ」

「思ったよりやんちゃさんなんですネ……。選ぶのが面倒だったら、受付に頼むと技量に見合った依頼を持ってきてくれますよ」

なんとまあ親切な。

しかし成る程、うむ、うむ。

「自分で選ぼう」

「……それは良いですけど、決定する前に相談してくださいね？」

「分かったよセンパイ」

難しい顔で微笑む。先輩頼りも程々にしなければな。

さて、何が良いだろうか。

やはり戦闘系か、となればこちらへん。そこで一枚見れば、それは採集護衛依頼。す

ぐ横を見れば、短期防衛依頼。少し目線を左下に運べば、討伐遠征依頼。

依頼の難易度、危険度を表しているであろう数字が、青、黄、赤色の丸で印づけられて書かれている。青から赤まで危険度が少ない順として色がつけられている様だ。

「一番最初はどれぐらいの難易度がいいと思う？」

「うーん、ケイの場合は、どうでしょう。最初の私は臆病だったので、危険度の少ない採集依頼ばかりでしたし……」

「……お、決めた、これだ」

「私相談してくださいって言いましたっけ？」

「うん……いやごめんって。ちょっとこれが目を引いたからさ。ほら、『常闇の森』って」
「あー」

納得した様な反応を見て安心する。如何にもファンタジーでロマンのある名称なのだから、思わずこれに手が伸びても仕方がない。

「でもお勧めしづらいですよ。常闇の森は、文字通り昼間でも暗いです。何も見えません。これは魔素による木々の異常成長が原因らしく、この影響で、森の中の間は魔力の回復が早かったりしますが……」

「へえ。行ったことは？」

「はい。あんまり深く探索してませんが、面白い素材が生えてたので……何時か

行きたいと思つてたんですよね」

「なら、今行こう！」

「ええ。……でも、モンスターとか強いですよ？ 狼男とか、蠢く鳶とかが捕食しようと

しますし」

……正に魔境だ。

いや、いや。それこそが冒険である！ 多少の危険、それこそ良いじゃないか！

「行こう！ 大丈夫！ 依頼達成したらすぐに帰つても良いし、良い素材が見つかった

ら手伝うからさ！」

それに俺たちは冒険者でプレイヤー。しかもレベルが低いからデスペナルティも無い！……のは俺だけだろうが、とにかく危機へ飛び込んで損は無いのだ！

それに付き合わせるレイナには悪いが……。

「うーん……まあ、魔法剣士と魔法使いの組み合わせですし、前衛後衛である程度いい感じに戦えるでしょうし……」

「ならー！」

「あ、でも装備を新調しないでですね。防具は兎も角、初期の武器はちよつと心許ないです」

「あ、装備……」

そういえば、胸当てを貰ったから、装備の予算に少し余裕ができたんだったか。だつたらちよつと奮発して……あ、いや、常闇の森なんだから松明とかランタンとか要るし、

そういえば回復用のポーションとかも……。あれ、全部揃えられる気がしない。「仕方ないですね。……今回だけですよ？ 私のポーションを幾らか、それとお金をちよつとだけ分けてあげます。あと旅に必要な小道具も」

「ありがとう先輩！ 私がマトモな冒険者になったら利子を付けて返す！」
やはり持つべきは先輩だなあ！

借りを作るのは少し怖いけれど、それは倍にして返せば良い話だ。倍になったら利子どころの額じゃ無いが。

「これほど嬉しく無い先輩呼びは初めてです……」
……やっぱ罪悪感が強いかもしれない。

『常闇の森 討伐採集依頼』

『依頼主：ユカリオット』

『常闇の森の調査の為、特定エリアの狼男を討伐し、各個体が保有する魔石を回収、納品を依頼する。また、魔花^{マカ}も調査の上で有効な参考物となり得る為、可能であれば、発見した一つの群集地につき一本又は二本採集し、またそれぞれ採集地を記録した上で納品する事。特定エリアの位置等詳細は依頼主と面会時に伝える。』

『《24》』

ウチのキャラクター、備える。

『常闇の森』

『ある日、その地に一人の冒険者が居た。

冒険者の身体からは、赤い雫が流れ落ちていく。動きも鈍く、次の一步を進める代わりに命を削らなければならない。

そして遂に、最後の一步を。彼はその足の代わりに、手に持っていた剣を地面に突き立て、動かなくなってしまう。

この冒険者に手を差し伸べたのは、慈悲の女神ではなく、悲しくも邪悪なる神だった。彼は、辺りを囲う悪魔達に見守られながら、命を手放した。

永きに渡る年月を経て、その地は常闇の森と呼ばれるようになった。人々は、邪悪なる神がこの魔境を生み出したと語り継いでいる』

・ ・ ・

依頼処の受付から、依頼主の住所へ向かうよう案内され、向かった先。

目立たないが、常闇の森研究所と書かれた看板を見つけたことが出来た。

レイナと一緒に尋ねると、1人の男が出迎えた。

「初めまして。えっと、貴方がユカリオットさん……で合ってますか？」

「はい、私がそうです。あなた達は依頼を受けてくれる方ですね？」

「うん、よろしく。私はケイ」

「レイナって言います！」

「はい、お2人ともよろしくお願ひしますね」

確かドラゴーナと呼ばれる種族だったか。人間をベースに、角、尻尾、そして所々の頑丈そうな鱗を付け加えた様な見た目の彼は、

「私はこの通り、常闇の森を担当する調査員をしています。今回は依頼内容にあったような手順で調査を行います」

なんと調査という頭の使う仕事をしているらしい。

確かドラゴーナというのは近接戦闘に適性を持つ戦闘特化の種族だったはずなのだが。

「合わないなって、思いましたか？　くく、よく言われるんです」

思考を察された、と言うよりは、「大方そんな事を考えてるんだろう」と思つての言葉だった。

だとしても、彼の予想は正解である。

「思つたよ。まあ、個性つて奴なんだろうね」

「分かつてくれる様で、有り難いです。ああ、そこに座つていて下さい、今資料をお渡しします」

本棚に向き合つた状態のまま言われ、俺たち、ケイとレイナは言われた通りに適当な椅子を選んで座る。

この辺りにはかなりの量の書物が、小綺麗に置かれている。本棚の中を遠目にだが見てみると、常闇の森に関する伝承、と題された物や、また魔力に関する理論だとか考察だとか、とにかく難しそうな物ばかりが置いてあつた。

「こちらです。ところで、常闇の森についてどれぐらいご存知で？」

「うん？ 暗くて、とんでもなく広い森で、魔力が充満してて、それと今も拡大してる、だっけ？ 私はそれぐらい」

「私も似た様な感じですが……あ、その森から北東にある村から、その言い伝えを聞いた事がありますよ。確か、邪神がああ森を生んだとか」

「おお、北東の村と言つたら、あの村ですか。調査の一環で何度も行つた事があります」

「ユカリオットさんも行ったことがあるんですね」

机に置かれる形で渡されたのは、2冊の紙束だ。

片方は森の地理や生態に関して、片方は伝承に関しての資料の様だ。

依頼に直接関係があるであろう地理、生態をまず知りたい。

その書類を手取る。

目次から、『確認されているモンスター、動物』と言う項目を開く。

人狼、古代の魔導霊体、土属性魔種動物各個体、非魔種動物。

最後の2つの項目には、俺の知る動物の名前が並べられている。土属性魔種動物と言う、小難しい訳でもない漢字が並べられたこの言葉は一体なんなのだろうか。

「土属性魔種……って読めばいいのかな。ねえ依頼主さん、なにこれ？」

「ああ、それですか。簡単に言えば、魔法を扱う、またはその適性や耐性を持つ種の事を言います」

「モンスターや動物の魔法使いだって覚えれば良いですよ」

ふむ、モンスターの魔法使い、それも土属性のものか。

敵に遠距離攻撃手段があるのは厄介だ……。

魔種モンスターについてよく理解した後、資料を読み進めて次のページをそして次へと捲っていく。

魔法と呼ばれる植物の分布図も描かれている。探索の目標に活用できそうだ。

「そういえば、地図は貰える?」

「その資料の写しで良ければ。前もって地形に関する資料を複製しておきました。判明している範囲で魔法やモンスターの分布図も付いています」

「良いね。依頼中は借りさせてもらおうよ」

で、他には……。

「あの、些細な疑問なんです」

「どうしたの?」

隣でもう一つの資料を読んでいたレイナが、あるページを広げる。

そこには、邪神に関わる各地の伝承と書かれている。

「あの森の伝承に出てくる邪神なんです、冒頭に冒険者が出てくるじゃないですか。そういった人間が関わっている伝承が、常闇の森以外にないですよ」

本当に些細だ。下手すれば今回の依頼遂行には関係ないかもしれないのだが、もしかすると、と言うこともある。

レイナの横からその資料を読んでみる。邪神が大精霊と争った跡地が、常に吹雪が荒れる様に吹く地になったとか、邪神が癩癩を起こしてとある地の植生を狂わせたとか、邪神が興味本位で大樹を引き抜いて一帯が荒野になったとか。

「まさに厄災と言うか……。じゃなくて、確かに邪神だけで完結してるね」

「良いところに気付きますね。これに関しては理由が分かかっていないんです。偶然の可能性だってあります。……そういえば、この調査に助手が欲しいと思っていた所なんです」

「ノー、とだけ言っておく」

「あ、あはは。私も遠慮します」

「まだ何も言っていないんですけどね」

ははは。と、肩を揺らして冗談を笑い飛ばすと、一息ついてから、改まった目つきで俺たちと向き合った。

「……さて、本計画の実行に移る分には十分な情報を知って頂けたと思うんですが、その上で注意して頂きたい点が」

「何？」

「僕はあなた達2人を信頼して、この依頼を任せます。が、命に換えてまで戦果を持ち帰る事は期待していません。……その所、ご留意ください」

……急に真面目な顔になったな。

しかし、プレイヤーの俺たちに生死の話をされても、どう反応すれば良いか分からない。

俺はレイナと顔を向かい合わせた。

言葉は交わしていないが、レイナもこれに関する話の返し方に覚えがない事は察せた。

ふむ、それなら「私」の言葉として、一言だけ返してやろう。

「心配は無用だよ。なんとたつて私達は大魔法使いなんだからね」

「……クク。それは心強いです。それでは貴方達に任せます。一応、期限は1ヶ月とします。勿論相談してくれば延長も。ゆつくりと待つてますよ」

良い反応だ。レイナは俺の言葉にキョトンとしているが、返答内容としては正解だろう。

連れの大魔法使いを連れて、軽い挨拶を置いて出て行った。

．．．

「だ、だいまほうつかい……」

「んん、どうしたの？」

「い、いえ。大魔法使いを名乗るには些か早いと思ったんですが」

「まあねえ。私なんてレベルが2桁にも行つてないし」

と言つても、あの言葉は冗談や軽口の類だ。真面目に捉えるだけ損である。

さて、依頼主との顔合わせも終え、次は出発に備えて装備やアイテムを揃える所だが、今回はレイナが見てくれる筈だ。

「それで、なんだっけ。まずは装備から整えておくんだっけ？」

「あ、そうでした。とりあえず装備ですね。ケイさんは両手剣が使いたいのでしたっけ？」

「片手剣だね。と言つても両手でも構えられる形だと良いんだけど」

もし剣で攻撃を受ける場面があつたら不便だし。

「あ、それじゃあ後は盾ですかね」

どうだろうか。盾は立ち回りに邪魔そうな印象がある。小さめで、腕に固定出来るよ
うな……いや、そしたら籠手の方が良いのか？

「籠手はどう？」

「あー。確かに邪魔にならないですけど、ちよつと貫通されやすいんですね。どんな
盾も邪魔になつてしまう弓使いとかには需要があるんですが」

……確かに。」

盾なんか、言ってしまうえば頑丈な板に取手を付けたような構造である。それに比べて籠手は……頑丈でゴツイ手袋と言ったところか？

それに腕に纏わり付く形状だ。大きさは小さくても、動かしづらいかもしれない。

「実際に見ていってみましょう。私の友達が装備屋さんを経営してるので、案内しますね」

友達……。装備屋をプレイヤーが経営してるのだろうか？

生産職として活動しているプレイヤーか。一体どの様な人なんだろう。私はレイナの後ろを付いていく。

歩幅を合わせながら行ってしばらく、少しばかり特異な建物が視界に入る。

あのピンク一色の建造物は、一体何なのだろうか。川の稜を辿る様に並んでいる鍛冶屋の中で、これだけが異常に目立っている。

「着きました！」

「え」

「ここがリーチエさんの鍛冶屋です！ リツちゃん！」

「え」

「おお、レイちゃんじゃあないかあ！ いらっしやあい」

「え、」

何、何、何!?

いや待て、待つて。整理をしよう。

ここは鍛冶屋だ。

この鍛冶屋はリーチエが経営している。

そして恐らく。いや恐らく、可能性として言える事なのであるが。

「……はじめまして」

「おおあ、はじめましてだねえ! ……おやあ、もしかして」

「えへへ、私の新しいお友達です!」

「そりやめでたあい! これは歓迎しないとお!」

この目の前の巨体は、恐らくリーチエと呼ばれる女性である。

「私はリーチエ! 主に鍛冶屋をしてるけれど、魔道具の類も作ってるわあ」

いや、たつた今これは確定事項となった。

この目の前の、ゴツゴツと岩の様な筋肉を備えた凶悪な人物は、正に彼が、いや彼女

こそがリーチエなのである!

ふむ、俺は幻覚でも見ているのか?

「……うん、よろしく。あー、私はケイ」

俺は思考と言う機能を投げ捨てた。何を考えても仕方がない。

……しかし見れば見るほど強靱な肉体である。

「今日はケイさんの装備を見繕いに来たんですけど」

「武器かな？」

「軽い盾と剣をセットで欲しい」

「なあるほど」

リーチエは一度だけ頷いて見せた。そしてここで待っている様にと、椅子へ促された。選択は任せろということか。

見た目は武闘派だし、期待はできるが……。

「近辺に出る大抵のモンスターならあ、この盾でえ十分。それと数打ち物だけれどお、この長剣も」

少しばかり待ってリーチエが戻ってくるのを見つける。

縁が鉄で補強された、それ以外は殆ど木製の丸盾と、刃渡りが肩から手首程度の長さの剣が渡された。

「予算、無いんですよ？」

「あ、私が費用を持つので」

「……レイナちゃんもお人好しねえ」

それを聞いて、悩ましいとでも言うようにリーチエは額に手を当てた。

「レイナちゃんに悪気なんてないのは分かるけどお、あんまり知らない人に親切しすぎるのは良く無いわあ」

「え？ でも、ケイさんはお友達ですし、優しいですよ」

「融通してもらえるのは有り難かったけど、レイナのお母様がそう言うのなら」

「結構よお。でも、そうねえ。レイちゃん達はあ、この後依頼に向かうのかしら？」

「はい、24の依頼に」

「新しい武器をアテにしてこれを選んじやったんだ」

「……仕方ないわねえ。ちよつと良い剣を見繕いませよお。ただし、ケイちゃんが支払う事。代わりに後払いとしておくわねえ」

「ありがとう。依頼は必ず達成させてくるよ」

「ええ。それと、さつき私の事をお母様と呼んだけれどお……」

あ、もしかして軽口が過ぎたか。もしやと背筋が凍るのを錯覚したが。

「もしそう呼ぶならお父様と呼びなさい」

……ああ、うん。なるほど。でもその口調で男って、どうかと思う。

俺は無言で頷きつつもそう思った。

ウチのキャラクター、出発する。

『魔法』

『この世界において、魔法は人々の生活に浸透した普遍的な技術です。基本的な魔法を習得すれば、生活に役立つことでしょう。

勿論、貴方を脅威から身を守るために、又は脅威を殲滅するための魔法も多岐に渡って存在します。

魔素に干渉する力が強い者は、より強力で複雑な魔法を行使する事が可能です。

魔法を習得する手段は、2つ。特定の魔法の構造、制御方法を記した魔法書を読み理解する方法と、自ら魔法を研究し理解するという方法があります。

魔法書を理解するには、習得したい魔法に見合った「集中」と「知識」が必要です。

その必要能力値を満たし、習得すれば、貴方はその魔法を扱うことができます。

対して、自力で魔法を作り出す方法を取る場合は、「思考」と「知識」、そして属性マテリアルが必要です。

属性マテリアルとは、5種の属性をそれぞれ物質化した物です。この世では主に石や木、そして生物などの中に属性が存在しますが、研究の為にマテリアライズで抽出す

る必要があります。

抽出後、このマテリアルを消費して研究を行うことが出来ます』

・ ・ ・

一振り、また一振り。

剣先の遠心力によって腕が振り回されることはなく、しっかりと操れている。

現代人に触れる機会は無いはずの、暴力の象徴たる剣は、しかし俺の手に収まっていた。
た。

「何と言うべきかわからないけど、強いて言えばこの重みが安心感だよね」

「ちよつとよくわからない感覚ですネ」

「そうかもね」

暴力の象徴とは言ったが、エクスカリバー（木の枝）を拾う男の子の気持ちを考えれば、どちらかと言えばロマンという面が強いだろう。

一応、今の俺は女なのであるが。

それに、この左手の盾。これなら、盾で攻撃を受けることもできる。回避以外の防衛手段があるのは何とも心強い。

「手持ちの道具の方は、十分そろってるんだよね」

「はい。魔石ランタン、ロープ、ポーション。あとけむり玉もですね。移動中の食料は、最低限の非常食だけにしましょう。採集した素材で帰りの荷物が嵩張りますから」

逃走手段も確保するのは、普通の冒険者としては当然の心構えらしい。

普通じゃない、つまりプレイヤーの冒険者はこういう所を見逃しがちだが。

「食料は現地調達だね」

「そのセリフを言いたいだけですよね？ 糧食の類は持つていきますよ。それが足りなければ、途中には森や川もあるので。……あ、お肉ばかりじゃなくて、野菜も食べるんですよ」

「好き嫌いはしないよ。でも狩った動物を捌くのには自信がないな」

「それは大丈夫ですよ。お肉はある程度加工された状態でドロップするので。あ、それと移動手段の方は、ある方がユカリオットさんの紹介で馬車を用意してくれるらしいです、北門で待ってるそうですよ」

用意周到なのかもしれないが、それが当然かの如くテキパキと済ませてくれる。これ

では冒険とは程遠いかもれないが、まあ初心者向けではある。

レイナに頼り切りになるのはちよつと考えるとところがあるが、最初のうちは仕方ないだろう。

「じゃあ、行く?」

「行きましょう。常闇の森へは馬車で4時間です」

「……長くない?」

この数字を聞いた俺は、ただ一言だけの不満を誰にも向けずに放った。

レイナは困ったような笑いとともに、頷いて同意を示す。

「この世界、移動時間はやたらと長いんですね。馬車に本やら生産道具を詰め込むプレイヤーが殆どです」

「確かに体の感覚とか風景とかは現実準拠かもしれないけど」

なにも移動時間はそうしなくて良いのではないか。せめて転移とかはないのか。転移とか。

例えば1時間の価値が現実換算で2、3分程だったとしてもだ。

「仕方ないです」

仕方ないか。

「となれば、暇の潰し方だよね……。最重要課題で」

「最重要ですか、それ？ ……それなら、本とかは読みますか？」

本か。良い手段かもしれないが、微妙だ。

俺は読む方だ。ケイの方は知らないが…魔法使いだし、読む方だろう。

「うん、読むよ。物は問わないけど」

「じゃあ私の本も、興味があつたら読んでみてください。幾らか既読のものもあるので」

それは嬉しい。

いや、時間を潰すという目的での読書は、それでも俺に限って言うとな不適当な手段なのだが。だが無いよりマシだ。

「魔法書もあるの？」

「ありますよ。あ、トランプなんかも持っていきましようか」

「いいね。トランプがあれば3時間ぐらいいは軽く潰せそうだ。カードゲームには致命的に疎いけど」

これならあつと言う間に終わる、なんてことはない筈だ。…とは言え、実はトランプを使ったゲームのルールはあまり知らないのだ。

知っているものは神経衰弱とババ抜きぐらい。他は名前を時々聞く程度で、ルールの愕然とした概要すら知らない。

「最近の時代はトランプカードよりも上等な遊びで満ち溢れていますからね。この世界だ

と遊びの時代も退行してるんですけど」

確かに、そうだ。

スポーツは細やかなルールが改定されるのみで、他のゲームなんかは大幅に変化しているか消失している。

まあ、若者の俺たちには「変わった」「消えた」という事実しか知らないのだが。具体的に何が変わったのかは知らない。

「なんなら新しい遊びでも考えましようか」

「それは最終手段かなあ」

という訳で、旅の上で大きな問題となる暇つぶしは取り合えずこれで解決、ということにした。

・
・
・

「積荷は、簡易的な錬金術の道具と書物にトランプカード。他は装備品その他道具、と。言わずもがな余裕で馬車に乗せられますね」

「うん、今日はよろしくね」

「よろしくおねがいます」

俺たちが持つてきた見て積載量の確認を取ってくれた彼は、今日この馬車の運転手を努めてくれる者だ。……いや、運転手というよりは御者か。

「目的地は常闇の森でしたね？ 僕たち自身とその荷物他に、伐採所への物資も一緒に積むので、途中でそれらを下ろします。よろしいですか？」

「良いよ。見たところ腰を下ろす空間はありそうだし」

「傷つけなければ木箱を机にしてトランプしていつでも大丈夫ですよ。ただ揺れに関してはご承を」

それぐらいいは気にしない。木製の馬車にサスペンション等は期待していない。

「良いよ。早速出発しよう」

と、出発前はそう意気込んでいたのだが……。

「これは……想像以上だ」

途中まで整備されていた道の頃は良かった。小さな揺れは多かったが、耐えられた。

しかしこれはなんだ。地震慣れしてしまった日本人でも、これほどの物は耐えられな

い。

「これでも昔よりは良いんですよ。有志達が石を退けたり道を均してくれたり」「雨風やモンスターですぐボコボコになりますけどね」

御者とレイナがそんな説明をしてくれるが、どのような経緯あつたとしても、辛いものはやはり辛いのだ。

「下手したら酔うかも」

「これはトランプはお預けですかね」

ぜひそうしてほしい。

・
・
・

揺れの比較的少ないと思われる馬車のご真ん中で、無心で風景を眺める事しばらく。馬車はふと減速を始め、揺れもゆっくりというものに変わっていることに気づく。

「あー、もう目的地に……じゃなくて、伐採所？」

「はい。荷降ろしのついでに休憩もしておきましようか？」

「あ、うん。頼む」

まだ続きもあるのか。とうんざりするが、今は休憩時間だ。

馬車から降りて大きく背伸びして、深呼吸する。

「んくうーっ……」

「乙女がそんな声しちやいけませんよ……」

「ええ。私は乙女なんてガラじゃないと思うけど」

そんな事よりもこの開放感に身を大に広げる事が大事である。

ついでに、踏みしめる大地が存在する事に感謝する。

さて、体を伸ばした所だ。

「荷降ろし手伝うよ。馬の相手して疲れたんじゃないの？」

「こっちのセリフですよ。でも体が大丈夫なら、有り難く手を借りさせて頂きます。場所全部同じ場所ですが、ちゃんと種類別に分けといて下さいね」

「了解、と」

矢、とだけ書かれた木箱を持ち上げる。それほど重くはなかった。数キログラムか。

持ち運びやすいように手の位置やら持つ位置やらを調整していると、一人の男がやってくる。革鎧を着た逞しい男だ。

「こんにちは、木こりさん。いつもの場所でいいですか？」

防具を着ているが木こりらしい。

まあ多少の防護は不可欠なだろう。自衛手段を用意するに越したことはない。

「おう、助かるぜ。そっちの2人はこのモンスターを狩ってくれるのか？」

「いえ、残念ながら。今回はこの馬車と一緒に常闇の森に行つて、調査するんですよ」

「そりや残念だが……応援せざるを得ないな。こっちの都合を押し付ける気はねえし、常闇の森の問題については一端の木こりでさえ悩ませるもんだ。つと、置き場所は俺が案内しよう。お前さんは馬の様子を見てやれ」

「……その方が良さそうですね。どうも落ち着きが無いようです。野生の勘という事もありますし、皆さんもお気をつけて」

それにしてもこの木こり、上半身の筋肉の付きがなんとも……ゴツイ。

じゃなくて、どうも馬の様子が変らしい。荷物運びを言うだけなのだが、まあ気をつけよう。

「ところで木こりさん。一度にそんなに持つて大丈夫なの？」

「おう、これでも鍛えてるからな」

「地面がぬかるんでののかな。木こりさんの足跡が数ミリは沈んでるように見えるんだけど」

「こっちは割と行き来してるから踏み固められてる筈だが？」

なら本当はもつと重いつてことだ。一体どんだけの体重と荷物を持っているんだよ。

「……コホン。じゃあ案内してくれる？」

「おう、任せろ」

「レイナはどうする？」

「あ、へあ？ いやあの、えっと」

「……どうやら休みが必要みたいだ。はて、俺程疲労している様子はなかったのだが、あまり体力が無いのだろうか。」

「ここで待つてても大丈夫だよ。私行ってくるね」

「あ、あの！」

「どうしたんだろう、案内してくれる木こりを待たせているのだが。」

「うん？」

「け、ケイさんの事手伝いますね！」

それは……なんだか心配だ。しかし手が増えるのは有り難い。

無理して重い物を持たないようにとだけ伝えると、2人と木こりで荷降ろしを始めた。

運んだ木箱は累計36個か。

そろそろ荷台に乗っている木箱も片手で数えられる程度になってきた頃、

「あともう少しだね。馬の様子はどうか？」

馬の様子が気になった俺は、御者に話しかけた。

「落ち着きました。警戒の色は消えません。もしかしたら道中で馬が怯えて止まってしまうかも」

それは困る。

持つていこうとした木箱を一旦置いて、側頭部のあたりに手を当てる。

「うーん……、どうしましょう？」

「脅威が自然となくなるまで待つ？」

「あるいは迂回する手もありますが……大きな遠回りになってしまいますね。半日以上はかかるでしょう。道を外れて突っ切るなら話は別ですが」

道を外れて突っ切るのは、手段としては論外だ。

ドラゴンにでも追われてなきや、この手は取りたくない。

「御者さんはこの後に予定してる用事ある？」

「ありません。時間を掛ける手段を取っても構いませんよ」

ならば、遠慮なく時間を掛けられるだろう。

「私はこのまま待機が良いけど、とりあえず荷物が終わった後でね。その時改めて」

「はい」

「そうしましょうか」

さて、後少……し？

あれ、妙だな。さっきここに置いたはずの木箱が……。

「おお、最後のヤツ全部持つてくぜ」

「……お、おう」

あの木こりがあとの全部を一気に持つてしまい、俺は手持ち無沙汰になってしまった。

荷降ろしの仕事が無くなったのだから、それはそれで良いのだが。

「あとは思い思いに休憩しましょうか。ケイさんも移動と荷物運びで疲れてる様ですし」

「ありや、分かっちゃった？」

これは参った。レイナは人に対する観察眼が鋭いのだろうか。

「はい。頭を痛そうにしてたので」

しかも症状まで当ててる始末。

そこまで言われたら、休まないにとやかく言われてしまうだろう。

「あはは。バレたら仕方ない。丁度荷台も空いたし、そこで横になるね」

「辛かったら言つて下さいね。濡らしたタオルなり持つてきますから」

そうはいっても、苦痛を伴う頭痛ではないのだ。

苦痛ではない頭痛、というのもまあ奇妙な物なのだが、しかし事実そうなのであるから、本当に奇妙だ。

脳を突く様な、いや頭の辺りの肌を突くような感覚が、痛覚ではなく只の感触として伝わってくる。しかもその感触が得られるのは、決まって一定の方位。ここから北東の方位からだ。頭の向きを変えても、この感覚はその方位から感じてた。

この感覚は、今も馬達も抱いている「野生の勘」に類するものだろうか。だとすれば……。

「……いや、馬車じゃなくてあの櫓に登って良いかな？ 風通しが良さそうだ」

「別に特別立ち入りを断つてる所はありませんよ。ああ、大丈夫です。物資補給で常連の僕が言うのですから」

「なら、そこで休んでるね。高いからついでに周りの様子でも見てるよ。……あ、そう

だ。本も持ってくね」

「構いませんよ」

もし俺の心配が杞憂であれば、この本を読むとしよう。

少しだけ迷ったが、ファイヤボルトの魔法書を手に取った。少しページをめくれば、ちゃんとした文章と図式が書かれている。教科書ほど分厚いわけではないが、内容はそれに近いかもしれない。

これなら、直ぐに読み終えることはなさそうだ。

ウチのキャラクター、切り裂く。

『古代の魔導霊体』

『何時の時代にも、不死の身体を求める者は多く居た。その中でも、一番不死に近づく事が出来たのは、魔導士だった。』

……とまあ、資料によればそういう事だ。大昔の魔法使いは優秀だねえ。現代の魔法使いは、彼らの事をモンスターとは呼べないだろうな。魔素を利用して永遠の身体を実現した、仮にも元人間の先輩なんだから。

つつても、その身体は未完成だし、魂もどうやら擦り切れてしまっている様だがね。畏怖はしても、尊敬はできないか。』

俺の心配は杞憂だった。

しばらくすると、あの奇妙な感覚はほんの少しだけ方位が変わった後に消え去り、遠目に見える馬達も落ち着きを取り戻したように見えた。

偶然とは思えないタイミング、やはりこの感覚は気の所為ではなく、勘、あるいは第六感と言うべきだろうか。

「スキル……ではないよね。習得した通知も無いし、初期で持つてるわけでもない」
あるいは強制でこの感覚を与えられるイベント？　しかしレイナ達は同じ様な感覚を得た様子はなかった。

又は単なる偶然か。俺の馬車酔いの状態が、非常にソレらしく変化していた、という可能性もあるだろう。

しばらく考えて、俺は本のページに目を落とす。この事はいくら考えても答えは得られなさそうだ。

この本は時折周囲の状況に目を配りながら読んでいたが、今は半分ほど読み終えた。このゲーム、魔法書がかなり作り込まれている。ステータス不足の警告を受けながらも読み進めて、それが分かった。

現実には存在しない技術だからと欠かすことなく、架空の技術でありながら現実的な理論や解説が書き記されていた。

俺が完全に理解したかと言えば、まだだ。しかし、この魔法を行使出来ないかといえ
ば……。

答えは、出来る。出来てしまった。

『ファイアボルト』

人差し指の先に現れる、矢じりを長く引き伸ばした様な形状の炎。

ゆらゆらと、青に橙に赤と炎が揺れる。しかしその形状が崩れることはない。

これの射出に関わる所は読み進めてないから、これを目標に向けて撃ち放つことは出
来ないが、しかしこれは些か異常では無いだろうか。

これは俺がゲームのシステムを理解しきっていないが故の誤解かもしれないが、本来
は俺は習得できないはずなのである。

『必要能力値：知識14 集中12』

表紙に触れて現れるこれが、魔法書を用いての習得の際、必要となる能力値。

そして現在の俺の能力値が、これだ。

|| || || || ||

名前：ケイ 種族：人間

職業：魔法剣士

能力値

筋力：8

魔力：8

耐久：7

集中：9

器用：9

知識：8

俊敏：10

思考：10

|| || || || ||

言わずもがな、足りていない。

これは何故だろうか。バグという言葉がまず最初に頭をよぎったが、その可能性以外にも、能力値が不足していても習得できる条件があるのかもしれない。あるいは、本を読み切った時に、この不足が響いてくるのだろうか。

「……レイナに聞くついでに、他の魔法書も借りてみるか」

・ ・ ・

「他の魔法書ですか？ 構いませんよ、それ以外だとボルト系が雷と土属性。ジャベリン系は全属性複合版がありますけど……。あの、体調は見るからに良さそうなのでそれは良いんですけど、能力値、足りないのでは……？」

「ちよつと予習しようと思つてね。雷ボルトとジャベリンのを読もうかな」

属性複合板というのは興味深い。確かに各属性を別々の本に分けたところで、共通点の方が多からな。

「はあ……とりあえず、良いですよ。あ、ところでなんですが、馬さんたちが落ち着き始めたので、出発するか念入りに待機するか、御者さんが意見を聞いてましたよ。私は待とうと思うんですが」

「そっか。うーん……待機が良いと思うよ」

「じゃあ決まりですね。御者さんに伝えてきます」

念には念を。冒険等と宣つて警戒すべきものには警戒せずいるなら、それは冒険ではなく愚行でしかない。

さて、忘れてしまう前に聞きたい事を聞いてしまおう。

「それと聞きたい事がひとつあるんだけどさ。魔法書つて能力値が足りなくても習得できる条件つて、あつたりしない？」

「有りませんよ？ 特定のNPCは無条件で習得してたりしますが、プレイヤーには

魔法書か研究しかありません」

「半端に習得できちゃうなんて事も?」

「そんな話は聞かないですな」

なるほど、なるほど。

……バグってるのでは?

よりにもよって俺がバグに遭遇するだなんて。

と自分の不幸に頭を抱えていると……ふと、馬のいる方が騒がしくなっている事に気付く。

「——ヒヒーン!」

「落ち着け、どうどう、どうどう……。ケイさん! 馬の様子がいきなり」

馬が慌て始める。

俺もまた、その方向へ振り返った。

先程の感覚、今度は肌全体で感じられるそれは、先程よりも「近い」と直感させた。

それはもう、両目でしっかりと視認できるくらいには。

「レイナ、戦闘!」

「え? —— きゃ!」

レイナがその姿に対して驚き、尻餅をつく。俺は不明瞭で半透明なその存在を見て、

実在と非実在のどちらにも属していないような印象を受けた。

同時に、その情報から出発前に目を通した資料と一致するモンスターだと気づいた。

『ウオーターボール』！ 私が気を引く！」

命中する筈の魔法は、敵が出現させたであろう障壁らしき物に防がれた。

奴の名称は、古代の魔導霊体。

空気中の魔素を、一般的な魔法で火や水へと実体化させるように、それと同じく生前の身体の再現を試みた残骸。

身体の実体化に失敗し、半透明となってしまう、さらに非効率な魔力消費が、魔素の少ない環境での活動を困難としている。

だからこそ、実体を用いた攻撃は効果が薄い。しかし先程の魔法は防がれてしまった、流石に威力が弱すぎたか。

「足りない……足りない……！」

『『エアボール』、『エアボール』！』

風魔法で牽制を継続。威力は足りないかもしれないが、後ろに本職の魔法使いが居る。

恨むように「足りない」と呟き続ける敵の目には、俺しか映っていない……筈だった。

「魔力を……マリオクをおお……！」

「レイナ、狙われてるー！」

「お、おぼけ……」

「レイナ?!」

ああ、もう少し彼女の様子に気をかけるべきだったろう。そうすれば、彼女がこの幽霊に怯えてマトモに行動できないと気付いていたのに。

あれでは頼めることは出来ない。出来て困ぐらいな物だが、その手段を取るには俺は少々マトモすぎる。

俺を無視してレイナに向かおうとする所を、この剣で斬りつける。

やはり効果はない。身体を通り抜けて剣が空振りする。敵が気付く様子もなかった。

「ち、『詠唱』………『ファイアボール』！」

比較的威力のある火属性魔法を、少々の詠唱時間を許容して発動する。

背後からの不意打ちだったからか、あの障壁が現れないまま敵の身体に命中した。

しかし、一撃で仕留めるには火力が足りなかった様だ。

確かにそうだろう。俺の能力値は低く、魔法自体も低級の物。

「ぐ、ぐぐ、お……お前、オマエー！」

ただ、再度気を引く分には十分だったらしい。

今や俺に対して警戒をしているから、俺の攻撃はまたあの障壁に阻まれるだろうが。

「ジャマだ。邪魔だああ！」

「私の名前はそんなじゃない！」

何処から出てきたのか自分でも分からないような軽口が、俺の口から吐き出される。同時に、何かしらの力を肌で感じとった。先程と同じ感覚だが、今はそれがより強い。まさか、魔法を使う予兆か？

「ウセロ、失せろ。『フレイムスロワー』！」

リアルタイムで力が膨張するのを例の感覚で感じ取って、慌てて横へ大きく走り出した。

まるで火炎放射器の様に吹き出す炎が、俺の居た所を焼き払う。

敵の魔法がなにもない所を焼いた隙に、風魔法の射程に走り込んでからまた『エアーボール』を放つ。

「ウガアアアア！」

やはり障壁に弾かれるか！

堪忍袋でも切ったのか。野性的な唸り声を上げている内に、この剣で切りつける。

「まあ効かないよね……」

「ジャマダアっ！ 『エアーハンマー』！」

「っ！」

空気の流れが一瞬だけ変わったかと思うと、大型トラックを思わせる質量が、不可視のまま俺を吹き飛ば——

——空中の身体を捻らせ、自分の意志で地面を転がって衝撃を適切に逃がす。体勢を立て直し、魔法を練り上げる。

『焼いて切り裂く』

剣に魔力を付与。刃に炎を纏わせた剣を構えて、前方へ跳ぶ。

「シュー！」

噛み締めた歯の間から、力の入れるタイミングで息を吐き出す。

私が振り抜いた剣には手応えは感じられず、しかし目の前の敵は切り裂かれ、そして傷口から広がるように身体を焼いている。

敵が苦痛に悶え、踞る。

「……情けない」

そのまま、首を刎ねた。

ウチのキヤラクター、突入する。

『??の?? 序章 第一節（抜粋）』

『ぼんやりとした赤に揺蕩う俺は、遠い過去に想いを馳せていた。

その大半は、良き思い出だった。戦場を共に赴いた友、美しい花畑、俺を愛した伴侶。それらが、俺の人生は幸せだったという事を証明してくれる。

しかし、ある時の記憶に辿り着くと、息が苦しくなる。もし地面に二本の足で立っていたら、きつと震えていた。

これだけはどうの昔に心に根付いて、蝕んで、狂わせて。この記憶に爪を立てて剥がそうとしても、離れないのだ』

俺は、さつきまで何をやっていた？

意識を取り戻した俺は、まず最初にそれを思考した。

「……………敵が」

その疑問を探る為に1つ瞬きして周囲の状況を確認すると、半透明の敵が首を失い、今にも消滅しようとしていた。

そして、当の俺は右手の剣を大きく右に伸ばしていた。あたかも左から右へと振り抜いたかのような姿勢だ。

この状況から最短で予想できる事実に、あり得ないと首を振る。

しかし、それはもう特別なイレギュラーが介入されたとなれば、もしかしたらあり得る。

身体の制御を奪われた？

それとも、単純にこの記憶が消失した？

そう考えているうちに、敵は完全に消滅。砂のようなモノだけが残った。

「……………レイナ、大丈夫？」

後者は、何らかの奇跡によって自分の力で、あるいは復帰したレイナの協力によって実現できるだろう。

自分の力のみであの霊体を打ち倒したというのはあまりにも信じがたいが…………。

「あ、あれ？ お化けが……………あ、消えた」

「……なるほど、レイナが無事で良かった。本当に怖がってたみたいだけど」
あの様子では、レイナは復帰すら出来なかったようだ。

記憶の空白に突入する直前、確かレイナは尻もちを付いていた筈だ。

今立ち上がって、付いた草や土を払っている所を見るに、俺の記憶が失われている時
間中は、恐らくずっと地面に座り込んでいた。

「はい。ごめんなさい、何の役にも立てませんでした……」

「気にしない、誰しも苦手なものはある。もし私の力が及ばないような敵が現れたら、任
せるよ」

「はい、頑張ります」

内心、ため息をつく。

そうすると、俺は謎の力を発揮して件のモンスターの首を切り落としたのだろう。剣
を見ると、僅かな赤みを伴った熱を放っていた。

正直柄をしっかりと持てていることに驚きだ。刀身から感じられる熱気は尋常では
ない。

これが自分の仕業であると言われたならば、勘違いあるいは人違いであることを二度
三度も言い返すであろう。

「ところで、見た？ 私の活躍を」

あくまで「ケイ」の言葉というフィルターを通して、俺の記憶の空白の埋めるための説明を求めた。

しかしレイナはぼかんとした顔を見せて、そして申し訳無きような表情に変わる。

「ごめんなさい。まともに見えてませんでした」

「……そっか」

となると、この空白は謎のままになるな。

放置してしまうのは個人的によろしく無いが、仕方がない。

「周囲の状況を確認しよう、一緒に」

また別の個体が現れていたら厄介だ。記憶の件は諦めて、すぐに行動に移した。

先ほどの戦闘地点を起点に探り、十分程。どこに行っても平和そのものであり、新たな敵の姿や痕跡は見つけられなかった。

「結局、この一帯に現れたのはあの幽霊だけでしたね」

レイナと一緒に周囲を練り歩いてみたが、幸いにも2体目の敵は居らず、俺の僅かな記憶以外に損害は発生して無かった。

「ねえ御者さん、馬は落ち着いてる？」

「ええ、あなたが撃退したお陰か、落ち着きを取り戻したようです」

「よかった。それにしても、なんでこの場所に現れたんだろう……」

馬の反応をリーダーの様に扱うのは妙だが、馬たちが少しだけ落ち着いたタイミングの後現れた。

まるで何処からともなく生えて来た様である。或いは離れたところからテレポートしたか。

「現れた場所は……確かここだよね」

この辺りの地面を探ってみるが、どこにも幽霊の卵かそれらしき物は見当たらない。しかし、完全に何もないという訳でもなさそうだ。

先ほどの戦闘の予兆として感じ取っていたあの第6感が、微かにだがこの辺りから感じ取れるのだ。

恐らく、この感覚の元は下から。この地面の下に、何かカギがあるのだろう。

「……と言っても、掘り返すわけにはいかないか」

この情報は持ち帰って、諸々のアイテムを納品する序に話してみることにしよう。

「二呼吸挟んだら、出発しますか？ 幽霊が一斉発生している訳じゃなさそうですし、これ以上出てくる事は無いと思います」

「そうですね……。魔法使いと魔法剣士のパーティなら、あのような特性のモンスターなら対処できるでしょう。ケイさんが一人で倒せたぐらいですし」

「えっへん」

「だからと言って一人突撃なんてしないでくださいよ」

「はい」

レイナの忠告に俺はしゅんと俯いた。

・
・
・

伐採所でのひと悶着も一区切り。ちよつとの気休めを挟んでから出発したのだが……。

「……それにしてもさ」

「はい？」

「この揺れどうにかなんない？」

「我慢してください」

俺たちの移動手段はこの馬車。休憩中に目覚ましい改修が行われたという事はなく、俺の脳や腹を揺さぶる振動は相変わらずであった。

「さすがに少しは慣れたけど」

「馬車酔いって慣れるものなんですか？」

「分からないけど、ここに実例がある。……そうだ、折角だしトランプやろうよ、トランプ」

「うーん、普通慣れないと思うんですけど。あ、カードはそこに置いてますよ」

「はいさ。先ずは何をやるうか。ババ抜き？」

馬車の揺れによつて時折カードの束が跳ねてしまいが、それぐらいの不都合を許容して俺らは遊び始めた。

まず最初にババ抜きを試した。お互いに曖昧に認識しているルールを軽く擦り合わせて、始める。

「これだ！」

「残念、それはジョーカーさんです！」

「くつ。せめてシャツフルを……」

ハズレを掴まされたり。

「ふふふ、今私の手にはジョーカーがある……」

「2人だと、ジョーカーって誰の手にあるか無条件で分かりますよね」

「……あ、ほんとだ」

適当なハツタリをかまして、新しい発見を得たり。

「こういう時に、ウノ！ って宣言するゲーム無かったっけ？」

「再現出来なくはないですが、トランプでやるゲームじゃないですよね」

「うん。確か専用のカードがあるんだっけね。……あ、上がった」

「これでケイさんの最初の勝ちですね！」

と、このゲームでの俺の戦績は1勝2敗だったが、俺が拗ねる暇もなく次のゲームへ。記憶力を競う神経衰弱において、そのルールと俺の性質ではシナジーが発生し得ると予測していた俺は、やはり無類の強さを発揮した。

「ここで無暗に開拓したら相手にチャンスを与えてしまうだろうから……」

「神経衰弱ってそこまで戦略的なゲームでしたっけ？」

ちよつと頭を使って優位を確保してみたり。

「私も開拓を控えます！」

「私も！ ……つてやったら、ゲームの進行止まるねこれ」

「……ルールも開拓しちゃいましょうか？」

「おお、大胆だね。でも私はそういうの好きだよ。どんどんルール開拓しちゃおう」

カードゲームを知らないなりに、ルールを足しては引いてはを繰り返して。

ゲームの中でゲームをする。なんていうへんてこな状況を俺なりに楽しんで、いつの間にか数時間の旅路は終わりに近づいていた。

ふと視界の隅に写った光景に、振り返った。

「……森だ」

遠目にだが、明らかにその異常性を認識できる程に成り果ててしまっているその森は、ある冒険者の死を始まりにして今や特殊なモンスターや異常な環境を抱えるまでになっている。

言うまでもなくあれが常闇の森と呼ばれる場所だろう。

「村で降りて、森へ出発しますか？　ここから降りて出発する事も出来ますけど」

「村で補給するものはあるかな」

「特にはいいですね。水は魔法で十分確保できますし、食料は現地でたくさん採れますし」

「ふむ。御者さん、村までは後どれぐらい？」

「道を辿って1時間程です」

「調査の時間は、日が沈むまでに済ませたいですね」

「レイナは村の位置を把握してるんだよね」

「はい。方位磁石があれば辿り着けられると思います」

村から依頼を受けているわけじゃないし、一旦寄る必要もない。日が沈むまで3時間

程という微妙な時間だが、調査に割けないわけじゃないのだ。

日が沈めば、常闇の森は危険が極まると事前に知っている。会敵や地形の影響で移動が滞らない限り、深入りしないようにすれば日没前に出られるだろう。

常闇の森から出ても、その近辺はそれなりなモンスターが居るが、しかし私達が遅れをとる様なものでもない。

「じゃあ……、今行っちゃおう?」

「行きましょうか」

そう決めた俺たちは、カードを整理もせず束ねて荷台の隅に置くと、代わりに各々の武器を手を取った。俺は剣と小さな盾を。レイナは杖を。

「御者さん」

「ええ、後ろ耳にですが聞いていましたよ」

「ありがとう。この太陽の位置なら、日の入りまで3時間ぐらいになると思う。それぐらいの間調査して、暗くなり始める頃には村へ戻るよ」

「村の方々には説明しておきますね」

「うん、お願い。出来そうなら宿の予約もお願いできるかな、なんて」

「そこまでは管轄外ですが、まあ、気が向いたらやっておきますね」

森で調査対象を集めるのに3時間。必要量が揃えられるとは到底思えないが、その時

は村へ一旦帰還すれば良い。

宿が無くて馬車で寝泊りできるだろう。

減速しきつた馬車から、いよいよ俺ら2人が降り立った。

・
・
・

森の中に立ち入ると、まるで洞窟の中にも踏み入れた様な暗闇が広がっていた。

鳥のさえずり、虫の鳴き声、草木のさざめき。それらが聞こえる事は一切なく、狼の遠吠えの様な物が時折俺たちの警戒心を刺激する。

これは確かに、常闇の森だ。

それに、ここでは空気中の魔素が豊富だと聞かす……。

「寒いとも暑いとも言えない、微妙な空気感だね……」

最近生えてきたこの第6感、先程までとはまるで違う環境だと伝えてくる。

納得した俺の後ろで、レイナが地図を開く。魔石ランタンによって照らされた地形図を見つめている様だ。

「私達はここから入ってきたので、魔花の採取地点の中で近いのが……この辺りですね」
「……よく現在位置がわかるね」

「丁度目印があるじゃないですか」

「……？」

「分かってない風な感じですね。ほら、見て下さい。この道の形状と配置、私達を通ってきた所と同じですよ」

ああ、本当だ。

道の形状が特段独特だという訳でもないが、地図上に書かれた岩や木の配置に覚えがある。といつても、特に意識していなかったから、「そういえばそんな感じだったかも」というぐらいでしか無い。

「すごいな、レイナは」

「そ、そうですか？」

冒険者として抜け目がない。

やはり先輩はすごい先輩だと、俺は再認識した。

それにしても、そよ風が肌を撫でて、それが妙にくすぐったい。

「う」

「う?」

日の光が一切届かないせいで涼しい空気が、今度は肌寒いとまで感じそうだと腕をさすつてみると、レイナが不思議そうな目で見てくる。

「どうしたんですか?」

「いや、ちよつとそよ風がね」

「風ですか?」

しかしレイナは不思議そうにしている。

確かに彼女の魔法使い装備は、肌の露出が少ないように見えるが。

「……でも、なんにも風は感じませんよ?」

「またまたー」

「うーん……?」

……?

本当に風を感じていないらしい。いや、まあ。身長差で感じる風が違うだけか。服装も違うし。

「でも、あの草とかは全然揺れてませんけど……」

そう言われてみれば、たしかにそうだ。

肌をくすぐるぐらいの風量なら、葉先が少しは揺れるはずだが、それが無い。

「……気の所為？」

「んもう、しゃんとして下さいね！ 私一人じゃ、またあの幽霊が出たとき何も出来ないんですから！」

「うん、わかったよ。警戒だつて少しも欠かさないよ」

「本当に大丈夫なんですかー？」

「ぷすー、と頬を膨らませてレイナが見てくる。

もしかしたら、風だと思っていたこれは第六感によって得ていた感覚なのだろうか。

そうすれば、俺は魔力を感知しているという事になる可能性が高い。

俺に特別な才能があるのだとか、異能の才を持ち合わせているとも考え難い。

ステータス不足にも関わらず魔法を習得できたりと、この通りスキルも無しに魔力を感知できていたり……何かが、ゲーム側が想定していない何かが起きているのかもしれない。

「……デスゲームなんか起きたりしないよな？」

ウチのキャラクター、探索する。

『人狼』

『狼が二足歩行したような姿であり、その大きさは人より一回り大きい。力は強く、魔法も扱うことがある。』

はあー、どっかの御伽話で見た気がするなあ？　だが残念ながら、コイツのルーツも古代の魔導士が絡んでる。やはりと言うべきか、そいつらも不老不死を求めてこうなっちゃったらしい。

知り合いのエルフが言ってたんだがな、あの人狼が死んでも、その魂は残って、それがまた別の狼を捕まえて、そして人狼に化ける。つー説があるらしい。

いや分かるぜ？　長く生きたいってのはな。

でも獣の身体を使って長生きしようだなんて、相当の動物好きじゃねえと出来ねえぞ？』

この常闇の森で一番の脅威といえば、人狼である。

人型の狼というその名称通りの容姿であり、それに相応しく人間を大きく上回る身体能力を持つ。

しかも、それなりの知能もある。

故に……。

「奇襲！」

背後で大きく膨れ上がる魔力の感覚に、俺はレイナを退けて石礫を受ける。

その1つ1つは親指程の大きさだが、侮れない。

「くっ……」

石飛礫の数は、この一瞬で見えたので6個程。速度は人の手で投げて出せるぐらいか。

そう、敵は土属性の魔法を扱う。勿論、その攻撃が有効なタイミングで、的確に。

こうして後方から攻撃を仕掛けるのは、本能というより戦略という所に近いのだから。

「いつつつ……。盾で受けても痛いっての、もう」

これならもう少し上等な盾が欲しかった。

下手な大きさになると近接戦闘で邪魔になりかねないが、この状況では望まずにはいられない。

痺れそうな腕を軽く振って、感覚を取り戻す。

その脇で、レイナが魔力を練り上げる。その発動までに、俺たちは敵の姿を確認した。

この敵は細い。しかし決して非力ではない。魔素の影響により、細い筋肉はそれでも大きな力を発揮する。

幸運な事に、この一撃を防いだ事に動揺しているのか、俺たちをじつと見るだけで攻撃する様子はない。

『『ボルトミサイル』』

雷属性の追尾魔法。

この世界において、属性毎の相性は存在しない。

しかし、属性毎に持つ特性が、特定のモンスターへ有効だとされることは珍しくない。

レイナが詠唱を完了させて放った魔法は、紫電の軌道を3つ描いて敵に迫る。

それに続き、俺も突撃する。

「ウグアアア！」

俺でも捕らえられるか分からない速度で、ミサイルを回避しようとするが、高い追尾能力と弾速を持つこの魔法が逃すことは滅多に無い。

3歩走っているうちに着弾、次の歩を踏むまでに後の2つも着弾。また2歩進み、後の1歩で大きく踏み込み、

「ツハアー！」

一振り。そして斬り返しでもう一振り。足の根元を狙った斬撃を放つ。

ボルトミサイルによって動きが鈍った所に、俺の刃は問題なく敵を斬った。

雷属性の魔法は、一般的な生物に対してのスタン効果が高い。勿論障壁や耐雷属性装備などで防がれたならば効果が無力化あるいは軽減されるが、人狼にその力はない。

ただ、基本的にはスタンは短時間にもみ効果を発揮する。

俺の攻撃の後、人狼が動きだす。

その初動は、俺を狙った腕の振り下ろし。

「流す……っ！」

こいつの重い攻撃は、まともに受けたら死ぬ。盾越してもそれは少ししか変わら無い。「死ぬ」が「最悪死ぬ」に変わるだけだ。

盾で受ければ腕諸共叩き折られる可能性があり、実際は死にかけると言うのが正しい。この場合次の攻撃につながる隙を生むから実質死ぬ。

だから流す。避ければ良いけど、無理に姿勢を逸らしたらバランスを崩すから、崩さない程度の軽い回避の動作に、受け流しの動作を交える。

「ガア！」

「(ハ)うー！」

上手く行つた！

鋭い爪を伴う腕が振り下ろされる所を、やや斜めに盾を構えて、受けた瞬間に横へ力を加えた。

腕が痺れるような感覚は残るが、十分うまい受け流しだ。

システムやスキルの加護があるとは言え、素人の俺がここまでやれるなんて！

感動を覚えつつも、敵の攻撃後の隙を使って距離を取る。

互いの間合いから離れ、少しの睨み合い。

そこへ割り込んだのは、俺の後ろで詠唱を再開していたレイナだった。

『アイスジャベリン』

「ギャンー！」

突き刺さる魔法に伴って、再び前へ踏み込み、腹の辺りを横薙ぎに切り裂く。手応えは深く、改めて見るとレイナの放ったジャベリンは胸を貫いていた。

急所の心臓にまで届いていたのだろうか。敵は胸に刺さるそれを引き抜こうとして

……そのまま後ろへ倒れた。

「……よし、消えた」

「はあああ……ちよつと疲れました」

「ちよつと2発魔法を撃つただけじゃないの？」

「戦闘の緊張感は何時になっても慣れませんよ……。それにこれで5体目です」

それは、まあ分かるかもしれない。

俺に関しては一種の興奮状態に入るから、戦闘中はそこまで気にはならないのだが。

『スキル「受け流し」を習得しました』

『スキル「盾術」を習得しました』

『スキル「剣術」のスキルレベルが上昇しました』

「つとと、一気に来た」

戦闘中は通知も息を潜めるからな。戦闘中で成長したら終了後に一気に来るのだ。

これで5戦目だが、ようやく習得出来たのは受け流しと盾術。2つともこの森へ入って1戦目から使っていた技術だ。

「魔石は……あった、回収つと。そうだレイナ、お陰さまでスキル習得したよ。『受け流し』と『盾術』」

「逆にスキルもないのによく出来ましたよね。もしかして似たゲームを以前やってたりしませんか？」

「残念ながらこれが最初なんだよね」

「あ、そういえば会って直ぐにそう言っていましたっけ」

……確かに言ったな。

それにしても、彼女の言う通り俺の戦闘技術は数字以上である。俺が現実で武術を習っていれば自然なことなのだろうが、あいにくとそんなのは習ってない。

ゲームで見かけた戦術を見様見真似するぐらいか。

「私も驚きだよ。いや、大魔法使いだからある意味当然かも」

「はいはい大魔法使い大魔法使い。というか魔法関係ないですよね？」

まあそりやそうだが。

「それで……そろそろ見えるんじゃない？」

「はい。……依頼されている魔法が群生している一帯は、木が滅多に生えないそうです。日が出ていたら太陽光が降り注いでるでしょうね」

「ランタン消したら光が見えたりしないかな？」

思いつきの提案だったが、レイナがなるほどと頷いた。彼女としても有効だと思える

らしい。

「1回やってみますか」

「そうだね」

物は試しだ。2人揃ってランタンのツマミを回して光量を下げる。

魔素による影響の一種か、木々の枝から垂れる木の実が所々光っている。光源として利用するにはこれの2000倍程欲しい所だが、完全な漆黒では流石に目立つ。

僅かな光がポツポツとみえる森の中、ある方向に赤く滲んだ光が見えた。

「……あ、見えた。あっちだね」

「夕陽の赤い光ですね。見つけられてよかったです。あそこで必要量を採ったら帰りますか」

「うん。……ところで、あの実ってなんなんだろう？ 暗闇でぼんやりと光ってたけど」

ランタンの光を再び明るくして、見定めた目的地に向かって歩き始める。

暗闇の中で微かに光っていたあの木の実は、俺の目が狂っていないければこぶし大ぐらいの大きさだった。

「確か資料にこれの絵が載ってましたね」

「え、それ知らないんだけど」

「だってケイさんモンスターと魔花の項目とちよつとしか見てないじゃないですか」

……確かに、関係なさそうな所は飛ばした気がする。

「あの実には魔力が豊富に含まれてますが、魔素の濃度が高くないと、その魔力は霧散してしまいます」

「あ、じゃあ持ち出ししても使えないんだ」

「一応少しは残るので、幾らか集めて凝縮すれば、魔力回復ポーションとして精製できます。こつちのポーションは魔法製と違って、やや酸っぱめのリングゴ味で美味しいんですよ。魔法と違って、持って変えるには嵩張りますが」

「酸っぱめリングゴ味……」

そのうちコーラ味のポーションが出るのだろうか。

俺は期待しないが、怖いもの見たさはある。でも見るだけ、飲むという気がしない。

「採っていくのは納品分と私達で使う素材分で良いでしょう」

「わかった……お、明るい」

魔法の群生地を足を踏み入れると、太陽の光が地面に降り注ぐ——と言っても今は夕陽で斜めになっていて、地面にまで届いている所は少ない——程度の広い所に出る。

足元はどこも魔法で満ちていて、足の踏み場に迷う程だ。

「なんとというか……綺麗を通り越して、若干気持ち悪いね」

「妙な深みのある紫色ですよ。これが沢山集まっていると、ちよつとおどろおどろしい

です」

地面に向かって垂れ下がる花卉と、そこから垂れる複数のヒゲのような物。特徴的すぎて間違えようが無いぐらい、それが放つ雰囲気は独特だった。

どれも資料通りの見た目だし、識別する知識も無い俺が採集しても、恐らく問題ない。レイナの手際を見習って、俺も1つ1つ摘んでいった。

ウチのキヤラクター、逃走する。

仕事というのは、必ず何処かで義務と言う名の強制力が発生する。

その義務は報酬と引き換えに与えられる物で、その両方を見て初めてそれらが利益になる。

しかし、「雇い主か社会の経済が衰弱しているか、雇用者の適性が低い場合か、またはその他要因によつては、浴に言う「割に合わない」状況に陥る。

今回の場合は……、

「ここは安全……みたいですね」

「アースウォールで道を塞いで。この魔法の壁つて崩せるんだよね？」

「はい、自発的に崩せるので逃げ道を塞ぐことにはなりません。塞いでおきますね」

「お願い。……はあ、もう、本当に修羅場だった」

俺たちのパーティが持つ戦闘力に対して、敵が多かったのだ。これでは割に合わない所ではない。死ぬ。2人揃って。

今までこうして目標物の採集を進めてこれたのは、主な脅威である人狼の出現率がそう高くなかったのと、何故か俺に生えて来た魔力感知の能力のお陰である。

だが今回は、状況が違った。

想定外に現れた初見の敵。同時に現れた多数の敵。対多数を避けてきた我々にとつては、正に最悪の事態だった。

……生き延びたのは、只々機転と運があつたお陰である。

「……ねえ」

「はい？」

「……、さっきの穴は除外するとしてさ、他に出口あると思う？」

レイナは遠い目で、今まで逃げてきた方とは反対側に延びる通路を見た。見れば見るほど、一般的な洞窟とは言い難い構造だった。

・
・
・

『ダンジョン』

『世界各地に点在するダンジョンには、強力なモンスター、特異な環境が内包されている。地上に比べれば、当然の事危険に満ちた場所である。』

その姿は多様であり、洞窟、火山、遺跡、巢などがある。

これだけでは人が踏み込む理由は無いように思えるが、その実、多数の冒険者がダンジョンに挑んでいる。

その理由が、ダンジョン内で得られる財宝である。

ダンジョン内でしか得られない様な資源は多数あり、その価値は一握りの金塊を上回ることも在り得る。中にはポーションや武器防具の類など、手に取ってそのまま利用できる物が発見されることもある。

また、この様な資源やアイテムはそのダンジョンのルーツに関わっている事が多く、多くの研究家がダンジョンの謎を明かす為に発見物を買収しては調査研究を続けている。

『ダンジョンが一攫千金の夢をもたらしているのは、冒険者に対してだけではないのだ』

．．．
危機に直面する、前日。

「くうううつ、外の空気は美味しいなあ！」

「夜ですけど、森の中より明るいですね。月が大きい日で良かったです」

満月とは行かないが、半月の形が少し膨らんだ形が空に見える。

たしかこの形の月をなんと叫んだか。

「今日の成果は一ヶ所の魔花採集と、数匹の人狼、あと動物でしたね」

「あと幽霊もね。ドロップが少ないっていうか、あんな粉しか無いから成果としては微妙だけど」

あととは意思を持ったように動く植物、名称ネットプラントが居たか。あれは蔦の様な物を絡めてその場に抱きかかえるように締め付けるくらいだから、単体では危険はそんなに無い。倒す旨みもそんなに無い。

レイナによると、絡め捕った相手の魔力を吸い取る植物らしいが、そもそも空気中の魔素が潤沢なせいか、この一帯のネットプラントは捕獲能力が退化している様だ、との事。

それでも戦闘中に絡め捕られたら危険だが、そのような状況には陥らなかった。暗いからランタンに照らされないと見えないのだが。

「あれでも、この魔石ランタンの燃料の足しにはなるんですよ？ あの量じゃ数分が

やつとですけど……」

「そういえば魔石が燃料だったね。そっか、じゃあ完全には無駄にならなさそうだ」

成果について話ながら行く森の外は、視界が開けていて不意の遭遇がなさそうだ。暗いから見落とすことも多いだろうし、夜行性のモンスターが襲う事も無いわけじゃないが、森の中で出会うモンスターよりは楽なものだ。

特にこれといった出来事も無く、無事村へ到着する。

この辺りは平地が広がっており、北の山脈が少しばかり大きく見える。

「ここが？」

「はい。私が以前来たことのある村です。あ、そこに馬車も見えますよー！」

「本当だ。御者さんも居るかな？」

見てみると、居た。1人で空をぼんやりと眺めていた。

確かにこの世界の空は星が美しく見えるが、他にやる事が無いのか？

「天体観測中？」

「……いえ、観測なんて程のものじゃないです。それよりも2人ともご無事でよかったです」

「私たちが帰って来なかったら、大声で咽び泣いて悲しんでくれる？」

「そこまでは悲しみませぬ」

俺の大袈裟な表現に、それは流石に、と言わんばかりの即答が返ってきた。

「泊めてくれそうな所はあった？」

「どちらかと言えば、ありました。宿屋の様な事をしていた家はあるんですが、その家の住民が皆揃って体調を崩してしまっただけです」

「え。それ大丈夫？」

「いえ。他の方々は疫病と言って近寄ろうとしません。あそこに泊まれば村人から避けられるでしょう」

ううん。今後付き合うかもわからない村の印象を下げたくは無だし、かと言って寝床が無いのもなあ。

今日は馬車で寝るといふ選択肢もあるかもしれないが。

「村での野宿するとしたら、見張りいるかな？」

「う、やっぱり野宿の方向なんです。私ならログアウトして凌ぎますけど」

「……その手があったか」

「夜の間はこの世界を離れるんですね？　なら、私は適当な民家を訪ねてみます。私人なら受け入れてくれるでしょう」

おや、彼にはログアウトに関する理解があるらしい。

そういえばNPC達のプレイヤーに対する反応を今まで知らなかった。プレイヤーの持つシステムの諸々は、彼らにとってはどう映って見えているのだろうか。

「宛はある？」

「村長に相談してみます。あなたの依頼主さんとの関係で、私も知り合っています」

「そっか。……不都合があつたら今のうちに言つてね」

「有難うございます。でも問題は無いでしょう」

心配だが、過保護にはしない。彼の言葉を私達は信用して、ログアウトすることにした。

「それじゃあ、また明日」

「はい、それでは」

「おやすみなさい」

レイナと再ログインの時間を示し合わせてから、俺たちは現実世界に戻っていった。

・
・
・

仮想世界に帰ってきた。

朝まで待つ……と言つても、現実世界で待つ時間は30分程度だ。現実の一時間で

ゲーム内で太陽が一巡りするのだから、そんなものである。

現実でやって来た事と言えば、少々のトイレ休憩と読書ぐらいである。それとちよつとした調べごと。

仮想世界に意識を落とせば、時間通りにレイナもここに来ていた。お互い馬車の側でログアウトしたから、その場所に俺たちは居る。

「おはようレイナ。よく眠れた?」

「……たつたの30分で、眠るも何も無いですよ」

「まあそうだよね。あはは」

まあ、寝不足という事も無いだろう。

この様な方法で夜を凌いでいると、体感時間が24時間以上であるにも関わらず寝ていない状況が発生するだろうが……。

「大丈夫?」

「ううん。夜間を凌ぐために現実へ戻るなんて事するのは初めてなんですけど……ちよつと不安ですね。今の所は体調に異常はないんですけど」

「ネットでかるーく調べたけど、問題は無いみたい。どつちかの世界で過ごした累計時間の中で、その中で十分な睡眠が取れていれば、だけど」

「……体感時間って事ですか?」

「うん。体感でね」

どっちにしろ、寝なきやいけないのは変わらないのだが。

因みに、現れる症状は一般的な寝不足とさして差は無いらしい。

さて、地図を引つ張り出して、今日の予定を適当に考える。

目標の地点は複数あるが、それら全体の南東側の数力所は既に用済み。今日は北東から北西にかけて地点を辿ろう。

昨日はそんなに考えていなかったが、それなりに深い所を潜ることになるから、考えた方が良さだろう。

「今日は朝から行動するから、日没を気にする必要はないね」

「時間を掛けてもいいなら、退路をなるべく確保したいですね……」

「それじゃあ……なるべく森の外側を辿って、目標地点に入るときだけ潜る？」

「そうすると移動距離が長くなりますね。撤退しやすいかもですが、会敵する回数も増えるかもしれません。森の奥よりも外側のほうが遭遇しづらい……という証拠は何処にもありませんし。それに東に行くほど深いですので、実質深い所を往復することになります」

何度か意見を交わしてみるが、今まさに調査中の森の事に関する情報は少なく、判断材料に欠けた今は確実な行動を選ぶことが難しかった。

「……今回は、もらった生態分布図を参考にルートを決めよう。過信はするなつて言われたけど、縄張りの中を横断するよりはいいでしょ」

「そうですね」

情報が不完全なりに作戦を立て、ルートも行動の取り決め等は大体決まった。

私が不意打ちを察知した場合、察知できなかった場合、一方的にこちらから発見した場合、地形や状況が悪く戦闘するべきでない場合。

と、考えようと思えば幾らでも考えられたが、あんまり詰め込んでも判断に時間が掛かってしまうから、軽く覚えられる範囲で抑えておいた。

実際、私はどういう方針で、彼女はそういう方針で、というのを伝え合ったぐらいだ。

「よし、行こう」

・ ・ ・

森の中に踏み込んで、いくらかの魔花採集地点を経由する。

自身の位置を見失いさえしなければ、問題なく縄張りや会敵しかねない地点を回避で

きた。

「足元、気をつけて」

「はい。……なんか、ケイさんもサマになってきましたね」

「そう？ まあ、慣れてきたからね」

ネットプラントを避けつつ前に進む。次の地点で、確か最後の3つになるはずだ。

「あ、太陽の光が見えました」

木々が太陽を完全に遮ってしまい、薄暗い森の中。木漏れ日の光はよく目立つ。

魔花の群生している場所の特徴だ。

と、思っていたのだが。

「……なにこれ？」

そこには魔花どころか草の一本生えない場所。

地面は土というよりも砂利に近い。

そして中央には、大岩がずっしりとあった。

「大きく窪んでますね。元は湖だったのでしょうか？」

「湖がこんな風に枯れるかな。いやまあ、詳しくはないけど……」

俺は、これがただの湖の枯れた跡とは思わない。

魔力の感覚が、中央の大岩から感じ取れる。それも強く。今まで出会った敵の数倍ぐらい。いやそれ以上かもしれない。

「とりあえず離れよう。こここの地面は石がごろごろしてて歩きづらい」

「ここで敵に遭ったら大変ですね。そうしましょう」

「うん。次の地点に……マズイ、隠れて」

「ひゃ」

話をしたら影とはよく言う。呼ばれて出たかのように近づいてくる気配に対し、レイナの手を引いて岩の裏へ身を隠す。

「まだ気づかれてはない。不意打ちで仕留められる？」

「え、えっと。私には姿は見えないんですけど、一撃では難しいかと思います」

できる限り小声で話しかけて、意見をもらう。

望み薄だが、俺の魔法での追撃をつけても無理だろうか。

「私の魔法での追撃でも？」

「うーん……威力不足ですね。私の一撃が急所にあたりでもしないと」

「そっか、やりすぎそう」

レイナもそれに同意し、息を潜める。

しかし、この岩。これの下で魔力が集中しているように感じる。向こう側の敵の気配

を感じ取りづらい。

離れる、離れる、と念を送っているうちに、気配は遠ざかる。

「……よし、向こうに離れていった。こっちの方角に行こう」

「はい。……あ、あれ」

「うん？」

「あの、足元が」

足元？ そう言われて、足に何かが当たる。

見ると、小石が地面を転がっている。それも1つや2つではない。

「なんだ、これ」

「ちよつとますぐくないですか……？」

小石やそれなりの大きさの石が、先程まで隠れていた大岩に向かって集まっている。

あれは転がっているというよりは、引き寄せられていると言ったほうが……ああ、

これは。

「……確かにまずい」

集まる小石が、大岩に纏わりつく。まるで何かしらのシルエットを形成させようとして

ている様に見えた。

これは分かりやすい。ファンタジーのモンスター代表であろう名が、頭に思い浮かん

だ。岩を継ぎ足したかのような輪郭は、ずっしりとした胴を持つヒトガタに化していた。

「ゴoremだ。逃げて、逃げて！」

「は、はい！ ひゃあ！」

「レイナ！」

転がる石に躓いたレイナを、手で引いて支える。

「あ、有難うございます……」

「怪我は無い？ 直ぐに——」

「GUOOOOO……」

「GULLLLLLL……」

「……あ、はは、やっばい」

「か、囲まれて……」

レイナを立ち上げらせている間に、人狼たちが集結してしまった。

先程まででは一体しか居なかったはずだが、この短い間でどうして集まったのか……。その答えは、魔力を感じ取る俺には直ぐに予想がついた。

あのゴーレムが立ち上がった途端、塞がれていた穴から、まるで口の空いた風船の様に魔力を吹き出していたのだ。それを察知したモンスタ―達が、この場所に直行したのだろう。ほら、今もこの魔力に誘われて新しく一体やってきた。

「打開策は？」

「……あの穴に、いえ、でも」

「悩む暇は無いね」

前も後ろも、右も左も敵だらけ。上へ飛び立つ翼を持たない俺たちには、もはや下への方向にしか逃げ道がない。もしあの穴の先が行き止まりだろうと、或いはさらなる苦難が待ち構えようと、この状況よりはマシなのだ。

休眠状態だったゴーレムが、その体で塞いでいた穴。なにもない方がおかしい。しかし、生きるために行かねば。

「先に入って中を確認して！ 『ファイヤーボール』、『エア―ボール』！」

「はい！ 『アースウォール』！」

ずしり、ずしりと距離を詰めるゴーレムとの間に壁が迫り上がり、逃げ腰を見せた俺たちを機敏に追う人狼達は魔法で迎撃される。しかし壁はゴーレムの一步により崩れ落ち、人狼は魔法に対して怯んでも、残りの大勢は追い続けて来る。

苦し紛れの時間稼ぎにもならない攻撃。それだけを置いて、俺たちは迷宮の入り口へ

と飛び込んだ。

ウチのキャラクター、脱出する。

『魔種』

『魔力に適応し、それ単体で魔法と同じように何かしらの現象を発現出来る様になった物。』

それらは生き物、モンスター、アイテム等に存在する。特に魔種の武器は冒険者に強い人気があり、その高い金銭価値はもちろん、彼らの生存や今後の冒険に役立てる事ができる。

魔種となる物にはそれぞれに属性が与えられ、その属性に則した能力を発揮することが出来る。魔力を扱う心得の無い者でも、そのアイテムがあれば魔法使いと同じ様な事が出来るだろう。

主にダンジョン内で発見され、上位の物作りの能力と魔法能力を持つのであれば、自作することも可能である。』

ある程度逃げた後、レイナに頼んで壁を作る魔法を使わせる。

「壁が壊されなければ良いんですけど……」

壁を幾つか重ねて作り出し、逃げてきた方向を完全に塞ぐ。これで万が一にも追手がこの壁を破ろうとしても、時間はたつぷり稼げる。洞窟の広さも、あのゴーレムがらくらく行けるかと言われればそうでもない。壁を簡単に壊しかねないゴーレムに関しては、今の所考えなくてもいいだろう。

さて、問題を一つ潰した所で、次の問題だ。

この洞窟、魔力の流れが激しい。レイナ曰く、特別大きな魔法を使わないと一瞬で回復するし、使ったとしても一瞬が数秒に変わるぐらいらしい。

「……もしかして」

常闇の森とこの洞窟に……いや、この洞窟の奥に眠る何かと関係があるのかもしれない。

しかし、今の俺たちの目的はこの洞窟の脱出だ。洞窟の攻略をするほどの技量も目的も持ち合わせていない。……ただ、攻略するとしたら、この魔力の流れを辿った方がいいだろう。

「魔力の流れ、まだ感じない？」

「……少し、ですけど、風みたいな感覚がありますね」

レイナがスカートの手端を掴まむ。スカートが風によって揺れる様子はない。にも関わらず彼女は風みたいな感覚があると言っている。魔力を感じ取っている証拠だ。

「多分、この魔力は出口のある方に流れてる。さっきの道は塞いだから、今の所上流に行くしかないけど、分かれ道に出たら別の下流に向かおう」

「分かりました。……あ、一応マッピングしますか？ マッピングスキルも魔法もないので、簡易的なものですけど」

さっきまで使っていた常闇の森の地図の裏側を見せる。裏側には何も書かれていないから、マッピング用としては良しである。方眼紙だったら楽だったろうが。

「簡単でいいよ。マッピングに集中して互いを見失ったら面倒だ」

「分かりました」

しかし、この洞窟……どうにも洞窟だという気がしない。

まるでトンネルとして掘られたかのように一定の広さで続いている。天然のものであれば、ここまできれいな一本道は生まれまいだろう。

ゲームだからそうなっているのか、あるいは天然ではないということなのだろうか。

「普通の洞窟じゃないよね」

「ええ。多分ですけど、ダンジョンだと思います」

「ダンジョン……なるほどね。と言うか、そりやそうか。ダンジョン以外に何が在るんだって話だ」

そうなると、不自然に見えるこの構造も、なにかファンタジーな力が働いた結果なのだろう。便利なものだ。

「にしては敵が居ないけどね」

「はい。結構歩いてる筈ですが……」

どちらにしろ後ろに行く選択肢はないので、更に歩いていると、分かれ道にたどり着いた。魔力の下流へと分かれる道が2つと、上流への道が1つ。言うまでもないが、俺たちが来たのは下流への道の内1つだ。

「行こう。流れはこっちに向かっている」

「はい」

進軍は順調だった。ダンジョンの探索をするにも、この一本道では探る場所はどこにもない。

「……む、これは」

「どうしました?」

「魔力の流れで感じ取りづらいけど……魔力の反応。多分敵」

目視は出来ないが、敵の気配を感じ取った。

剣を構えて、歩みを慎重なものに変える。向こう側は、こちら側へ真っ直ぐ向かってきているようだ。

「こつちに来る、迎撃するつもりで」

「はい」

ここまで来れば、先制攻撃は容易だった。

「……来た。『ファイヤボール』！」

『『フレイムジャベリン』』

俺の攻撃による炎が敵を照らし、レイナがそれを目掛け炎を投げつける。

無防備だった敵は障壁を貼る事もできず、腹に受けた炎の槍と共に消えてしまった。

「良いね。一方的に攻撃出来れば楽だ」

「これが毎回出来れば良いんですけどね」

地上に居たときよりも気配は感じ取りづらい。きつとこうした先制が出来る機会は少ないだろう。

先手を打たれた時に退避できるように、逃げ道を意識しておこう。

進行速度を遅めつつ進む中、偵察ついでに洞窟を観察してみていたが……。

「洞窟というより……掘り進められた穴？」

「どうしましたか？」

「いや、この通路ずっと水平に進んでるじゃん。それに広さも一定」

「確かに天然って感じじゃないですね。……そういうものでは？」

「……ゲーム的な？」

「はい」

そう言われるとなんかそんな気がしてきた。

歩きづらいダンジョンなんて、操作性の悪いゲームと言っても良いからな。幾らスキ

ルの補正があつたとしても。

「だとしても、それなりの設定があるのかもね。……ん、分かれ道だ」

向かう方向をちゃんと示して、はぐれないようにレイナに注意しながら角を曲がる。

距離はわからないけれど、確実に進んではいる。

「運が良ければ、あとは半分かそれ以下かもね」

「こんなにウキウキしないダンジョンも滅多に無いですね」

「そんな遊園地のお化け屋敷じゃないんだから」

「え、ウキウキしながら歩けるんですか？ お化け屋敷」

歩けるが。

「歩けるよ?」

「私はむりです」

「あー」

「こっちの幽霊を見たときは相当怯えてたしな。最初だけだったけど。」

「まあ、私が守るよ」

「心強いですけど、実はまだまだ数字では私が上なんですよね……」

「む、信用ならないか」

「ならないわけ無いじゃないですか」

ふんすと後ろで怒りの感情を垂れ流しにしているのを感じる。いや何故怒る。

・
・
・

「ん、大部屋か。広いね」

「わあ、天井が高いです。やぐらも沢山立ってます」

「そうだねえ。やぐらが沢山だ。壁もなかなか立派だ」

……間違いなく厄介な部屋に踏み込んだな、これは。

洞窟の中に要塞だなんて妙なものだが、やはりダンジョンだからという事なのか。

「モンスターの中でこういう事をするのは、ゴブリンぐらいですね」

「なるほど、焼く？」

「全くなるほど出来てないですし焼かないでください。敵の配置は分かるんですよ？」

「まあ一応。あそこらへんが多いとかしか分かんないけど」

魔力から敵の位置を割り出すには、やはり魔力の風が強すぎる。

「じゃあ……私があそこに範囲魔法を打ち込みますね。焼かずに」

「焼かないのは分かったよ。でも、壁越しに？」

「出来ますよ。あまり大きいのは使ったら洞窟ごと崩れかねないので、細かいのを何個か投げますね」

なるほど。それなら序に破壊工作もやってもらおう。

「じゃあやぐらの足元にも投げて置いて。その後門の前で陣取って、敵を誘い出して迎撃する」

「良いですね。それじゃあ始めましょう」

そう言って、詠唱を挟みつつも5個程の『エレキテルボム』を投げ込んだ。私の要望通りちやつかりやぐらの方にも『ロツクボム』を投げ、その足元を破壊した。

これで門の前に居座つても、あの上からの遠距離攻撃を受けない。

「ようし、道場破りだ！」

見張りも置かれていない門を蹴り開いて、大声を張り出して敵を呼ぶ。

バチバチと電場が残っている場所の辺りに、数体のゴブリンが倒れている。

小柄で、醜くて、鼻や耳が大きく、序に緑色の身体。ここまで来れば、ゴブリンを見たことのない俺でもゴブリンだと分かる。彼らを取るコミュニケーションも、とても言語とは言えない様な唸り声や叫び声ばかりである。

本能をむき出しに、これだけは文明的と言える立派な剣や槍を持って6匹程襲いかかってきた。

「妨害程度で十分だから右側をやって」

「はっ」

詠唱を始めるレイナを背後に、左側に踏み込む。

慌てて防御に回された槍を目掛け、体重を乗せた一振りで柄を両断し、返す刃で胸を切り開く。2匹目のゴブリンが剣を大きく振りかぶるが、タイミングを見計らって回避。軽く反撃しつつも三匹目を警戒するが、奴は一步引いた所で盾を構え様子を見てい

た。

すると右側の方で丁度爆発、ゴブリンがまとめて吹き飛ばされて、砦の中に戻されるか壁に打ち付けられていた。武器も手放している様子だから、しばらくは脅威ではない。

軽い反撃を受けたゴブリンが苦しんでいる様子を見て、とりあえず無防備な首を一突きにして止め。案外ゴブリンというのは脆いようだ。

「奥から弓持ちが来ていますー！」

「了解」

そう言うって盾持ちに目を向けたら、ギヤイギヤイと騒ぎ始めた。威嚇でもしているのか、その叫び声を合図に攻撃してきた。普通は目を向けていないタイミングで攻撃するだろう。俺は攻撃を剣で受け止め、盾を蹴って退かせる。たたらを踏んだ所で盾を掴み、その横から剣を一突き。力が緩んだ所で奪い取った。

「……なんていうか」

遊び慣れたゲームを、改めてイージーモードで遊んでみた時のようなあっけなさだ。

ゴブリンは小賢しい、ずる賢いという印象を持っていたが、卑怯な手を使う様子はあんまり見られない。

寧ろ馬鹿である。

奪い取った盾で身を守りながら門の脇に避ける。

「レイナ、弓持ちを攻撃。私は妨害してもらった残りを始末する」

「了解です」

次は、いそいそと武器を回収しようとするゴブリンたちを、一体ずつ倒していく。その合間に、奪い取った盾で身を守るのを忘れない。

この一振りずつに軽快な剣撃を体現しておいてなんだが、『剣術』スキルによる補助なのか疑問を覚えるような動作を、違和感なく行えている様な気がするのだ。

それに戦闘中の思考もクリアだ。落ち着いているし、視野も広い。VRとは言え命の危険を伴う戦闘中は、どうしても冷静さを欠いてしまうはずなのだ。敵の武器が恐ろしくてそこに目線が集中したり、大雑把に避けたくなくなってしまふ。喧嘩の経験は無いが、もし俺が現実で戦うとしたら、きつとそうなる。

以前俺は、『悪路踏破』スキルを補助輪の様な感覚と表現した。

けれどこれは、独りでにバランスを取り前進する自転車の様、と表現できてしまふ。下手をすれば、誰かが漕いでいる自転車の後ろに座っている、という表現が……ああ、しまった。何ということか、こっちの表現の方がしっくり来てしまった。

「……最後の弓兵を倒しました」

……まあ、有益な変化であることには、違いないな。今のところは、だけれど。

「まだ数体は居る、けどまばらだね。多分、それぞれの持ち場から慌てて来てるんだ」
心配を感じた方に目を向け、剣片手に走るゴブリンを見つけたので『ファイヤボルト』
を放つ。

避ける仕草もせず魔法を受け止めて、奴は倒れた。

「単体だけなら大した脅威じゃないな」

裏手に取った剣で、倒れたゴブリンに突き立てる。

「相変わらず戦闘がこなれてますよね……というか、どんどん動きが的確になってませ
ん？」

「スキルのお陰もあるけど、まあ、慣れてきたんじゃない？」

慣れてきたと言うか、冷徹？ 今の俺は殺人マシーンである。なんて冗談交じりに
言ったら怖がられそうだが。

「やっぱり納得いきません」

怖がられるどころか、なんか怒られてる気がするが。

・
・
・

ゴブリンが拠点にしていた砦を抜け、また通路を進み続けると、鼻がなにか違う空気を嗅ぎ取った。

洞窟の湿った様な匂いに混じって、草木の香りがある事に気づく。

「あ、外の光ですよ！」

脱出の瞬間はすぐそば。お互い顔を見合わせて、一斉に走り出した。

体内時計はそう経っていなかった筈だが、朝に出発した筈の俺たちは今や夕暮れの暖色を目撃していた。

「出たー！」

出た先は、やはり常闇の森の中ではあったが、しかし一帯は木々の無い大広間の様であった。この空間から、気持ち窮屈な運動会が出来るであろう広さが見られた。

「大自然の空気は美味しいねえ」

「はい。……でも、どう出ましょうか」

「それが問題だよね」

高台にでも登って周囲を一望できれば、なんとか目星はつけられるかもしれないが……。

「ねえレイナ。最初に入ってきた辺りから、どんなふうに移動してきたと思う？」

「うーん……南西、ですかね」

森の奥深くに出てきたという訳か。場合によっては反対側を行ったほうが近いかもしれないが、常闇の森の地理情報が詰められた地図は、東側しか書かれていない。森の全体が分かる地図を貰うべきだったと後悔する。

「目印になりそうな大木は無いし、現在位置はわかんないな。魔花を探そうか？」

「そうですね。東に向かいつつ魔花の群生地を探してみましよう。少なくとも2個以上見つけないと現在位置は分かりませんけど」

大変だが、そうするしか無いだろう。

きつと大丈夫だ。問題なくダンジョンから脱出できたのだし、森ぐらいなら無事に出られるだろう。

ウチのキャラクター、依頼完了。

—— その日、私は思った。「情けない」、と。

—— だから私は剣を振るった。

『第一章 第三節』

『この世界に生まれ落ちた俺は、前世の記憶を受け継いだこの身体の調子を確かめた。

身体と記憶との齟齬で運動に支障が出るものの、魔法の行使には問題がなかった。むしろ扱える魔力量が予想以上に大きい。これは体質ではなく、魂が前世世界線から引き継がれたせいだろう。

体といえ、俺は女性であるらしい。いや、下の確認までしたのだから、「らしい」を付けるのは不適當だ。

色々と思うところがあるものの、俺の決意が揺るぐことはないだろう。

俺は、彼女に会う。

だから、俺はここに居る。

まずは前世界線と現世界線の共通点、相違点を洗い出さなければ。

……その為に、両親に本やペンを強請ろう。変人扱いは予想に容易いから、気が進まないが』

—— その日、私は剣を振るつた。

—— 私はまだ、「守りたい」と思っていた。

・ ・ ・

コンコン、コンコン。

森を出て、無事村で朝を迎えた後、俺達はすぐ様王都に帰ってきて、この通り扉を叩いている。俺は——現在はこの身一つだけで、レイナは宿の方に向かったが——恐らく急を要するであろうと思い、やってきたのだ。

「愛しのケイちゃんが帰ってきましたよー」

コンコン、コンコン。

そろそろノックする手が痛くなってくるぞという頃に、一昨日ぶりの顔が出てきた。その顔には、先日会った時点では無かった寝癖が至る所で跳ね上がっている。

寝起きのところを起こしたのだろう、申し訳無さはあれど、それに相応しい理由は持つてきたつもりだった。

「……ケイさんですか？」

「やつと出てきた。そう、常闇の森でちよーつとイレギュラーに遭遇したケイちゃんたちだよ」

「はあ、しかし随分とはや……待ってください」

如何にも寝起きという顔が、表情だけ仕事モードに入る。

「イレギュラーですか。なるほど、それでこんなにも早く帰還したのですね」

「迂闊にぶつ倒れて、可愛くも無い人の泣き顔なんて見たく無いしね。それで、入れてくれるかな？」

「分かりました。所でレイナさんは？」

「宿で休んでる」

先日と同じ様に、机の方に案内される。

そこで、レイナに書いてもらったダンジョンの簡単なマップと依頼されたアイテムを

机に並べる。

「先ずは依頼された物。指定された量は満たせてないけど、中途納品と言うことで一つ」「ええ。……状態が良いですね、採取が手慣れているのでしょうか」

「レイナが錬金術やつてるからね。採取は殆ど任せてた」

「なるほど。そしてこちらが魔石ですね。この小包みや束に書かれた印が、森の地図に書き足されてる印の座標と関連しているという理解でいいですか？」

「そうそう、ちゃんと一個一個書いておいたよ。……で、肝心のこれ。丁度敵に囲まれてたから位置は正確には分からないけど、この辺りにダンジョンらしき物の入り口があった」

「ダンジョンですか。環境が環境なので、予想はしていましたが……なるほど。詳しく報告してくれませんか？」

「元からそのつもりだよ」

帰り道の傍に用意した手書きの書類を見せつつ、ダンジョンについて事細かく説明していく。

内部構造、魔力の流れ、出会ったモンスター。一度喉を水で潤わせようかと思っただが、そうする前に報告できることを全て伝え終えた。

「ふむ……。質問ですが、外のモンスターと中のモンスターに、差異は感じませんでした

か?」

「差異は……うーん。幽霊さんは外の奴らより中の方が落ち着いてたね」

「そうですね。魔導霊体は、存在の維持の魔力を多く消費します。ダンジョン内は魔素が多いと仰っていましたね。だとすれば、ダンジョン内部の彼らに關しては、存在の維持に必要な魔力を危惧せず活動しているのでしょうか。他に感じられた差は?」

「いやー。……出会うモンスターは殆どが、ダンジョン深部の方へ進んだり意識を向けていたりしてたね」

「そうですね……。これは他のダンジョンでは見られない特徴ですね。他には魔石が大きかったり、体格や強さに変化は無いのですね」

「それは無かった。……そういうのがあつたら、なにか問題か?」

「これまで発見されなかったダンジョンです。その危険度を把握して、いち早くギルドへ報告、冒険者へ周知させないと、我先にと潜り込んだ冒険者が、あるいは貴方みたいに迷い込んだ人々が危機に晒されます」

「そっか」

確かに必要なことだ。俺たちは真つ直ぐ出口へ行けたが、それが出来ない他の人にとつてはまさに迷宮。補給も休息も難しいダンジョンでは、実力以外の諸々までもが求められる。

「常闇の森で遭遇するモンスターと、強さは同等に近い、と……。深部に移動もしくは注意を向けているとなれば、深度によって敵の遭遇頻度や強さが変動するでしょう」

「私たちは戻るルートを辿っていったから、楽だったけど」

「そうでしょう」

他にも幾つか話し合ったが、私たちの僅かな探索によって得た情報は、新たに事実が判明させることもなく依頼主のノートに書き溜められてゆく。

これぐらいだろうか。これ以上の情報提供は、彼と同じ様に頭を傾けて思案しないと出来ない。それだと情報提供というより、仮説を思いつき考察している様な物だ。

「議論はここまでとしましょう。本分ではないでしょうに、ご協力に感謝します」

「ああ、良いんだよ。冒険者で魔法使いとあれば、謎を疑い解を見抜くのは当然さ。ついでに好奇心旺盛なもの」

「確かにそうですね。それでは、これをもって依頼完了とし、報酬を用意しましょうか。依頼品は全てでは無いですが、最低限以上の物を納品していただけましたし、それを補って余る程の発見をしてくれました」

「良かったの？」

「元より、常闇の森には何処かに魔力の大元が存在していると踏んでいたのです。魔花等を分析して、保有している魔力から大元の位置を算出するはずだったのですが、あなたはそれを直接見つけたのです。危険を冒しての事だったでしょうし、この手当も含めて……本来の7割増というのはどうでしょうか」

「……その好意の上で賃上げ交渉するのは、個人的に気に食わないな。私はそれで受け取るよ」

「そうですか？ ……では成立という事で、この依頼書を依頼処へ持って行ってください。依頼完了の印と追加報酬の旨を書き足しておきました」

「ありがとう。また機会があったら、その時は楽しい冒険に送り出してね」

出来れば今回みたいな事が程々に起きる程度の冒険を。

「考えておきましょう。それではまた」

「うん、また」

別れを告げて部屋を出る。去り際に、視界の脇で小さな姿が四足で駆けているのを見つけたが、それはすぐに見失ってしまった。今のは黒猫だろうか。

しかし気になる程ではない。俺は報酬を受取りに、その金額の重さに期待しつつ歩きました。

「お、おお……これはちよつとした大金ですね。半分ももらつちやつて良いんですか？
私はポーション売りで稼ぎがあるので、ケイさんがもう少しもらつて良いんですよ？」

元々それなりの危険度が想定された依頼。その7割とあれば、レイナの言う通り結構な金額となった。

「色々無理を聞いてくれたからね。貰つてよ」

「あ、そう言われると……。はい、貰いますね」

「……思つてたより無理させてた？」

「はい、今思うとそうですねー」

「あー……」

本当に迷惑を被つて誠に遺憾である。と言つた風な顔だった。

今までは苦勞している最中だったから見逃されていたが、余裕が出来てから改めてお説教、と言う事なのだろう。これは拙い。

「割りに合わないリスクに飛び込む様な事してたのは謝る。ごめん……」

「……ふふ、なーんて。私はなんとも思ってますよ」

「へ？」

「前、お母さんから教えられた事があるんです。「友達が居るからこそ、無茶が出来るんです」って。今回は、ちょーつと加減を間違えただけですよ」

「レイナちゃん……」

「探索中、何度も助けられましたしね」

「なんて事だ。やっぱりレイナちゃんは優しい。魔法使いだったり錬金術師だったりするが、実際は聖母か天使なのかもしれない。」

「けど……」

「けど？」

「友達というのでしたら、あだ名で呼び合いましょう。ケっちゃん」

「へ？ あ、じゃあ私も……ええっど？」

「……」

期待と悪戯心で7対3だろうか。俺はどういう風にレイナちゃんの事を呼ぶのだろうと、キラキラと輝く瞳が突き刺してくる。或いは、女友達が居ない俺に対して、一体どれほどの時間の間あだ名の決定に苦心するかを、面白げに眺めているのかもしれない

い。

瞳を一对と一对で見つめあつて数秒、頭に思い浮かんだ安直なそれを、恐る恐る口にした。

「レイちゃん……じゃダメ？」

「大丈夫ですよ、ケっちゃん！ これからもよろしくですからねっ」

……どうやら彼女とは、今後もよろしくされる事になるらしい。

閉幕 私の新しい友人

この世界で出会った、この類のゲームは初めてだと自称している、ちよつとだけ、いやかなり強さと数字が一致しない友人。

心のどこかで、「先輩としての矜持が許しません!」と思ったのも束の間、戦いを何度も後ろから見届けたこの一件以降は、友人の変な所、ではなく頼れる所だと思つて気にしなくなりました。

「でも、料理まで上手だなんて、ちよつとズルいと思いませんか? これじゃあ万能じゃないですか」

「そうかしらあ?」

カウンター裏の椅子で足を振り子にしている私の話し相手は、私をこの世界に誘つてくれた友人のりつちゃん。もといりーチエです。彼女は現実世界での友人であり、ケつちちゃんとは違つてその世界の顔をお互い知っています。

「でも良い子じゃあない。聞いた感じは冒険心に溢れた子供みたいに聞こえるわあ」

「子供……。言われてみると、確かに子供っぽいですね。私より背丈が高い子供って考えると違和感がすごいですけど」

「レイナちゃんはちっちゃいものねえ」

「ぷー。どうせチビですよー」

それに比べてケッチちゃんは、女性平均に倣った様な体型です。

「はあ。私がおう少し大人の体で動けると良いんですけど……」

「何度も試したじゃあない」

その度に強烈なVR酔いに襲われたので、今はやらないと決めています。決めていまずけど、だからって望んでないわけじゃないです。

「動けるといえば、ケッチちゃんの身のこなし、凄かったですよ。剣道や剣術を習つてるとかじゃないです、あれはきつと剣士の生まれ変わりです」

「大袈裟ねえ」

「信じてないですね？」

「まさかあ、そんな事ないわあ」

疑わしいですね……。

まあ話しておいてなんですけど、確かに直接見もしていないなら信じ難いのは当然です。

「意識していないかもしれませんが、私の射線を塞がずに戦ってくれるんですよ。そこ

までしてくれる前衛がどれだけ貴重か……」

まあそんな事言うぐらい前衛さんと共闘した事は無いんですが。

「そんな事言う程パーティ組んだ事ないじゃあない？」

「分かつてますよそんな事」

どうせ私はまともにお話出来ませんよ……。

これでもだいたいマシなんです。家庭科部の友達でさえ吃る始末。唯一、単語を繋ぎ繋ぎでしか話せない私に、嫌な顔せず話し相手をしてくれるりつちゃんには感謝しています。

突然、「VRのアバター越しなら話しやすくなるんじゃない？」と、理由と仮説が全く繋がっている気がしない理論——それが切っ掛けでこのゲームを始めました——を持ちかけるぐらいには、私の事情を解決しようとしてくれていきますし。

「りつちゃんが私のそばで戦ってくれば、パーティ組めない問題をいち早く解決できたんですけど」

「それじゃあ、薬にならないじゃあない」

「ええ。分かっています。りつちゃんとはかり話してたって、人を怖がる癖は治りません」
「そうよ。……そうねえ、この話を知ってるかしら？」

何の話をするつもりなのでしょう。巨漢の形をした友達の瞳が光ります。彼が、現実

では女の子だという事実を以ってしても、その怯みかねないような眼光です。

それもそうです。現実のリッチちゃんと結びつかないような雰囲気、どうしてか彼から感じられるのですから。

「VRとは仮想現実。想像を仮に現実映すという事なの」

「仮想現実とは仮想の形で現実を再現するという意味だと思っただけですけど」

「いいえ、この世界にとってはこれでいいの」

リッチちゃんが突然バ……変なことを言い出しました。

「この世界には、望んだ自分になる」権利を皆に与え、それを助ける力があるの」

「……」

「貴方が言葉を交わし、想いを共有する友を求め、そしてそれが叶ったのはそのお陰よ」
……いつもなら、またリッチちゃんが変なことを言い出したと流せるんですが、ケっちゃんという友達が出来たせいなのか、それを否定したり冗談だと笑ったりする事ができませんでした。

「本当に……この世界がそうしてくれたんですかね」

もしそうなら……ケっちゃんも「望んだ自分」が得られるんでしょうか。私は彼女の望みや願いを聞いたことではないですが、もしあるんだしたら……。

「ケっちゃんの望みも、叶えられるんですかね」

「ええ、きつと叶うわ。友達の貴方が助けてあげれば、もつといい形で叶えられるとも」

・ ・ ・

後々思い返すと、あのりっちゃんの理論だと私の体型が大人にならないという事実に矛盾している事に気づきました。

もうりっちゃんの訳わからない理論には一瞬も耳を貸さないと、心に決めました。

第二章 怪盗紳士イツミ・カド

開幕 俺の声

閉じられた視界、頭を包む窮屈な硬い感覚。

頭のあたりを触ると、ヘルメットのような感触が伝わってくる。

それを両手で挟むと、ゆっくりと持ち上げる。

「……」

光を遮るヘルメットを外すと、視界が解放されたように光が入って来た。

身体を見下ろせば、少女らしい胸の膨らみはどこにもない。後ろ髪を触っても、ポニーテールはどこにもない。

何も映さないTV画面を見れば、俺の姿が映っていた。今までの“ケイ”の姿はどこにもない。当然だ、彼女は実在する者ではないのだから。

戻ってきたこの身体、この俺は、間違いなく創也である。

さて、『ゲームは1日1時間』という言葉がこの世にある。

主に子どもたちに対して戒めるメッセージとして用いられるが、このゲーム、『ヴァー

チャルファンタジー』では似て異なる言葉が存在する。

『ゲーム内は1日1時間』

理解が早い人間なら、もう説明は要らないだろう。これはゲームと現実間の時間の流れを示している。

俺がゲーム内で過ごして来た時間は、数日と少しぐらいだろうか。しかし現実では、数時間ちよつとしか経っていない。

そのせいで時間の感覚が狂う事もある。現実で少しの間を過ごしても、向こうではかなりの時間が経っている事だってある。

だが、VRゲームではそれが常識。ゲーム内時間イコールリアル時間、というゲームもあるにはあるが、基本的には時間は同期していないのが普通だ。

さて、部屋でぼーっとしているのもなんだ。夕飯時だからログアウトしたんだ、食事が出来ているか母にでも聞きに行こう。

居間にきてみれば、母がココアを飲みながらくつろいでいた。既に先に食事は済ませていたようで、俺の分は向かい側に用意されていた。

「あら、創也。お早う」

お早うと言われ、慌てて窓の方をみる。外は暗い。次いで携帯の時計を見るが、晩飯

時だ。明らかにお早うという時間ではなかった

何かの間違いで、朝までゲームをしていたのかと勘違いしてしまった。俺は目の前の母を、恨む様な目で見つめる。

「変かしら？ あの被り物を被っている間、本当に静かだったのよ。まるで寝てるみたいだったから、お早うが良いのかしら、って」

それにしたってお早うは……って待て、俺があの世界にいる間、母は俺の部屋に入ってきたのだろうか。絶対に入るなどは言っていないが、勝手に侵入しないでほしい。

「あら、不満そうな表情だけれど、部屋に入ったのは掃除する為だったのよ？ 少しぐらい良いじゃない」

絶対に嘘だ。俺個人、ごちゃごちゃしたものを嫌っている為、部屋は綺麗に保たれているのだ。掃除する余地など無いはずだ。

「う、ふ、ふ」

……なるほど、今理解した。この母絶対わざとだ。

今思えば、俺の黒歴史ノートが発見されたのは、キャラクタークリエイトから戻って来たときである。そのことを考慮すると、その時点で母は俺の部屋に侵入していたと言うこととなる。

自らの失態に頭を抱え、今後ゲーム中の部屋のセキュリティについてどうしようかと

考え込む。

「……ねえ」

何だろうか、急に改まって。今俺は母に対する侵入対策を考えているところだ。

「あの本って、大事な物なのよね？」

う……、その話は俺の急所、或いは弱点に当たる。出来ればこの話はよして欲しい。

さあ、どうやって俺のこの思いを伝えようか、なんて思っている、母が発した言葉が俺の意識に割り込んで来た。

「それにあの字、創也が高校生ぐらいの頃の文字だったわよ」

ああ、そうだ。あの本は過去の俺が書いたのだ。少なくとも今の俺は、同じ様な失態などしない。

少なくとも、今の俺は……。

「……ねえ、思い出したりしないかしら？」

何を、とは今更な事を問う必要な無かった。

俺は口を噤んだまま、首を横に振った。

現実での食事休息を終え、俺は再びゲームへと戻ることにした。

自室へ戻ろうと、その扉を開いたところで、後ろから声をかけられた。

「ねえ、創也」

なんだ、とでも言う様に後ろを振り返る。

また黒歴史ノートの話でもされたら、俺は黙って部屋に入るところだったのだが。

「私も、VRの世界そつちに行つて良いかしら？」

「……」

「私、創也の声を久しぶりに聞きたいのよ」

その言葉を受け、俺は目を見開いて母を見つめた。

しかしその言葉を理解すると、俺は目を和ませて、しかし口は苦笑する様な形にして頷いた。

母がこちらに来るのは良いのだが、残念な事に、向こうに居るのは俺ではなく、「ケイ」なのだ。

ウチのキヤラクター、退く。

『冒険者ギルド』

『主要な5つの国で、共通して設立されているのが冒険者ギルドである。

危険地からの材料調達、安全確保等、今や各地で冒険者による活動が前提として経済が回っている。昔の冒険者は酒場や広場の掲示板で依頼を受けていたが、ギルドの設立を境に、『依頼処』という設備を利用して依頼が受けられるようになった。

主なギルドの目的は、依頼主の求める条件に合わせ冒険者を推薦する事、または冒険者に適切な依頼を与える事で成長を促すというものもある。現在では危険度レベル、必要スキルを定め明記し、冒険者の判断に委ねている。依頼主の判断以前にギルドが受託を却下することはないが、依頼主側が条件を伝えていれば、それに冒険者の受付時に応じることが出来る。

また、必ず依頼処を通して冒険者に依頼しなければならぬというルールは存在しない。あくまでも、通された依頼難易度の評価と推薦を行い、冒険者の活動環境を整えるのが目的である。故に、依頼処を通されていない依頼は管轄外として、責任は依頼主か受託した者にあるとしている。』

今日の依頼内容は、西方の川沿いに確認されたという「見慣れないモンスター」の調査だ。

何やらこの付近で、データに存在しないモンスターの痕跡が報告されているらしいが、そのどれもが曖昧な情報であった。姿を見た、あるいは奇妙な足跡が在る等と。

そこで依頼処を運営する冒険者ギルドから、そのモンスターを発見せよとの依頼が寄せられた。敵対するのであれば討伐し、しかし出来る限りの特徴を拾い出してほしいと指示を受けている。

痕跡の形状から、ドラゴンに由来するモンスターの可能性があるとされているが……、しかしデータ上には一切存在しない痕跡なので、定かではない。

「ココらへんかなあ」

地図を見ながら歩いて結構経ったが、やっとそれらしい所に到着した。ここはどうや

ら渓谷になっていっているようで、底では一直線に川が流れている。

「……上から見た感じでは、なんもないな」

渓谷の深さも結構なものだ、大自然の凄さというものを感ずる。試しに降りて、流れる水の方を調べてようかな。

「よ」

……と、軽い気持ちで飛び降りる。スカートが翻るが、下はショートパンツだから気にしない。ちよつとだけ恥ずかしいが、そんな事よりも着地の準備をしなければ。

『エアクツション』

空中で短く詠唱。すると落下速度は徐々に緩やかになり、このまま足を地に付けても骨が潰れない程度の速度を維持する。

風魔法は詠唱者の機動性を高める魔法が多いから、こういった探索で非常に便利だ。翼を持つ事ができるドラゴナーなら、この機動性をもつと活かせる事が出来たかもしれない。

ああ、なんなら翼を生やす魔法でも考えてみようか？

などと考えていると、柔らかく着地。新しい魔法については後々によく検討するとして、今は調査である。

渓谷は大きく、そして深い。川の方は細くなっている。端の方を歩けば足を濡らさ

ずに済むぐらいだ。

「えーつと。……あれはヤギか。あの禍々しい角は間違い無くモンスターだな」

これは元々ここに生息してるから違う。依頼主から受け取った、この周辺に生息するモンスターの姿絵一覧を流し読みする。

それにコイツはどう見ても小さい。俺が探している目標は、少なくとも人の体よりも二回り以上は大きい筈だ。

「ふーん、垂直に近い崖を登る能力があると。蜘蛛にでも噛まれた？」

「メエ」

能力も性格も、この情報通りか。近づいても離れさせたくない。のそのそと足元の草を齧っているぐらいで、それ以外は何もする気配がない。

「ヒーローの素養は無さそうだね、このアホらしい顔は」

さて、半分動物みたいなモンスターと交流するのはこれぐらいにしよう。あのモンスターの肉には興味があるが、この辺りで野営する予定は無いから要らない。

川沿いに辿って、足元や壁面に注意しつつ歩き続ける。

「見つけた」

敵の姿はまだ見えない。しかし痕跡と思わしき物が見つかった。地面を爪で抉った様な跡だ。

またポーチから冊子を取り出して、以前の発見者によって書き写された痕跡の模様と見比べる。

深さ、太さ、形状。どれも同じだろう。俺の目にはこの痕跡が真新しい物かは判断できないが……少なくとも、古い物ではないだろう。

こういう物が、モンスターの縄張りの印として残されているという可能性がある。

「魔力も残ってる。これを迎れば……」

この魔力の色を覚えて、視界に意識を籠める。……よし、魔力が見えればこつちのものだ。やや遠いが、この崖の底に沿って進めば……。

「獲物発見。流石私」

「……」

目標の姿を発見した。痕跡から見て取れた爪の形状は、遠目からだが恐らくアレと一

致している。それを見ずとも、魔力の色からして無関係ではないのは確実なのだ。

さて、どうしたとか。

まさか本当にドラゴンだったなんて。

銀色の鱗に、金色の眼。紫に染まった翼の膜は、毒々しい紫と言うよりは、美しく華やかな紫という風に見えた。

今は休憩中なのだろうか、体を丸めて地面に横たわっている様子は、その場で眠りかけている様に見える。

「ほー、すごいな」

さてどうしようか。依頼の目的は、対象の討伐、或いは偵察・確認となってる。

私に敵うかは分からないが、ここから絵を描くぐらいは出来るだろう。

記録用の紙もあるし、絵を……絵を……。

「……」

やっぱ文章で良いか。ここから見える特徴をすべて書き出せば十分だろ。このシミにしか見えない様な俺の絵じゃ、写したとは到底言えない。

それで、ここまで書いたら……十分だな。後はコミュニケーションでも取ってみようか。それでダメなら交戦だな。まあ撤退戦とも言うが、あの翼で上空から追われたらに、逃げられそうにない。

依頼としては、この記録を持って帰れば達成できた様なもんだし。

……いつそのまま帰ろうか。

「ふうむ……」

と、思い悩んでいると、ふと俺が見つめられている事に気付く。あのドラゴンの顔がまつすぐ俺の方を見つめている。

流石ドラゴン、視力も良いんだろう。

「おはよう」

とりあえず手を振って、物陰から出る。逃げれば相手の捕食本能を刺激するかも知れん。しばらく相手の様子を見るが、立ち上がる様子も無さそうだ。とりあえず好戦的では無いと判断しても良いな。

「寝ている所ゴメンね、今は途中で、最近現れた見慣れない姿」っていうのを探しているんだけど……」

「……ギア」

おお、鳴いた。今のは俺の言葉への応答だと思っても良いんだろうか。人の言葉を理解してくれるのは有り難い。

ならばインタビューを……と行きたい所だが、こつちが理解できないんじゃないマルバツクイズになる。諦めて帰還と言うことにしよう。

「邪魔したね。私は帰るよ」

……とまあ、そんな平和的解決で終われば良かったんだが。

「うえ、やっぱり敵対するの?」

「……」

戻ろうと踵を返せば、ドラゴンが飛び上がり、俺の進路上に立ち塞がった。しかもあの真つ直ぐな瞳からは、凜々しい意思を感じ取れた。決して退くつもりは無いと。

「仕方ない」

「ギアアアアア!」

まるで決闘でも望んでいるようだ。態々立ちふさがりながらも、私が戦闘態勢に入るとのを待っていたらしい。

私が魔力を纏め上げると、敵は再び空へと舞い上がった。

『ボルトフィールド』、『アイスミサイル・スウォーム』

指定箇所を帯電させ、その中を通して誘導する氷魔法を放つ。『ボルトフィールド』内では敵を麻痺させるが、氷属性魔法であれば雷属性を纏い弾速も増す。

放った魔法は飛び上がる敵を追うが、敵はそれ以上に素早く飛ぶ。

剣の届く間合いは取れそうにないな。魔法主体で戦うしか無い。

「『ガアッ！』」

おお。確かにドラゴンといえは口からブレスだ。でもこれは火の玉と言った方が良い。距離があれば十分避けられるが。

詠唱短縮のスキルを習得していた俺には、敵のブレスを避けながらの攻撃は問題なかった。だが、敵の飛翔能力は俺の追尾魔法を振り切る事が出来るし、無誘導で放ったとして、十分な弾速が無いと、未来位置を読んで放つても避けられる。

「『ライトニングレーザー』」

ブレス攻撃が来ないタイミングを見定めて、右手を差し向ける。その手から紫色に光るレーザービームが伸び、敵を直接攻撃する。これなら弾速が無いから、避けられる心配はない。

ただ、火力が低い上に魔力もやたら食うから、長続きしない。

敵も回避しようと、上下左右へと軌道を繰り返すが、私は調整して照射を続ける。……少しだけ機動がぎこちなくなつた。麻痺効果はあるらしい。

レーザーを止め、魔力ポジションを一本飲み干す。さわやかな味わいを堪能する魔もなく、すぐ別の魔法を繰り出す。

「『ポルトミサイル』」

「グアー！」

やはりレーザーだと麻痺効果も弱いか。すぐに体の調子を取り戻したドラゴンが、こちらに真つすぐ飛んでくる。

突撃攻撃が来るか！ と大きく横へ動きだすが……敵の足が地面に届く直前で、あの翼が大きく羽ばたいて、急停止する。

「わー！」

それだけで放たれた風圧で、足腰を据えていなかった私が吹き飛ばされる。

「ギィー！」

まずい、隙を付かれる。回る視界で姿は見えないが、攻撃しようとしているのは分かる！

防御！ 質量で押し込まれる！ じゃあ回避だ！

「っ『エアーハンマー』！」

自ら体を吹き飛ばした。多分、敵の攻撃を避けた筈だ！

地面の向きを掴めないまま落ちて、すぐに顔を上げて立ち上がる。

敵は俺をじつと見つめている。強者の余裕という奴だろうか。確かに不利は不利だが。

「……勧められたからって、高難度の依頼を受けるべきじゃなかったな」

「……」

一応、近接戦闘に備えて剣を構える。この腕力で相手の攻撃を受けられるとは思えないが……。

だが、問題ではない。

「来い、ドラゴン。今度は私が相手だ」

かつて私は騎士だった。誰かを守る事を誇りとしたのだ。

その身一つ守れないのであれば、私に価値は無かったのだ。

意図せず挑発となった私の決意の言葉に応え、ドラゴンは大きく息を吸い始める。ブレスの予兆だ。先ほどまでの火の玉とは違う

『風に乗って』

「……！」

放たれたブレスは大きいが、加速した私を覆い隠すには遅いし、足りない。

その加速のまま飛び掛かり、ブレスの無防備な顔を目掛け……。

「ハアッ！」

パキン。

「……………え？」

何が……起きた？ 右腕がやけに軽い。見下ろすと、根元から振じ切れた剣があった。本来の三分の一にまで短くなっている。

「……………いつの間にか折れてる」

これは……、 “ また ” と考えて良いんだろう。

恐らく俺は、この剣でドラゴンを切りつけた。しかしこの有様だという事は、あの鱗は貫けない様だ。

「剣による攻撃手段は無くなった、かな」

魔法はどうだろう。現時点の最高火力なら傷付けられるかもしれないが、流石に立ち止まっただの詠唱が必要になる。

剣が折れて、ブレスの隙も無くなった所で距離を取ったが……どうしようか。そう思ってお互いの様子を見合っていると、「ギア」と敵が一鳴きして此方を睨んできた。

いや、睨むという眼差しではないな。

これは……。

「グア」

「いや、わかんないって」

戦闘の最中に会話というのも変だろうに。だというのに、敵は何もせずこちらを見

る。相手の敵意が失せていくのが分かって、自分も剣を収める。……歪んでいて鞘に入らない。

「はあ、捨てるか……。で、どういうつもり？　戦う気はもうないの？　頷くぐらいはできるとしよ」

……本当に頷かれた。

「本当に……。？　なんのつもりかは知らないけど、今戦わないなら、今日は帰りたいんだけど」

一対一だと詠唱時間の確保も難しいから、魔法での討伐は現実的じゃない。細かい魔法を連発しても魔力が持たないし。勝つビジョンが見当たらない。

だから帰る。相手も敵意が無い様だし。

「グエ」

「うーん……。本当、意味わかんない。もしかして腕試しでもされてた？」

すると頷かれた。合ってたらしい。……言葉を交わせれば多少は理解できるんだろうが、腕試しの意図や理由が全く分からない。

「うう、意味わからん。とりあえず私は帰るよ。ドラゴンさん」

帰り道は背中に受ける目線は、谷を出るまで続いていたものの、その間モンスターに襲われる事は全くなかった……。

「という事があつたんだよね」

「そうなんですか」

都に戻ってきて、レイナに近況報告という感じで今までの事を話した。特に彼女に知ってもらふ必要は無いけれど、世間話のようなものだ。もちろん、一時的な記憶の欠落と、その間にあつたと思われる出来事については隠している。というかそもそも覚えてない。

「あの、二つぐらい言いたいことがあるんですけど」

「なに？」

「ケつちゃん、このゲーム初めてから大体一、二週間ですよね？」

「うん、ここの時間で一、二週間」

「なにドラゴンと渡り合ってるんですか」

だつて向こうからけしかけて来たんだし。私悪くない。

「手加減してくれたんでしょ。多分」

「普通こういうのは、スライムからゴブリン、それから色んなモンスターとの戦闘を経験して、その果てにドラゴンですよね」

「まあ」

「……分かってませんね。もう良いです、ケつちゃんは何時になつてもケつちゃんなんですから」

確かに呆れられる様な物かもしれないけど、レイナちゃんなら分かってくれる筈……だと思っていたんだが。

「二つ目に、ドラゴンに遭うのが分かっている依頼をどうして選んだんですか？ 流石に無謀だと思いますよ」

「ああ、それは受付さんに勧められてね」

連日依頼をこなしてたら、いつの間にか受付さんに顔を覚えられていたのだ。それもあつて、最近は都合がよさそうな依頼を見つけてくれる。

「え?! それは絶対に何かの間違いです!」
なるほど。

まあこれに関しては賛成だ。どう考えてもこの依頼が俺に見合っていたとは思えない。幸い生き残ることはできたんだが、運が無ければ俺は今頃、現場に幾らかのアイテム

ムと現金を置きざりにして、ついでにステータスにもペナルティが与えられていた。

「分かってないみたいですけど、受付さんが依頼を勧める時にもちやんと責任が発生してて、もし間違った判断をすれば大きな処罰が与えられるんですよ?!」

「詳しいね」

「実際に見たんです!」

という事は、何も考えずに勧めたという訳じやなくて、依頼を別の何かと取り違えたとか、人違いとか、そういう理由があつたのだろう。

責任問題を気にして、いくら慎重になつたとしても、ケアレスミスというものは起きるものだ。

「とにかく依頼処に行きますよ! こういうのはハッキリしないと!」

「えー」

・ ・ ・

「………そういえば、あれで何回目だったっけ? 多分5は越してる、筈」

「どうしました？」

「ううん、いや、なんでもない」

ああそうだ、それと剣を買わないと。また彼女の工房にでもお邪魔するか。

受付さんの必死な土下座の後に渡された報酬で、意外な額が懐に収まっている事だし。

ウチのキャラクター、催眠不可。

『才能』

『プレイヤーキャラクターは、ある程度活動していると「才能」を取得することがあります。これはプレイヤー自身の持つ技術や能力が適応され、人によって千差万別と言えます。逆にこの才能が無くなったり、後々に新しく取得されることは無いでしょう。』

才能に応じたスキルを生かせば、常人よりも良い結果が得られ、より上達も早くなります。これはステータス、スキルに関して適応され、特定の魔法や武器スキルには適応されません。』

上位互換として「天才」が存在しますが、これを取得する事は稀です』

・ ・ ・

この世界で活動を続けていると、現実での時間も大分遅くなってきた。それぐらい

やっていれば、この世界にも大分慣れてくるというもの。

スキルだって初期の頃と比べれば大分揃ってきているし、以前レイちゃんから聞いていた才能という項目も幾らか出てきた。

『料理の才能』と『器用の才能』と『俊敏の才能』と『魔力の天才』と……。俺が得たのはこの四つだ。

聞くところによれば、『○○の天才』というのは才能の上位互換であるとのこと、それは大変珍しいとされる。

おかげでドラゴンとも渡り合えた。

しかし、取得の経緯に関しては、一部不明な点がある。

才能というのは、現実の技能や能力が反映された一種の形だ。現実世界に魔力等という物は存在するはずは無く、西暦が数えられてから今まで、科学により魔法と言った物が否定されてからは、完全に創作上、空想上の物となっている。

それを俺が、現実で持ち合わせて居るだど？ オカルト方面の知識が無い俺は、真っ先に特別な仕様か不具合を疑った。魔法習得の謎のこともある。

色々悩んだのだが、結論は出ない。

魔力の才能というものに代替する何かを参照した可能性だってあるのだ。

「おはよつぱいしますー」

「おはよう、レイナ」

さて、この世界では朝。俺たちはベッドから起き上がったばかりであり、眠気混じりの瞳を擦りながら食堂の方へ降りてくる。途中でレイナとも挨拶を交わす。

「むー……」

「うん？ ……あ、そっか。改めておはよう、レイちゃん」

「はいっ、ケつちゃん！」

相変わらず可愛らしい魔法使いである。……と思っていたら、背後からの目線がやけに鋭く感じる。

「トーマもおはよう」

「あ、トーマさん、おはようございます！」

「え、お、おはよう」

レイナが関わりと、トーマくんはやけに感情豊かになるな。レイナと顔を合わせると頬を染めて目をそらし、声をかけられると嬉しそうに振り返る。こう述べてと、トーマは猫っぽいかもしれない。

「それで、今日の朝食当番は……話題の『おふくろさん』だね。なんか皆、待ち遠しそうにしてるけど」

「すつごく料理が得意なんですよ。というか、この世界では滅多にお目にかかれない和食を、まるで当然の様に作り上げてしまっんですよ」

「へえ、すごいね」

淡白な感嘆であるが、本当にすごいのだ。日本の料理、つまり和食というのは、山と海があつてこそその物だ。山はともかく、海に隣接していないこのミッド王国では、海産物を確保するには高く付く。

「……すごい量が少ないとかじゃないんだよね？」

「まさか、そんな事は無い！ ちゃんとした量だし、何ならおかわり自由だー」

他の机の方から大声で言われた。トーマだ。

「うん。大音量での回答ありがとう」

「あ、ごめ……ごめん」

「あはは……、大丈夫ですよ」

「大丈夫だよ。なんかこの部屋、いつもより人少ないし」

トーマくんは、おふくろさんがお気に入りなのだろうか。てつきりレイナレイナつて、その思いを拗らせているのかと。

まあそういう事なら良いんだ、量が少ない訳じゃなければ。そうすると、俺たちの出す食費の他に、あのおふくろさんが自腹で食材を確保しているか……、或いは独自の入

手ルートがあるのだろうか。

「やっぱりすごいな、慕われてるみたいだし。……トーマくんに限らず」

先程から聞こえてくる厨房の方から聞こえてくる声に、試しに耳を傾けてみる。

「おふくろさん！ 何か手伝えることは無い？」

「今日は何を作るの？ 魚なら私に任せてよ！」

「新しい包丁作ってみたの、おふくろさん！」

「おふくろ！」

「おふくろさん！」

「厨房が狭いわっ！」

「……トーマくんはまだマシな方か」

「？」

「なんでもないよ」

その後、食卓に並べられた料理は確かに日本の伝統的な『和食』その物だった。味噌汁、漬物、米、魚、味付け。そのすべてが懐かしさを覚えさせる出来で……勿論、美味しく頂いた。

これは確かに、皆のテンションが狂いに狂うのも不思議ではないな。

どうしてか『魔力の天才』という物がくつついて来て以降、確かにその数値の上昇は著しくなった。他の能力値より一回り二周りは抜きん出ている。

一番最初に受けた依頼で、元々結構な報酬だったものにさらなるボーナスが付け加えられたお陰で、結構な蓄えと備えが得られた。お陰で魔法書や装備も沢山確保できた。

「そこのお嬢さん！　ここの装備を見ていかないかい？」

「間に合っております」

そそくさそそくさ。

しかし今でも、ぼちぼちと依頼を受けては完了させている。依頼処の職員からも信用されている気がするぐらいだ。仕事柄多くの顔を見るだろうに、信頼できる顔をよく覚えていられるものだ。

依頼を受け、こなしている中で唯一心配だったのが、スキルや能力値の数字とは無関係に鋭くなる身のこなしである。

「お姉さん！ 一目見て分かった、相性がとても良さそうだ！ どうだ、私とのティータイムは如何かな？」

「残念だけど私キノコ党なんだ」

「なんだとタケノコの方が良いだろう！ どうやらお前とは相性が悪い様だ。……うん？」

鋭い身のこなしで、立ちふさがる男をすりすり回避していく。

今や順調に剣聖の道を辿っているし、その経過で盾も邪魔になつて滅多に使わなくなつた。盾で受けるより剣で払つたほうが効率が良い。遠距離攻撃なんかは地形を利用すれば良いし、だいたい隠れずとも避けれる。

思い出して見ると、我ながら中々人外であるなあ、としみじみ。遠い目で依頼処の中に入つてみると、中は人が多いようで、ザワザワしている。

「あー」

……金曜の夜に見られる居酒屋を、もうちよつと大規模にしたような有様だ。騒がしい。

パーティーと見られる集団の笑い合う声が聞こえる、給士に絡む酔っぱらいが見える、男共が怒号を上げながら腕相撲で競っている。

「……中世ファンタジーな酒場、つて感じだ」

「そういえばレイちゃんが言及していたか。カフェ兼居酒屋兼交流所って感じだと、確かそう言っていた。」

「思い出せば、昼は穏やかなカフェという風だった。冒険者達がわいのわいのと情報交換したり、依頼について話し合ったり、少なくともココにはない『品性』というものがあつた。」

でも、そういった品性が失われ、酒場同然の様子に変わるのは大抵夜の筈だ。

「試しに、空いていた受付カウンターの人に声をかけてみる。」

「おはよう、なにかあつた？」

「真夜中に遠征から帰ってきた複合パーティの集団ですよ」

「へー」

「本場の酒場でやってほしいのだが、そういう事なら仕方ない……のかもしれない。そもそも、早朝にやってる酒場なんて見たことが無いし。」

「それよりも、また依頼を受けに来たのですか？ 一日ぐらい休まれても良いと思うんですが……」

「今日は簡単なの見繕うよ。少なくともドラゴンを目にしなくても良いような奴」

「う………本当にすいません」

「良いよ。ギルドからこつてり絞られたらしいし、今更何か言う気も無いって」

「ありがとうございます……。その件で、私から依頼を推薦する事が出来なくなっているので、他の方からお聞きするか、あの掲示板からお選びください」

まあそうなるよな。クビになったりしないだけ温情か。

言われたとおりに、依頼の紙で一杯の掲示板の方に行く。

……いつ見ても板が見えないな。何時の日か、紙で満たされたこの板の下地が光を浴びることは有るのだろうか。

・
・
・

「……来たのデスね」

「……」

「その銀髪魔法剣士、そう、アンタなのデス。心配せずとも態々後ろを振り向いて確認しなくて良いデス」

「あ、私」

「そう、アンタデス」

どうも今日はよく絡まれる。魔法剣士という言葉が無ければ完全に無視していただろう。

「どうしたの？ 真つ黒なおチビちゃん」

身長はレイちゃんよりも小さい。ちんまりした体格は、小学生低学年と言える程度の物だった。

しかし姿勢好は頭の天辺から足首までを隠したローブ姿で、目線の高さもあつて目元はフードで全く見えない。

「アタシのことはキャットと呼ぶのデス。私にはアンタに頼みたいことがあるのデス」
「名指しでは」

俺に興味でもあるんだろうか。それなりに活躍しているつもりだが、注目を集めることはしてない筈。

「んー……あ、彼氏なら居ないよ」

「いえ、それを聞きに来たのではないのデス」
「だろうね。それで？」

「調子狂うのデス……。その高い場所にある紙を取って欲しいのデス」

ああなんだ、そんな事。

依頼の紙は、このキャットくんとやらが手を伸ばしても届かない所まで貼られてい

る。そうなるのも仕方ない。

指で指された『ダンジョン攻略の臨時パーティ募集』という物を手に取る。他の紙と比べて、少しばかり詳細や依頼人の情報が少ない様に見える

「そう、それデス。それをアタシに見せるのデス」

見せる？

内容をよく読みたいという事なのだろうか。剥がした紙を手に振り返ると、何故かキャットはフードを外していた。そうすると、すぐに目が合った。

「アナタは、この依頼をどう思うのデスか？」

——「アナタはこの依頼を受けたくなる」

「うん？ ……まあ、パーティを組む程度は良いよ。変な人はお断りだけど」

「受けるのデスか？」

——「アナタにはこの依頼を受ける理由がある」

「……?」 えっと、さっきも言ったけど、メンバーによる。あとは報酬と難易度次第かな。誰かが危険な目に晒されているなら、それ度外視で検討しても良いけど」

ケイさんは優しいですからね。と鼻を鳴らしてみるが、どうもキャットくんは納得行かない様子だ。

「むう……。あ、この部分が読めないので教えて欲しいのデス」

——「アナタはこの依頼を受けたくなる」

「これは……うわ、なにこれ。少なくとも常用漢字だとは思えないんだけど」

「そうデスか……」

ふと見ると、キャットの目線は床に向かっている。その猫耳はしゅんと伏せられており、まるでそれが感情を示している様に見えた。

妙な違和感を纏って聞こえてきたあのエコーの様な声は、彼女から発されたのだろうか。しかも彼女の目から妙な魔力を感じる。

少しだけ考えて、試しに、あの声の言葉通りのことを言ってみる。

「……うん。この依頼、私が受けても良いかな。なんか受けたくなってきた。なんなら理由もあるし」

「そうデスか?! やった、効いたのです!」

は?

「は?」

「では! この地図の通りの位置にある小屋へ来るのデス! 今からダンジョン探索用の装備で出発するのデスよ!」

「あ、うん」

なにを言ってるんだこの子は……本気でそういうつもりだったのか? そういうつ

もりって言うか……。

「ふんふん！ アタシにも催眠の才能はあつたのです！ 落ちこぼれじゃなかったのデスー！」

そう、催眠。ついに口に出しちゃっているが、この子。

喜びの感情を交えて、加えて妙なことを言い残して走り去っていった。その足取りさえ楽しそうに見えた。

「……行っちゃった」

一体なんだったんだろう。

あのキヤットと名乗る彼女は猫耳キャラの様だが、この世界には種族としての獣人などは存在しない筈だ。

……本気の催眠とかじゃなくて、子供のごっこ遊びにでも巻き込まれたか？ 猫耳を着用した女の子とは中々ファンシーなもんだ。

『「精神攻撃抵抗」を習得しました』

「……」

いや、まあ。分かっていたさ。

色々と疑問の残る出来事だったが、独断で行動するには不安だから、レイナに判断を仰ぎに戻ってきた。

「またケつちゃんが変な依頼を受けてきました……。経緯からして信用ならないじゃないですか」

「いや今回は私悪くないよ」

子供の遊びかと思えば、ホントのホントに精神攻撃。効かなかったとは言え、言われたとおりに従ってみるのはちよつと怖い。行かなかつたとしても、それはそれで怖い。今度は精神ではなく肉体を攻撃しに来るかもしれない。

こう、恐怖と暴力で従える的な。

「二人いれば何とかなるかなあ、なんて思ったんだけど……」

「うーん……現実世界じゃそろそろ眠る時間なので、これ以上はちよつとお母さんがいい顔をしてくれないかと……」

「仕方ないよねえ。……うん、腹を括るよ。何の根拠も無い勘だけど、多分向こうは大した悪者じゃなさそうだし」

「それ油断って言いませんか？」

馬鹿な。百戦錬磨の私が油断するなどあり得ぬ。……というのは冗談で。まあ万が一があっても、俺の所有物の幾らかが殺人現場に残されるくらいだろう。

お金があれば、祝福という物を利用してドロップを防げるらしいし。そう考えるとこの世界のデスペナルティは割と軽い。後は一定期間の能力値低下もある。死ぬ気は無
いから、利用する気も無いが。

「ま、それなら幾らかポーションを買わせてよ」

「良いですよ。最近新しいレシピを発見したんですけど、どうですか。体力回復と異常状態の回復を同時に出来るんです」

「それなら幾らか。それと今日は場所が場所だから、魔力ポーションはそんなに要らないかも」

「はい。あ、お使いってわけじゃないですけど、片手間にでも良いので、薄く光るあの果実を取ってきて貰えませんか？ あれを使ったジュースが最近流行ってるらしくて。今度の朝食当番にでも出そうかな、って」

レイナとは少しばかりの別れとなるだろうが、この世界で一人でもやっていけるぐらいの力は身につけた。仲間抜きでの旅も、一種の冒険だと思えば面白そうだ。

少々恐ろしいが、キャットに貰った地図の場所に向ってみよう。

ウチのキャラクター、再び突入。

『ティマー』

『貴方はあらゆる僕を従える者である。獣やモンスターと言葉を交わし、誓いを結ぶ事で新たな戦力として迎え入れる。多くの僕を得る事で、より強い脅威にも立ち向かうことが出来るだろう。』

貴方に必要なのは、より強く結ばれた絆か、大群を成す多くの僕か。しかし、そのどちらを得るかは、きっと重要ではない。最も恐ろしいのは、どちらも失った末の孤独なのだから』

．．．
地図によると、指定された小屋の位置は常闇の森の内部である。

あんな魔境の中によく小屋を建てられた物だと思ったのだが、もしかしたら建てられ

た後に森の拡大に呑まれたのかもしれない。

そんな場所にまで足を運ばないといけないなんて、とは思うけれども、異常成長を経た俺にとっては何てことのない道のりだ。

「新しい剣の調子も……十分つて所か」

一度へし折つてから買い替えた剣は、形状や重心が近いものを選んだ。細かい違いも気にならない。気になるほど技術は成熟してない、と思う。ただ、もう一度ドラゴンを斬ろうと思つたら、前回と同じような斬り方をしない方が良いだろう。今度は鱗を抉るように、或いは翼の膜を切り開いて飛行能力を奪うか。

「……また会わなければ良い話なんだけど」

そんな事出来る気がしないし。

で、常闇の森だが、やはり目印になるものが少ない。しかし、俺という来訪者の為に用意されたのか、人為的に配置されたと思えないランタンが随所に配置されており、行く先を指示するこの地図の印と重ねてみれば、その位置は確かに一致していた。

「次はここを北」

地図によれば、この目印を最後に到着するはずだ。距離はそう遠くない。

森の様子は相変わらずで、手元の照明に照らされた景色しか見えない。光の届かない

先は正しく暗闇のみ。

「長い常闇の道を抜けると……、そこは不思議な家でした」

薄らとランタンの光に当てられ、建物の輪郭が現れてくる。

成長した木々に纏わりつかれ、最早一体化したと言っても良い有様だ。辛うじて一部の窓や扉は使えるようだが。

「魔法剣士の少女は驚きました。どうしてこんな所にあるのだろう、と」

まるで語り部の様に紡がれる言葉は、中世的な声で男か女かが判断が付かない。俺はランタンをかざして、聞こえた方向に光を向けた。

そうして見えたのは、場違いともとれるフォーマルな恰好をした人間。その顔の仮面が異質に見えた。

「……何その仮面。まあいいか、とにかく初めまして」

「うむ。私の名はイツミ・カド。王国に名を轟かせている怪盗だ」

初耳だな。本当に轟かせているのか？

小屋から出迎えてくれたのは、如何にも怪盗という容貌の男。タキシードと言う奴だろうか。今にも暗闇に溶けてしまえそうな色合いで身を包んでいる。

何よりあの仮面。表情一つ分からなくなる形で顔を包んでいて、仮面自体は満面の笑みを浮かべた不気味な柄だ。

「あの猫耳のちっちゃいのは」

「今は不在だ。一家総出で出迎えた方が良かったか？ ククク……」

という事は、普段一緒にいると思つて良さそうだ。

「別に良いんだけど……とつても胡散臭い男だね。かなり胡散臭い。臭い」

「……どうやら、お嬢さんも愉快な言い回しをしてくれるじゃないか」

森の匂いの中でもハッキリ分かるぐらい臭い。今からにでも帰りたくなってくる。

「匂いは兎も角、信用ならないな。出だしからしてもそうだけだ」

「何か粗相でも？」

「キヤットがお戯れレベルの催眠術を掛けようとしたから」

本物なのか疑えるほど出来の悪い術だったが、警戒に値するものではあつた。

「ほう……やはりキヤットの術を見破つたのか。これはとても期待出来そうだ」

やはり、と言つたか。つまり私の催眠効果には期待していないと。しかし一方で、私の活躍には期待を寄せられている。あの仮面から好印象を受けてもあんまりいい気分じゃないのだが。

一体どういうつもりなのだろう。

「そんな態度だと、協力する気がどんどん削がれていくんだよね。帰つても良いかな？」

「ほう？ ……最近、この辺りでドラゴンが目撃される様だが」

「それは面倒だ。でも手土産にドラゴンの爪を持ち帰るのも良いな、良い素材になりそう」

「自信满满という訳か。お前なら一人で仕留められるらしい」
勿論出来ないですけど。

これでは、何時もの軽口は通じそうにない。相手が少しはマトモだと、ツツコミとボケが成立するんだが……これではまるで、遠回しな皮肉で一通りの会話をこなす海外映画の様ではないか。

「はあ……出来るわけないじゃん。私がドラゴンスレイヤーか何かに見える？ ただの魔法剣士だよ」

「この地に降りて二週間足らず。その剣をドラゴンに届かせられる少女が……ただの魔法剣士とね？」

うんざりした気分になる。こんな怪しい奴が、一方的に私を知っている。あまり言いふらしていない様な事まで。

「……どこで聞いた。いや、見た？」

「いいや、聞いた」のだよ。ケイ君」

……名乗った覚えはない。ドラゴンについて他言した覚えもない。あの依頼の報告をした時だって、一度ドラゴンに剣を叩きつけた等とは一言も言っていない。

「これはいよいよ、俺の事は筒抜けだと思つた方が良かったらうか。

「気持ち悪い……」

「それはどうも。ただ、やはり一人で帰るには危険すぎるだろう。何せ……」

「どうけしかけるのかは知らないけど、襲われるんでしょ。なるほど強引だ。来るんじゃないかった」

「勿論、協力してくれば愛しの我が家まで無事に戻れるだろう」

「……分かつたよ。つまりは脅しか」

「分かつていないな、れつきとした依頼だ」

「そつちはそのつもりでも……ああもう、仕方ない」

「こんな胡散臭い依頼も、滅多にみられないだろうな。ここまでするなら、普通に脅せばいいだろう。」

「入ると良い。こちらで用意した物が幾らかある」

「はいはい。……メンバーは私ら2人だけ？ 探索するダンジョンっていうのは何処？」

「正確には2人ではないな。私はこれでも、タイマーでね。キヤットは、所謂ペットと言
うものだ」

「うわ」

あんな小さい女の子をペットって。マジか。

別の意味で身の危険を感じた。ドラゴンに立ち向かって丸焦げになった方が良い気がしてきた。

「……言っておくが、キャットの本来の姿は猫又だ。私とて女の子をペットと呼ぶのは憚られる」

「今更弁解されても」

「むう……。とにかく、キャットがダンジョンに同行する」

あの小さい子が……。人外だと言うのなら、見た目相応の強さだとは思わない方が良いだらう。

「それと、行き先だが……。お前なら分かるだろう」

「はいはいそのダンジョンね。さすが物知り」

「そうだ。お前ならば、道が分かるだろう？」

「……分からないと言ったら？」

「安心しろ。魔力を感知できるのはお前だけでは無い。キャットも同じ技術を有している」

「ダンジョンと魔力の関係まで知ってるのね……」

事前に情報を大量に仕入れてくれたらしい。この怪しい男はギルド内部まで情報網

を張っているんだろう。俺の活動や能力は知られていると思っても良さそうだ。

「とにかく、これを装備すると良い。お前の魔力ならば装備できるだろう」

「……腕輪？」

「魔法に対する防御力を高める。ダンジョン内部は魔種モンスターが殆どだ。だろう？」

「予習してたんだ」

俺に関しては、意図しないことではあるが多少の経験だけはある。魔法を使わない奴は少ないのは知ってる。

「私のペット達は非常に優秀だね。ギルドの書類一枚ぐらいの情報ならば、すぐに分かる」

「はいはい分かった……、とりあえず入り口に行く。報酬はそこで見つけたアイテム。その中から選べると思っていいいかな」

「良いだろう」

それだけ知れば、少なくとも損は無い。こっちも冒険心はあるからな。

「到着」

魔力の流れを見つつ源流の方に向かえば、以前とは違うもののダンジョンの入り口がまた見つかった。先日俺とレイナが迷い込んだ入り口でも、脱出した出口でもない。3つ目の入り口だ。

入り口自体は見つかからないが、太い倒木がそこにあつた。

「悪いけど、ダンジョン内の構造は分からない。ここは別の入り口だから」
最寄りの入り口へと向かっていっただけなのだから、仕方ない。

後ろを付いていくイツミ・カドの方を見るが、表情を読み取れない。

「ふむ、それらしい物は見当たらないが、怪しいものだけがあるな」

「前回の経験からすれば、木の下にある筈」

時間が経つてもいいなら焼く選択肢があるが、敵をおびき寄せせる事になるだろう。知能のある奴らは、人の気配があれば寄ってくる。

そういえば前回は、大岩がゴーレムだった事に気付かず不意打ちを食らっていた。この倒木も、一応調べておこうかと魔力に集中するが……まあ、普通の倒木だった。

「どこかすか。『アースウォール』」

横たわる木の端を目掛けて魔法を発動。地面からせり上がる壁によって、木の端が持ち上げられていく。

倒木の下が見えるようになると、やはり穴が一つ空いているのが露わになる。

「よし、入るよ」

「ああ待て、用意がまだだ」

「うん？ ……もう一人がまだだったね」

「うむ」

しかし、キャットはどうやってここに来るのだろう。合流した小屋の中にも居なかったし。

「何時来る？」

「今だ。 ……『召喚』」

そうやって詠唱を言い放つと、目の前が突然光りだす。

「う……。眩しい、もう少し光を抑えられない？」

「悪いが、召喚魔法の特性上致し方ないのだ。 ……さて、準備は良いか？ キャット」

「キャット、只今参上！ 準備万端燃料満タン、何時でも行けるのです、ご主人！」

……なるほどな、それがタイマーの技術か。

必要な場所で、必要なタイミングで適正な戦力を呼び出せる。という感じだろうか。

「また会ったね、催眠ネコ」

「……ひゅえっ?!」

この前のローブ姿ではなく、動きやすい格好になっている。小柄な体格がよく見える、戦闘よりと言うよりは、盗賊の様な

「まあ、よろしくね」

「は、はい……デス。……ご主人、催眠が何時の間にか解けてるのです」

「心配するな、想定内だ」

「そうなのですか?」

「……何も言わないでおこう。」

・
・
・

このゲーム上で二度目となるダンジョン。その目的は前回とは変わって、脱出ではなく探索となる。

「確認だけど、あくまで攻略が目的じゃないんだね?」

「うむ。あらゆるダンジョンに共通することだが、その内部で得られるアイテムには特別な効果が付与されていることが多い」

「魔種、っていうヤツだね」

「私達の目的はそれだ」

つまりはお宝探しと言う事なのだろう。

怪盗……いや、盗賊らしい目的だ。遺跡に眠る財宝を我が物にしようと、踏み込んだのだ。

「そういえばキャットはどういう役割なの？ 斥候？ 催眠術や魔力感知が出来るし、

魔法使いかな？」

「大まかには、斥候と魔法使いのハイブリットなのデス」

「魔法剣士ならぬ、魔法斥候と」

「それでテイマーなキミは？」

「と言うと？」

「召喚してそれだけじゃないでしょ。少なくとも共闘する手段はあるんじゃない？」

ペットを召喚して、戦わせて、そして自分は高みの見物。なんてのは考え難い。

「そんな物は無い。習得しているのは生活系の技能ばかりだ。隠密に関わる技能は一通

り習得しているがな」

「ああ、つまり一般人か」

「フツ」

なぜか仮面裏の澄ました顔が容易に想像できる。仕方ないから、精々後ろで隠れていて貰おう。キヤットも戦えない訳じゃないが、あの子は火力に欠ける。索敵役としては期待するが。

「で、キヤットは敵の居場所がわかるの？」

「……いいえ、そもそも魔力の密度が多くて、遠くまで見えないのデス」

ふうん、この前の私に近いか。

「色は見えないの？」

「色デスか？」

「そう。人やモンスターが持つ魔力からは色が見える筈だけど。しかも魔力の色は流れてくるから、通路の奥に居る敵は割と遠くからでも分かるよ」

魔力が流れてくる環境下だからこそその索敵方法だ。

「……………」

「どした？」

前を歩いていたキヤットが、突然座り込む。

「ご主人。私は役立たずなのデス……」

「キヤット、大丈夫だ。気にするな」

彼らには失礼だがため息を一つ……。俺はこの二人の引率をしないと行けないのか？

「ふむ、『魔力感知』ではなく、『魔力特定』か……。一体どんな風にすれば、これほどの力を得られるのだろうか」

「コツなんて教えたくとも教えられないよ。青空が青いと分かるのと同じ様に、魔力の色が当然の様に見えるんだから」

「それは残念だ」

「まあ努力すれば何時かは見えるようになるよ」

「うむ。……お菓子、食べるか？」

「貰うのデス……」

前々から思ってるけど、この仮面、キヤットの事甘やかしてはいないだろうか。……向こうの勝手だが。

ダンジョン探索は順調だ。

感じ取れる魔力を頼って、どの敵も例外なく先制攻撃を見舞える。キャットの戦いも少し見させてもらったが、スピードで翻弄して、行動の隙を見て強烈な連続攻撃を加えるスタイルの様だ。

一撃の攻撃力が低いから、装甲のある敵には対応が難しいらしい。

「次は人狼か」

生憎と通路は一直線だ。敵の目線も俺の方に向かっていているから、奇襲を捨てて真正面から突撃する。

魔力の豊富なダンジョンに居るからか、外に居る奴よりも落ち着いた目をしている。

正面に向き直って、じっと構えて私の攻撃を待ち受けている。カウンターでも狙うつもりだろうか。

だけど、まあ。見当違いの方を防御しても、カウンターなんて難しいだろう。

「本命はどっち？ こっち？ あっち？ 残念、正解は『エアージェャベリン』」

左手で真つすぐ突き、敵の腹を貫く。剣の間合いを見越していた敵の反撃が空振る。恐ろしい爪が振り抜ききつたのを見て、剣で片足を切り裂く。余裕があったから序にも

う片足も。

あとは後ろに引いて、魔法で集中攻撃だ。

『ファイヤボルト』『ファイヤボルト』

せめて三か四体ぐらいは頭数を揃えないと、“私”は止められない。爪ぐらいしか武器の無い人狼には、それぐらいは必要だ。

「……何度見ても見事な手際だな、ケイ君。お前ならば最深部に辿り着けそうだ」

「ダンジョンの奥で待ち構えてる強敵に敵うかは知らないよ」

「どうせ皆死ぬのデス……」

多分そのセリフは敵に使ってあげる物じゃないと思う。

「にゃあ……あ、お宝デスよ、ご主人！」

「なんだと?! ケイ君、周囲の警戒を頼む! あの箱の調査に集中しなければ!」

「……勝手にどうぞ」

もうかえって愉快に見えてきた。

せめて豪華な報酬を期待して、ダンジョンの宝を根こそぎ回収出来ることを祈ろう。

ウチのキャラクター、庇う。

『第二章 第一節』

『私は旅に出た。女の身ではあったが、剣術の才能が見込まれており、前世の私が騎士だった歴史を辿る事は可能だった。……が、私はそうしなかった。

我慢できないのだ。私がこうして時間を巻き戻したのは、彼女に会うためだ。本来の歴史とは違う道に辿るが、そもそも私の性別が変わっている時点で、その心配は一切無かった。

とにかく、私はあの村へ向かう。彼女と出会った村だ。路銀は少ない上に、遠い道のりだが……きつと、再会して見せよう。

死別してから約40年、その日、私は世界を巻き戻した。そして2度目の誕生を迎えてから15年。それだけの年月を経たが、今でも彼女の顔が、忘れられない。』

出会う敵を薙ぎ倒し、奥へ奥へと進んでいく。

洞窟の様な凹凸ばかりの壁面は、ある所を境にレンガ状に舗装された壁へと変わった。

「如何にもなダンジョンになってきた、気を引き締める様に」

「どうせ戦うのは私だけだけど。でもこの様子だと、トラップも警戒しなきゃいけないかな」

「あ、それならワタシに任せるのデス！」

「そうだな。ケイ君の『魔力特定』では物理的な罠は見破れないだろう。キャットなら罠の知識がある。キャット、先導してやれ」

「任されたのです！」

喜びを隠さないまま、キャットが俺の前に出てくる。

環境が変わったが、魔力の感覚は変わらずだ。むしろ魔力の流れが強くなっているように感じる。源流に近づいている証拠だろうか。

「あ、見てくださいデス！ ……ジャーン、隠し扉デスよ！」

「おお、さっそく見つけたか！」

キャットがペタペタと壁を触ると、おもむろに引つ張りだす。すると壁が、まるで扉

の様に開かれた。

「……あの？ 隠し扉じゃなくてトラップを探すんじゃないやつたんじゃない？」

「トラップも隠し扉も似たような物なのデス！」

ああ、そう。

二人の後を追って、壁に偽装されていた扉の中に入る。

見る限り、保管庫の様な内装だ。

壁一面に並べられた棚には、幾つもの本が置かれている。これは魔法書か？ 魔法書以外にも理論書があるが……。『魔力固定化の可能性と、魔力固定化による肉体の再現性』。……これは、アイツらに成る方法だと思っても良いのか？ 俺はまだ幽霊になりたくないぞ。

「こういった書物の価値は、荷物の占有面積に対して高い。回収していくぞ」

「あ、この魔法書欲しい」

「良いだろう。そちらに渡しておく」

俺も割と美味しい。始めの所をパラパラと読んでみるが、今までのものと比べてかなり難しそうだ。手に取って表示されるステータス制限も、余裕で俺の3, 4倍は行つて

る。「この感じだと、剣とかの魔種武器は無いかな」

「うむ、魔法やそれに関連する物が多い様だ。お望みの物は得られそうかな？」
「残念ながら」

魔法書も中々美味しいが、やはり男の子としては最強の剣と言う物に惹かれるのだ。

「そっちの方は？」

「うむ……これ以上目ぼしい物は無い。次に行こう」

・
・
・

それにしても、このエリアからはなんとなしに生活感と言う物が感じられる。言い換えれば、人の気配があるとさえ言えば良いだろうか。

ダンジョンの奥に住まう人間なんて考え難いが……もし存在していたとして、友好的な存在だと助かるが。

「なんだ、コイツ」

そう思つて進み、出会ったのが見慣れない姿のモンスターだ。シルエツトだけ見れば人の姿だが、目や鼻といった器官が奇妙なことになっている。失敗した福笑いとても

言っておこうか。

「質素だが、普通の服を着ている分、薄気味悪いな……」

「敵対……はしないデスね。そもそも認識していない様デス」

歩調もゾンビの様にふらついている訳でもなく、至って普通の歩調だ。しかし通路沿いに歩くだけで、試しにと前に立ってみるが、立ち止まるだけだ。離れるとまた歩き始める。

「……無視しよう」

「無難だが、しかし警戒は解かない様に。行こう」

また進むと、今度は隠されていない扉を見つける。キャットに罠の確認をしつつ開けてもらい、侵入する。

この部屋は……研究室か？ レイナが使っていた様な調合器具や、その他の見慣れない道具が備えられている。棚には材料だと思われる物が置かれている。

「無人だ」

「この部屋も当分使われていないのデスね。あの棚なんて埃だらけなのデス」

「そうだな。漁って見るか」

「……宝探しと言うより、空き巣なんだよなあ」

間違いなく、ここには誰かが居る。モンスターではない、人間の様な存在が。それが

今もここに居る可能は十分ある。

「ねえ、ここって誰か居る……と思うんだけど。 さっきの保管庫は埃とか溜まっていなかったよね」

「安心しろ。先程の保管庫は完全に密閉されていた。対してここは……あそこに通気孔があるだろう？ 少しでも空気の流れがあれば、埃の発生源から埃が舞う。発生源と言うのが主に布や生き物の老廃物だな」

「よく知ってるね……」

「知恵は力だ。分野によつて必要な知恵も変わるがな。人体の急所も、身体の仕組みを知れば分かるものだ」

「ふうん」

「ケイ君も勉強してみると良い」

確かにこの世界は現実と物理法則が同じだし、同じ様に作用してくれるなら現実の技術を活かせるかもしれない。まあ、魔法っていうイレギュラーはあるが、それを発動しない限り法則は現実と同じ筈だ。

「勉強ね、考えておこう。……キャットの方はどうしたの？」

「この通気孔、多分他の部屋と繋がっているのデス」

「分かった、いざという時に備えて覚えておこう。男でも入れそうな大きさだしな。」

……そうだ、ケイ君。貴重な材料が幾らかあった、ご友人へのお土産にどうかかな？」
「有り難く貰っておく」

レイナの事を知っているのは今更か。部屋を出て、また通路を進んでいく。

「それにしても、無いね。罨」

「あるのデスよ」

「はい？」

「けれども稼働していないだけなのデス。恐らく老朽化か何か……特に珍しい話でも無いのデスよ」

「ああ、なるほど」

それほど古い施設なのか、ここは。確かにこんな地下深くだ。地層が積み重なる以前の時代からある遺物なのだろう。

「と、またまた奴の登場だ。相変わらず通路を漂っているな」

失敗した福笑いがまた居た。この調子だと、このエリアの探索で何度も会う事になりそうだ。

……そういえばコイツ、魔力の色が見えないな。生きていないのか？

「ねえ、コイツ心臓あるの？」

「興味深い疑問だな。拘束して脈と呼吸を確認してみるか」

あ、早速確認するのね。何処からともなくロープを取り出して行動を始める二人に任せて、自分は後ろで待っている。

「よし、力も弱い様だ。最低限の拘束でいいだろう。キヤット、どうだ？」

「んー……息も脈も無いのデス。魔力で動いてるのデスカね？」

「コイツからは魔力の色が見えない。ただ無色の魔力で動いてるのか……どうだろう。魔力の流れが強いから、コイツ自身に魔力があるのか分らない」

「ふむ。魔力も脈も無しに動いているとなると、機械人形という事になる。しかしこのエリアの特徴からして考え難いな。無色の魔力で動いていると仮定するのが良いだろう」

それもそうだろうな。……でも仮定で終わると、どうも気持ち悪い。試しに、こいつから魔力が感じられないか集中する。

……まあ、分からんか。川の下に埋もれた湧き水の口を探するような物だ。

仕方ない、諦めて……ううん？

「待って……色だ。モンスターか、人が居る」

「警戒だ」

「にや」

今までモンスターから見てきた魔力の色とは、どれも違う。別の種類か？
常闇の森に居るモンスターに加え、ゴブリンが居た。他に何が出るのか。

「来る」

近い。そう思った頃に、空間から敵の姿が現れた。

気配を感じ取った方向から現れた霧状の物が集まり、形を作った。……その姿は、恐らく人型だ。共にローブも身を包むように生成され、性別さえも曖昧に見える程度には身体を隠していた。

「これは……」

「ふむ、あの幽霊とは違う様だ。しかし本質は似ているのかもしれないな」

「ま、魔力の量が段違いなのデス……」

この環境でも分かるほどの、魔力の量。警戒に値する物だ。

俺たちに敵うだろうか、という疑問を抱き、思わず退路を意識した。

「地上の人間か」

喋った。奴が喋った。いや人なら喋るかもしれないが、人の形をしているモンスターだと決めつけていた俺は驚いた。

だがこれなら好都合かもしれない。意思疎通が出来る可能性があるのだ。

「……キミ達は地底人か何か？」

「そうか、この聖域も遂に知れ渡ったか……」

「なるほど、話を聞かないタイプか」

意思疎通は期待しないでおこう。

しかし聖域とは。邪神を信仰しているならば、このダンジョンを聖域と呼ぶかもしれないが……。

相手は動かない。しかし、何やら魔力を手繰って何かを作り出そうとしている。攻撃するつもりか？ 反撃できるように、俺の方でも魔法の用意をする。

「私達は死者だが、永遠の命を得た成功者でもある。しかしその成功も、『心臓』無しでは為せなかつた」

「心臓？」

見た目に反してお喋りな様だ。聞いてもいないのに妙なことを語り始めた。

「邪神の加護をその身に受け、奈落の如く深い眠りにつく男が居た。その加護は、聖なる魔力を世界に広げる力を持つ。その魔力を送る、血管とも言うべき役割を果たすが、この聖域なのだ」

……何気に重要そうな内容。言葉をそのまま受け止めれば、
「邪神の加護を受けた男が、この魔力の源流」だという事になる。

しかしこれの何が聖なる魔力かどうか。常闇の森の状況を見れば、その魔力が生態系を狂わせているとすぐに分かる。

「ほう、心臓と血管か。……実に興味深いな」

「地上の人間の欲望は、底知れない。やはりお前らも、心臓目当てに来たのだろうか」

「その通りだと言ったら？」

「おい？」

「お前らの血肉を神に捧げよう」

「仮面バカ、喧嘩を売るんじゃない」

「む、バカとはなんだ」

「バカはバカだろう。相手の行動に備え、剣を構える。」

「ま、魔力が大きくなっていくのデス！」

一瞬だけ敵が大きく見えたのは、急激に多くの魔力を吐き出されたが故の錯覚だろうか。その大量の魔力は、今まで感じたこと無い様な密度と質量だった。

「とんでもない魔力……！」

『——』

直後、とんでもない力を感じ取って、大きく後ろへ飛び退く。

……が、何も起きない。

気付けば先ほどまで対峙していた筈の奴は消えていて、魔力もいつも通りの様子に戻っていた。

「……一体何を？」

「魔力を見る限り、何にも異常はない……と思う。あれで何もしていないとは思えないんだけど」

「ケイ君は奴に勝てるか？」

「え、無理。私が生後2週間なの知ってるよね？」

「生後2週間だとは思えない強さなのは知っている。……ふむ。ここは撤退するべきだな。これ以上の進行はリスクいだ」

バブーバブーと鳴きつつ一閃でモンスターを切り捨て、詠唱の一声で敵を吹き飛ばすのは確かに変かもしれないが。とにかく撤退に関しては俺も賛成だ。

「二応急ごう。時間が経つごとに不利になるような仕掛けでも発動したら、厄介だから」

「うむ。了解した」

嫌な予感がする……。

この予感を確信とさせる証拠を見つけ出さんと、周囲の魔力に集中する。もし取り返

しの付かないことに繋がったら厄介だ。

……ああやっぱり、早速なにか聞こえる。これは、足音？

「なにか走ってくる……って、福笑い?!」

思わず福笑いと呼称した、顔面のパーツが崩れた人間。さっきまで通路を彷徨っていたのだが、今は俺達に向かって走って来ている。

『エアブロー!』

キャットの一声で、足元を掬われた福笑いがすつ転ぶ。今なら落ち着いて……。

『ストーンジャベリン』

敵の頭をを串刺しにする。それで敵は動かなくなった。

「はあ……間違いなくアイツの仕業だ。この福笑いは奴の操り人形か何か?」

「そう考えて良いだろう。それに、他の人形共も同じ様に襲いかかってくるだろう。

……少し足を止めることになるが、新たにペットを召喚したい。良いか?」

「良いよ、なるべく早く」

「努めよう」

「それでは……」

詠唱に入った仮面バカを守るべく、その側で周囲に目を配る。新たな敵が来るだろうと、守れる位置に移動して……何か足に違和感のある踏み応えを感じる。

「屈むのデス！」

「かがっ!？」

言われた通りに……いや、転んだと言った方が近いが、とにかく背を縮めると頭上を何かが通っていった。

「トラップが起動したのデス……!？」

「帰りは簡単に行けそうに——」

「次は頭上から何か来るのデス！」

「ああもうひつきりなしに！ 頭上ってどこ?!？」

「通気孔デス！」

通気孔って言うと、まさか……。

周囲を見渡す。丁度、仮面の奴の近くに通気孔があった。丁度今、そこからアイツが這い出て来て……。

「バカ……!？」

仮面のバカに駆け寄る。アイツは仮面のバカを挟んで反対側、剣を振るに振れない。庇って、吹き飛ばす。

「ぐ……ケイ！」

「ちゃんと周りを見……あ、コイツ——」

……ようやく気付いた。コイツから感じられる強烈な魔力が、今にも破裂しかねないほどに密度を増している。

標的を俺に変えたコイツは、俺との距離を、近くに留めるために、俺の腕を掴んで、

誰かを庇い、代わりに自らが犠牲になる。……なんというか、聞き覚えのあ——

・
・
・

——意識が戻ってきた時、同時に苦痛が全身を襲った。耐えきれない訳ではないが、慣れようとも慣れきれない痛み。

だが、それが意識を覚醒させる鍵になった。

「うぐ……つう」

「無事か、ケイ！」

「い……たいなあ、もう。最悪の目覚めだ……」

目覚めに水を差されるとか、凹凸しかない岩場で寝ていたとか、そういう物の比じゃ

ないぐらいだ。

頭を振って、周囲の状況を確認する。

すぐ近くには、爆発か何かで砕かれた地面。その反対側に、仮面を身に着けた男。その側に駆け寄る、猫耳の女の子。

「獣人……」

「ケイ、ダメージは？」

「……まだ動ける」

身体の調子確かめつつ、立ち上がる。

「何があつた？ 私は……」

「福笑い人形が爆発した。奴ら、特攻してから自爆する。厄介だぞ……」

「フクワライ……」

「……状況は、良くないみたいだね」

何故か空気中の魔素が一方方向に吹き荒れている。しかもこの魔素、あんまり良いものではない。ではなさそうだ。

「行くぞ、召喚の為に立ち止まれそうに無さそうだ」

「召喚？ それって……いや、この様子だと違うか」

「何を言っている？」

「いや、なんでも。……どっちに向かえば良い？」

「魔力の感覚が鈍ったのデスか？ この方向、魔力の下流に向かうのデス！」

その方向か、そっちに向かえば良いのか。

……分かった。

「うん、感覚も大丈夫。問題ない、すぐに動こう」

目覚めたばかりの私が置かれている状況は、少なくとも平穏と呼ぶ事は出来そうに無かった。

ウチのキャラクター、自立する。

『第二章 第十六節』

『彼女を探す旅は、目的地に到達しても尚、終わることはなかった。たどり着いた村には彼女が住んでいる筈が、存在しなかった。血縁者がいるにも関わらず、彼女の名を知る者さえ居なかった。

確かに俺も、2つ目の人生にて与えられた名は「ケイ」ではない。何度か自分の名を言い換え、2つ目の名を呼ばれても反応しないということを繰り返していたら、再びケイという名が定着した。

我が娘は一体何故男の名を名乗るのだろうか、困惑する両親の顔が呟いていたのが懐かしい。

ああ、でも、もし。この世界が彼女の居ない世界だったならば、という最悪な予感が頭をよぎる。

本当にそうだったならば、俺にとってこの世界は価値がない。ならばいつそ、この世界から離れてしまおう』

何処か懐かしい空間。あの森の様な漆黒だけの空間。光はどこにもない。

なぜこの空間に見覚えがあるのだろうか。瞼を閉じて、遮る光が無ければ目に映る光景も変わらなかつた。

「……………」

突如、目の前に文字列が浮かんでくる。

『警告：異常により、一時中断してきます』

異常？

……ああ、ステータス異常のことか。

確かあの仮面バカを庇って、あのモンスターに肩を掴まれて……多分、爆発したんだろう。きっと、このステータス異常とは“気絶”のことだ。

気絶中はこんなメッセージが出るのかと感心するが、何時までこの空間に居るままなのだろう。

俺が気絶するほどのことがあつたのだから、キヤットや仮面バカ、もといイツミに危

機が迫っているのかもしれない。

早々と復帰したいものだが、自ら復帰するにはどうすれば良いのか。

VRでは無いゲームならば、コントローラーのスティックやボタンをガチャガチャとすれば、復帰までの時間を短縮できるだろう。

だがVRゲームではどうすれば良いのか。

この空間の中で激しい運動でもすれば良いのか？

試しに、腕を振り回しながら飛び跳ねてみる。腕や足の感覚はあるし、床の感覚もある。試す価値はあると、しばらくやっている。

……本当に、しばらくだけやった。なんか馬鹿らしくなってきたから、この滅茶苦茶な動きを止める。

さて、どうしようかと悩んでいる所で、突如としてこの空間に“声”が出現した。

「私はケイ」

「は……？」

なんの予兆も無く、少女の声が漆黒の空間に響く。

反響する壁や床なんて無いのか、その声はどこかからエコーとして返ってくることはなく、ただこの空間に声が広がる。

「えつと？」

「二度目の人生で、前世の名を名乗った」

この時、この空間で初めて自分の声を自覚した。

それは男の声だったが、“ケイ”の声に慣れてしまっていて、この声が自分の声だと気付く事は難しかった。

そう、俺の声だ。

「俺の……声？」

確かめる様に声を捻り出した後、それを上回る疑問に顔を上げる。

「それじゃあ、あの声は……！」

「……でももう、そう名乗る必要は無くなった」

この少女の声は、“ケイ”の声だ。

自分が発する声を聞くのと、それを録音して聞くのでは意外と声が違って聞こえるのは、あらゆる人が知っていることだと思う。

だからか、一度ではこの声がケイだとは分からなかった。

「だから」

「ケイ……！」

「この旅路を終わらせることにした」

その言葉に答えることはなく、訳のわからない言葉を最後に声が止んだ。

直後に、まるで図ったかのようなタイミングで、目の前で陣取るメッセージに変化が現れた。

『警告：致命的ではない重大な異常が発生しました。5秒後に同調を解除します』

致命的ではない重大な異常、というよく分からない文章に混乱する。

『警告：致命的ではない重大な異常が発生しました。4秒後に同調を解除します』

この時、ようやくこのメッセージが伝えようとしている事を理解した。

『警告：致命的ではない重大な異常が発生しました。3秒後に同調を解除します』

運営はこの問題に対して対応してくれるだろうか、と嘆いた。

『警告：致命的ではない重大な異常が発生しました。2秒後に同調を解除します』

そしてカウントダウンの中、疑問を抱く。なぜ彼女がケイなんだ？

『警告：致命的ではない重大な異常が発生しました。1秒後に同調を解除します』

だって、彼女は——

・ ・ ・

「走れ、走れ！」

「前方からヤツなのデス！」

「『消し飛べ』！」

「ふにゃあ?!」

前へと押し出す爆風で、走り寄る敵が一瞬で丸焦げになって吹き飛んでいく。

私の放った魔法で驚いたのか、飛び跳ねて立ち止まろうとする。それを私が受け止めて、小脇に抱える。

「にゃ、にゃにをするのデス!？」

「抱えて走ってる！」

「行動じゃなくて意図を話すのデス!!」

「キヤット、言いたいことは分かるが今は走れ！」

「うう……とりあえず猫の姿に戻るから離すのデス！」

言われた通りに、キヤットと呼ばれた猫耳の少女を離す。すると直ぐに煙を纏って、その煙の中から猫の姿が飛び出てくる。

猫に変身するなんて初めて見たが……今はそれどころじゃないだろうな。

この危機を脱するのに使えそうな魔法は知っている。が、私はこの世界をよく知らない。そのまま魔法を使えば、厄介な事になってしまう。

だから徒歩で行くしか無い。

「ニャア！」

靱やかな動きで前方を駆けるキヤットが、大きな声でひと鳴きすると、何かを超えるように跳ねる。

いや、これは……。

「罨だ、その位置で跳べ！」

「分かつてる！」

やはり罨だ。キヤットはそれが分かっていた様だ。猫だからか感覚が鋭いのだろう。このまま先陣を切つて、罨の所在を教えてほしいのだが……。

「ニャア！」

「鳴き声じゃ分かりづらいって！」

「鳴いたら跳べ！」

そう言いつつ跳ねる。罨がある時は跳んで、鳴き声で伝えてくれるなら、何も言わないより良い……。猫の方が速く走れる様だし。

それよりも、この状況だ。

「どうする!!? 隠れるか脱出! 『塞げ』！」

後ろからの気配を感じて、壁を生み出す。直後に壁の向こうから爆音が上がる。

「その魔法で殲滅は出来ないのか?!」

「それで目当ての物が残ってくれるなら!」

「……………そうだな、脱出だ!」

結構迷ったな、この仮面男。

しかし脱出を目標に最後まで走るには、流石に体力が足りない。私に関しては、酷く足場の悪い道じゃなければ十分行けるが、他二人の方が不安だ。

顔の崩れたあの人形共は、魔力で動いている。あの手のヤツは、大体持久力はほぼ無限だ。特にこのような環境では。

「『吹き飛ばせ!』」

前から来た人形を消し飛ばす。攻撃を受けると同時に爆発したみたいだが、私の魔法によって爆風も押し返されている。

人形達の脅威は、私の手によって全て弾き飛ばせるが……。

「どれぐらい走ると思う?!」

「かなり!」

それは大変な距離だな! 頼むから2人とも疲れて転んだりしてくれないで欲しいものだ!

「創也!」

「!」

仮想の世界から追い出された直後、携帯を片手に扉を叩き開いた母が突入して来た。一体どうしたのだろうか。そう思つて、寝起きの様な感覚の中で頭を揺らしている、俺の元にまで到達した母が思いつき抱きついて来た。

「?!」

「大丈夫?! 無事ね?! 脳みそ焼けてない? 私的事わかる?」

ええもう。母の美しいお顔がハッキリと、視界一杯に。

お陰で目が覚めた。俺はついさつき、矛盾している様でしてない内容のエラーで、V Rの世界から追い出されたのだ。

母がここまで慌てている理由は想像がつく。その答え合わせに、横に放られた母の携帯の画面を盗み見ると、『ご家族の創也様の、VR事故防止処置のお知らせ』という題で、メールが表示されていた。

VR事故。最近では滅多に聞かない単語であるが、VRがまだ技術としては安定していなかった頃に良くニュースで使われていた。

記憶を失った、人格に異変が発生した、脳機能に障害が残った、脳が傷付けられ死亡した。俺が知る限りではそんな風の事故が、多くはないが起きていた。

「良かった……。良かった」

しかし母よ。主人公の危機に駆けつけて、涙をポロポロと流して泣きつくと言うのは、ヒロインに許された特権なのだ。

その上、実の母親からの愛情表現としてのハグは日本人に馴染みがないのだから、非常に落ち着かない。

母の肩に手を置いて押すと言う抵抗に気づいて、ようやく母は俺を解放してくれた。

「ごめんね。でも、すごく、すごく心配で……。ねえ、記憶、ちゃんと残っているわよね？」

やはり母としては、そこを心配するだろうな。

母が気に掛けずとも、俺は今日のメシが何だったかとか、自分の誕生日が何時だったかぐらいは覚えてる。

ポケットに入れられていた自分の携帯を取り出して、俺の言葉を画面に打ちつけた。

『大丈夫だ、安心してくれ』

その証拠にと、追加の文言を後ろに付け足す。

『母がハンバーグとハンバーガーを呼び間違えたのは通算82回だ』

「ああ、よかった……！ また忘れられてたら、私どうしようって……」

この件で記憶を失くしていたら、俺は人生で2度記憶を喪失した、貴重な人間となっていただろう。

……ああ、そうだ。俺は一度、記憶を失ったのだ。今から2年前の事だ。

曰く、俺はトラックに轢かれた。被害者は2人、加害者は眠気で頭が働かず、歩行者のいる横断歩道に直進。

場合によっては異世界に飛ばされかねない出来事だったが、幸か不幸か、飛ばされたのは俺の記憶だった。その事故以前の記憶は、全て失われた。

それだけじゃない。その時に残った脳のダメージか、俺は言葉を口から発することが出来なくなっていた。

きつと2度目があれば、言葉の喪失だけでは済まされないだろう。母の心配は、俺にも通ずるものがあつた。

だが、そんな心配よりも気になることがあつた。

ケイだ。彼女の事だ。ダンジョンに置いていった仮面バカとキャットのペアも心配だが、それ以上に気にすべきことが彼女の件だ。

ケイという存在は、俺によって作られた創作人物。つまり俺だけが知る架空の存在だ。

だと言うのに、彼女はあの場で語っていた。まるでケイがあの場合にいたかの様に。

「……創也？」

『さつきくれた本は何処に？』

「……理由を聞きたいわ」

理由。改めて聞かれると、言語として表現するには難しい。

本が欲しいのは、ケイの情報をまた確認したいから。確認したいと思ったのはケイの事をよく知りたいから。よく知りたいと思ったのは……。

『記憶喪失以前の俺を、知れるかもしれない』

「……確かにそうかもしれないわね。けど」

あの本だけで過去の俺を知るなんて、無茶だ。母の言いたい事は分かっている。

だが、向こうには「生き証人」が居るかも知れないのだ。

ケイの声は、俺に語りかけた。一方的な語りばかりではあったが、その言葉はきつと、過去の俺を知る一欠片の手がかりとなる筈だ。

「そうね、本は食卓に置きっぱなしよ」

助かる！

俺はすぐにその本を取って、すぐに内容を確認した。

内容自体は変わらない。実は追加の情報が隠れていた、と言うこともない。

……やはり、読むだけでは大した手がかりにはならない。

「どうかしら？」

『まだ分からない』

「そう……」

まあ、読むだけで記憶が戻ってきたら、それこそ魔法書みたいな物だと感動していた
だろう。

だから俺は、次の手段を取ることにした。

『VR装置を使いたい』

「……その理由も聞いても良いかしら？」

真実を言わないのなら、あの2人を放って置けないと言えば済むだろう。だが違
う。そんな理由しかないのなら、俺は万全を期してしばらくの間VR装置を封印する。

俺が我が身を蝕むリスクを容認してまで戻ろうとする訳は、ケイと言う存在以外にな
い。

俺は彼女に会わなければいけない。

『どうしても会わなければならぬ人がいる。きっと俺にとって、重要な人』
理由として説明されている様で、しかし要領を得ない、曖昧な言葉選び。

母が悩んだのは、僅かな時間の間だけだった。携帯のモニターを向けている俺の手を、その両手で優しく包み込んだ。

「信じるわ。ちよつと心配なだけれど……私は信じる」

『ありがとう』

「ええ。良いの。そんな表情を言う事は、きっと本当に大事な事なのでしょう」
俺は頷いた。

「だったら、行きなさい。私は信じてるから」

ウチのキャラクター、それと俺。

『itemID 』 F249AC』

『NAMEen 』 "Glowing fruit"

NAMEenAP 』 "Faraway star"

NAMEjp 』 "光る果実"

NAMEjpAP 』 "悠闇の煌実"

DESCRPTIONen 』 "At the far far away sky, a wish was send to a star. However, the star was so far away that I might could not reach it until several decades had passed. The only thing that could be done in response to the wish was to return the faint light to the land beyond the distant past."

DESCRPTIONjp 』 "とある遠い遠い星に、一つの願いが届いた。し

かしその星は、光でさえも数十年と経たねば辿り着けない程、遠い空にあった。届いた願いに対して出来た事は、悠遠の向こうにある地に、か細い光を返す事だけだった。”』

. . .

『キャラクターサーバーの同調に失敗しました』

『キャラクターモデルの同調に失敗しました』

『キャラクターボイスの同調に失敗しました』

『キャラクターインベントリの同調に失敗しました』

『キャラクタースキルの同調に失敗しました』

『The avatar ”ケイ” is already exists in
the world』

『Awaiting command.』

『Accept command』

『ヴァーチヤル・ファンタジーへようこそ』

『コードを確認しました。アバター：DEBUDOLL@Alphaを使用します』

・
・
・

「……っ！」

硬い地面から身体を起き上がらせ、先程現れたメツセージに混乱する。

表示されてから消えるまでの時間が極端に短くて、ついには“失敗”という単語しか認識できなかった。

だが、明らかにエラーメツセージの類だと言うはなんとなく察せた。

しかも、英語のメツセージまで出て来た。英和辞典や時間があればともかく、一瞬出現してから消えたから全く読めなかった。

……どうやら俺は不具合に愛されている様だ。現実には追い返されないのなら良い。

とりあえず、地べたに座っているわけにも行かないだろう。立ち上がって、自分の姿

を見下ろしてみる。

「これは……っ！」

驚いて、また尻餅をついた。

俺の姿は何時ぞやのマネキン姿だった。

そう言えば視点も若干高い。現実基準で言えば何時もと同じなのだが、ケイの時と比べれば、今のほうが高かった。

「なんでマネキンなんだ？」

誰かに伝えるまでもなく質問を口に出すが、それを答えるものは誰もいない。

「……」

そして声も、俺の物。先ほど追い出される直前に初めて耳にした声だ。

ああそうだ。俺は自分の声を知らない。記憶を喪失し、その影響で声を失ったのだから。

一応、自分の顔を触ってみる。目も、鼻も、口も、耳も。そして髪も無かった。

自分の姿ではないとは言え、マネキンの姿だとは言え、髪がないと気づいて思わずショックを受けた。

これではハゲである。いや、ハゲてないマネキンもどうかと思う。……うむ、カツラを被ったマネキンなぞ見たこともない。ならばこのような頭なのは仕方ないか。

「うん、仕方ないな」

むしろ髪の毛の生えたマネキンになってない事に感謝だ。動くマネキンという珍生物に、髪の毛とか言う面白アクセサリーを与えられては笑いやつにしかならない。

さて、自分の姿に驚いているのはこれぐらいにしよう。

この場所は、確か俺が爆発に巻き込まれた場所の様だ。その証拠に、傍には裂けて散った福笑いの服がある。

そして向こうには、綺麗に切り出された様な表面を輝かせる石壁が、通路を隙間なく塞いでいた。オマケに、福笑いの残骸がその側に重なっていた。予想するに、あの壁は何度も爆発を受けて、それでも傷一つ残さず立っている。

それにあの壁は、俺の記憶が正しければ、戻り道の方向にある。

仮面……じゃなくて、イツミだったか。イツミとキャットの姿は見当たらない。ケイの姿も何処にもない。

ポジティブに考えれば、逃げていったのだろう。恐らく壁の向こうへ。すると壁を作り出したのはイツミ達の隠し札だろうか？ 逃げる為の手段は持っていたらしい。

「さて、壁は……殴っても砕けるのは拳だけか」

爆発を受けて耐えるのなら、殴っても結果が同じなのは明らか。ならば行くべき方向

は……。

「ダンジョンの奥、だな」

ダンジョンは危険で満ちている。元々持っていたはずの装備やアイテムは、何処にもない。

この姿で死ねばどうなるのかは、分からない。プレイヤーと同じ様に、町で復活できれば良いのだが。

どちらにせよ、奥に進むしか無い。

・
・
・

歩く。歩く。

時々分かれ道で立ち止まり、そしてまた歩き始める。見つける扉から通路を見つければ、その方へ向かった。

どれ位歩いたのかも解らない。

帰りのことをよく考えずに潜り込んでしまった。今から元の場所へ戻ろうとしたって、きつと道もわからずに迷ってしまおうだろう。

しかも、このマネキンには魔力を感じ取る力を持たない様だ。

帰りの事は後で考えるところとして、ダンジョンの何処を目指して歩けば良いのだろうか。最善は、イツミやキャットへ合流することだ。しかし既に彼らは逃げ切ったか、あるいは爆発四散している。このダンジョン内で再会する事は難しいだろう。

「……はあ」

扉を開く。続く通路には、質素な石レンガのみ。照明はないくせに、ダンジョン内は薄く照らされていた。

影は俺の真下にあるが、それさえ薄かった。影の広がり方を見るに、光源は天井の一面全体と考えるべきだろう。

……そういえば、報酬はダンジョン探索の収穫を分けるというものだったな。

それと……ああ、危うく忘れる所だった。レイちゃんの為に輝く果実を採って来ないと……つて。

「……っは」

バカか、俺は。

この姿でレイちゃんに会ったら、確実に驚かせてしまう。それに、これは“俺”だ。

私として、ケッチャんとして、レイちゃんと再会しなければいけない。

……この道はどこまで続いているのだろう。扉にも、分かれ道にも出ていない。真つ直ぐなだけの道だ。

20分は歩いた筈だ。この通路は何のためにあるのだ。

そう疑問を抱いた頃に、細やかな異変を、視覚という感覚で見つける。

「……光？」

何もない通路を、何もないと表現できなくなった瞬間だった。思わず、俺は小さく呟いた。

ここは明るい。だと言うのに、そこに“色付いた光”が在るのを見つけた。恐らく魔力だ。魔力の色が、薄く見える。しかし、ケイだった頃の感覚とは違う。

……どう言う事だろう。少し考えたが、分からなかった。

もしかしたら、この光または魔力の持ち主があの方にいるかもしれない。

そう思い、どこぞの街灯に群がる虫のように、光へ向かって歩いていった。

こういうのを何て言うんだったか。確か、集光性？

……などと自分の中でよく分からないやり取りをしていると、俺はある声が僅かに聞こえた気がして、耳を澄ませた。

「……………」
この声は……誰だ？

声の正体は何だと、首を傾げていると、通路の最奥に扉を見つけた。

鍵は開いている。ドアノブを回せば、薄暗い部屋だった。

中に誰か居るのだろうか。この姿を見られたら、どんな反応をされるのか。

しかし、部屋には誰の姿もない。

代わりにあったのが、中央に鎮座する一本の剣。それだけが、この部屋の中で鈍く輝き続けていた。

・ ・ ・

「出られた……のかな」

「とりあえず」施設からは出た様だな。追手は来なさそうだ」

流石に長距離の全力疾走は体に堪える。疲れを癒やすために、慎重に魔法を練り上げ

ていく。本当の疲労は誤魔化せないが、疲労を無視した動きは出来るようになる。

「で、これからどうするの?」

「撤収だ。お前も向こうで話せる土産話が増えただろう」

「……まあ、多分」

どこで話せばいいのやら。私は、この身体の記憶を知らない。帰るべき家も。

「とにかく、帰るなら一緒に……ん、何だろう、これ」

「どうした、ケイ君」

「うわ……本当に何なのこの魔力、気持ち悪い」

「どうしたのデスか? ワタシには何にも感じないのデスが……」

他の人には分からない様だが、私にはこの魔力が分かる。本能的な嫌悪感と言う類の感情が湧き上がってくる。まるで死人の腐臭の様な……。

そしてこのタイミングだ。私達の状況とは無関係だとは思えない。恐らく、私自身のこれとも関連している。

「……後始末をしない訳には行かない」

「どうしたのだ?」

「仮面、私は魔力の源流を調べる。ここからは勝手に帰って」

「話と違うぞ。依頼は地上に戻るまで続く」

一体どんな話だったのやら。私が知りたい。

依頼という事は、これを反故にするのも不味い。

「依頼か……」

……あの魔力量ならある程度距離があっても、その場に向かえるだろう。それなら、後で直接行けば良いか。

「仕方ない、送っていくよ。地上までね」

「ああ、地上までだ」

……自爆を狙う奴らから逃れ、施設か遺跡と呼べる所から脱出し、魔力の流れは弱まり、比較的落ち着ける状態になって。

私は思う。この姿は私その物。しかし持っている装備や、身体に宿る力は覚えのない物。そして世界の法則。

魔法は今まで通り使えるが、リソースとなる魔力が……いや、魔素と言うべき要素が豊富で、身体を循環する方法は以前とは違う。

元より出来もしない話だが、身体ごと送り込まなくて良かった。そうすれば、この世界の魔素に順応出来なかった。

ああ、この世界は、前回とはまるで違う。

何もかもが。

「どうしたのだ？」

「どうもしてない。まあ、このダンジョンも随分大きいなと思っではいるけど」

多分だが、出口に近付いている。別れ道から、魔素の下る方向へ進み続けていると、空气中の魔素の感覚が僅かに薄れて来ているのだ。気持ちの悪い感覚はそのままだが。

すると、地面の石をそのまま持ち上げた様な壁が現れる。壁は雑に生成されたのか、隙間が見える。ここが行き止まりでない事は明確だ。

『崩せ』

「……」

揺さぶってみれば、すぐに崩れた。本当に壁を持ち上げただけで、形状を維持する為の魔力は残っていないかったみたいだ。

数歩先に同じ様な壁があったから、また崩して。……そして、出口らしきものを見つけた。

「……だね。この真上」

「ふむ、天井に縦穴が伸びているな」

魔力はこの上方向に多く流れている。対して、そのまま歩いて行ける道の方には魔力はあまり流れていない。

「よく見ると、一塊の大岩が塞いでいるようだな」

「んー……少しだけ離れてて」

「む、分かった。やることは想像つくが、洞窟ごと破壊しないでくれよ」

「そんなドジはしないよ。……『大爆発』」

威力の一方集中を意識しつつ、現象を唱える。揺れる地面に若干の高揚を覚えて、咳払いで誤魔化す。

最近はまだ魔法を使う事自体が無かったから、属性の影響を受けやすくなっている様だ。まだ破壊狂になるつもりは無い、気を確かに持とう。

「さあ、日の光だ。後は行けるでしょ」

「うむ、地上も地上で危険だが、森の中を通らなければ十分安全だ。ここで依頼完了としよう」

「どうも。報酬はもう良いから、私はまた奥の方に行く」

「それは構わないが……。ケイ君は何をそんなに急いでいるのだ？」

「……無関係な人に教える気にはならない。私はもう行く」

「おい、待て」

「待たない」

強引に話を切り上げて、来た方向をまた戻っていく。

追ってくる気配はない。敵の気配も、今は無い。これなら、集中できる。

「すう……」

軽く息を吸い、目を閉じる。魔素の分布を立体的に把握する。魔素の源流と思わしき座標を特定する。座標を元に移動先を設定する。式を編集し安全に到着するよう調整。仮構成完了、テストラン。地面の一部を転送。空間上に障害物無し。転送物の構造に異変無し。転移可能。

「……良かった、使い勝手はあんまり変わらなさそうだ」

一瞬の間だけ安堵の息を吐いて……、目を開く。

後は一言、唱えるだけ。……行こう。

『転移』

ウチのキャラクターと俺、再会する。

部屋の中央に佇む、一本の剣。埃をかぶっているでもなく、神秘的な光が差しているでもない。自ら光を放つだけで、他に異常は見られない。

見渡すが、人はいない。声が聞こえた筈なのだが、別の音と勘違いしたのだろうか。一度考ええる。何も考えずにあの剣を台座から引き抜くのは、トラブルメーカーのやる事だ。なにしろ、見るからに怪しいのだ。あんな通路を渡った先で、こんな部屋だ。とても剣一本だけとはとても思えない。

剣から放たれる細い光は、影を一切作らない様だ。一般的な光とは違う何かで、光っている様に見えるのだろうか。大方魔法的な原理なのは違いない。

周囲を改めて見渡しても、何も無い。せめて、なにかヒントになるメモを握りしめた死体があつても良いだろう。

そんなものが無ければ、もはや調べられるものは壁や床、そして警戒の為に保留しているあの剣しか残っていない。

一歩の距離を常に意識していた剣に対して、ようやくその一歩の距離を超えて近づく。

すると光が強まる。暖色の、オレンジ色や茶色に近い色の光だ。もう一步と、足の幅ぐらいの歩幅で近づくと、その光はまた強まる。

……何が起こるか分からない。接近だけでもこの反応だ、壁際の方に戻る。伴って光も戻る……かと思えば、変わった色はそのままだった。これ以上干渉したくない。

ふと、このダンジョンの性質、地上への影響。この世界にきて数日頃に尋ねた、調査員が聞かせてくれた話を思い出す。

もし、この剣がダンジョンの性質に関わるものだとすれば……。

「……せめて最悪の事態にならないければ良いが」

俺の言う最悪の事態とは、俺の行動による被害が俺の死ではない。あの異常な森を生み出した魔力が、森の外へと魔の手を伸ばし、果てには王都にまで影響が及んでしまう事だ。その最悪以上の事態が起こった時にどうなるかは、あまり想像したくない。

せめて、この世界がその様な初見殺しをポンと置かれるような所では無いと信じておこう。だからってあれを手取る気は無いが。

うむ、俺は臆病者だ。しかし臆病は弱者の特権だから許してほしい。

「さて、奇跡的に戦闘もなく、恐らく重要な部屋にたどり着いてしまった訳だが」

記憶を失って以降、記念すべき“自分の声”との再会を果たしてこの有様だ。自慢の声は何処にも届かない。いや、好青年とは言わずとも、至って普通の成人男性の声だが。誰かと喜びを分かち合おうにも、誰もいない。我が母でさえも、この世界で顔を向かい合わせることはできない。

地面に座り込む。

奇跡的に戦闘が無かった、とは言え理由は大体察している。あのモンスター達がイツミ達を追ってここを離れたのだ。つまりこの施設には、恐らくあの謎の魔法使いしか居ない。

……そういえば、あの魔法使いは何処に行ったのだろうか？

背中を壁に預けて、足を伸ばす。

「姿が見えないからって、態々探すものでもないな。探すとなればケイだ」

自慢の声を鳴らして、序に声を慣らす。

エラーと共に世界から吐き出される前に聞こえた、ケイの声。実をいうと、ケイと関係しているであろう事象はそれに限られていないのだと思う。

まず、恐らく計6回にも及んだ、短期的な“記憶の欠落”。そしてその間における俺の“異様な行動”。俺が経験しているその6回分全てが、達人的な能力で危機から脱するという一連の行動という物で共通しており、そしてその後意識が復帰している。

俺は思うのだ。その間、俺が意識を失っている間、俺は身体をケイに預けていたのではないだろうか。

ケイの姿をケイに預ける、というのもなんとも奇妙な物だが。まあ、どちらかと言えばあり得る話だ。

……科学的にあり得る話かと言われれば、まあ出来るかもしれないとしか言えないが、逆に科学で説明できるかと言ってみれば、無理だと答えが返ってくる筈。

ゲームが俺の頭を覗き込んで、俺の意識のクローンを生み出すなら……まあ、狂科学者にでも目をつけられたと納得できる。人間に殆ど等しいA I——専門家は Artificial Intelligence
A I とは呼ばず、 Artificial Human
A H と呼んでいる。——は作れる時代だ。

人の人格を写したA Iは聞いた事もないが、見知らぬ何処かでプロトタイプが作られているかもしれないから、まあギリ技術的な可能性はある。

でも、“俺の頭の中にある仮想の創作人物”が一人のA Iとして喋りだすのは……想像つかない。

勿論、俺の思うこれらすべては、専門知識の無い俺が吐き出す無知な想像であり、もつと言えば妄想と言っても差し支えない。

実際に研究し、実現を目指している夢想家な研究家が俺の妄想を知れば、地面にヒビ

が出来るぐらいには地面を転がり回りつつ笑ってくれるだろう。後々に「面白い話だ、小説家にもなったらどうだ？」とでも言ってくれるかもしれない。

……考えておこう。

しかし、ああ。時間が出来て、胸に残る疑問もあると、思考が何処までも長引いてしまふ。慎重な棋士でもここまで長考しない。

「……歌でも、歌ってみるか？」

座っている姿勢でさえ、腰が痛むような気がしてきた。石の堅い地面だ、致し方ない。特に地面も汚いわけでもない。俺は横たわった。

人形の腰が痛むというのも、面白いものだが。

「あー、歌ったことないな。……歌うのもハードルが高いな」

覚えている曲がそもそも少ないし、音の高さというものの取り方が素人未満なのだ。難しい。

「……それにしても、喋り方は覚えてるんだな。滑舌は……人に聞かせないと分からな
いか」

「聞かせる人が来れば良いんだが。この自慢の声を皆に知らせる機会だ」

「……来るとしたら冒険者か？ でもギルドからのダンジョン発表はまだ後だしな」

「確か危険度調査の為に人員を送られてから……だったな」

「流石に調査で最深部まで来ないか」

「ダンジョン探索が始まって、直ぐにここまで来る人は……居ないだろうな」

「そもそも魔力を感じ取れないと難しいか」

「いや、魔力の源流がここじゃなかったら、辿り着くのは別の部屋か」

「ここから出るのは……今更出たら危険だよな。追いついたにしろ見失ったにしろ、奴らは戻ってくるはず」

「肝心の魔法使いは……初対面があれだ。神出鬼没だつて考えようか」

「嫌なことに気づいてしまった。もし見つかるとしたら、冒険者ではなく、あの魔法使いの可能性が高い」

「……怖くなってきたな」

「そろそろ誤魔化せなくなってきたか」

「本来、人は孤独に生きる生き物ではない、とはよく聞かすが」

「孤独に恐怖するからか。一人では除けない脅威に恐怖するからか」

「多分、後者だな」

「孤独自体に恐怖はしない、寂しく思うだけだ」

「ああ、独り言を続けて俺は何をやっているんだ」

「俺はケイを探すんじゃないかったのか」

「ああそうだ、俺は怯えている。安全だと思わしき部屋に引きこもって居るだけだ」
「怖い物は怖いさ。例えゲームでも」

「そんな中、ケイの姿で居られた時は、彼女の勇気を借りられた」

「今思えば、俺はケイを演じていたのではなく、ケイの姿と声を借りていたんだな」

「才能と時間で積み重ねられた剣の技術と、魔法の素養は、きつとケイが与えてくれたんだらう」

「今や人形の姿となった俺には……そんなものは宿っていないが」

「いや……違う」

「俺の姿が……身体が、ケイに近づいていった……のか？」

「この答えは長い時間の中に閉じ込められ、おかしくなつた意識から生まれた出鱈目なのだらうか。ともすれば、俺は幸運だったらう。」

「しかし俺は思う。どうしてそれが幸運だと思えるのだらうか。この答えが出鱈目だと、そう望んでしまったのだらうか。」

ケイの姿に成り切るのは、俺が望んだことではなかったのか？

剣が床と俺を照らす一室に、一瞬の閃光が生まれた。

「つ……今のは……」

立ち上がり、周囲を見渡す。何故か石の固まりがそこにある。

いったい何なんだ。瞬きを2度繰り返したその次に生まれた閃光が、今度こそ俺の視界を奪った。

・
・
・

転移した先、そこは小さな部屋だった。

思わず吐いてしまいそうになるほど、気持ちの悪い魔力で一杯だった。まるでそれは、小さな一呼吸で肺を腐らせるのを錯覚させる毒。しかし大きな一呼吸で、それが錯覚ではなく事実だと気付ける様な毒。

……ここであまり魔法は使いたくない。吐き出した魔力を再び満たすために取り込まれる魔素が、この身を滅ぼしかねない。

そう、このモンスターのように。

「な、お前は……」

「……意識はあるんだ」

こういった魔素は大抵の場合、生き物を変異させてしまう。

狼から逃げ惑う兎は、その魔素に当てられた途端に熊の首を食いちぎる。人間に従う飼犬は、変異した身体から首輪が剥がれ落ち、飼犬の腕を噛んで飲み込む。屍に残った肉を狙い、獲物を喰らう虎が離れるのを待つ鳥は、生きた虎の肉を啄む。

そして人間は、途端に元の姿や人格を失い、与えられた姿と本能で人を襲う。

不幸な事に、変異しても意識が残る人間も居るのだ。この目の前の人形のように。

おそらく、この魔素自体は私が来る前から流れ出していたが……私の介入をきっかけに、あるいは元々の“私達”の行動が原因で、流出が激しくなったのだろう。

「ケイ……?」

「……私の名前を知ってるんだね」

ならきつと、かつてこの身体に宿っていた“ケイ”の知り合いなんだろう。

生憎と、あの仮面や猫の巫人と同様に、彼の名前を知らないのだけだ。

ふと、彼と目が合った。気がした。

服は勿論、目や鼻、口もない白色の人形の姿は……どうしてか、“見覚えがある”と、

私の心が呼びかけてる。

「……」

「……」

まるで、お互いがお互いを見定めているみたいだ。

何故か、あの視線にどんな思いが込められているのか。そして私が抱いている思いがどのような物か、気になった。

評価する絵師の視線ではない。

対峙する剣士の視線ではない。

眺める子供の視線ではない。

私は思う。

これは、永い年月を経て再会した友人の視線ではないかと。

ウチのキャラクターと俺の、求める記憶。

——ケイだ。

銀髪のポニーテール。灰色の短めのマント。白いシャツの上に重なる蛇革の防具。間違いなく、彼女は“ケイ”だ。それに装備を見るに、さつきまで俺が使っていた“キャラクター”と同じだと思って良い。

どうして光と共に現れたのだとか、まるで意思を持ったように……いや、自立して動き、そして俺を警戒しているのだとか。疑問はある。

ただそれ以上に嬉しかったし、打算と言う目線から見れば、記憶の手がかりとしての証拠人は俺に期待を抱かせてくれる。

出会って早々、剣を向けてはモンスター呼ばわりしてくれているが、でも嬉しいのだ。モンスター扱いには理解の余地が十分あるのだし。

「キミ、私の知り合い？」

最初は警戒を露わにしていた。しかしモンスター扱いよりはマシになった様だ。でなければ言葉を交わそうとしない。

思わず彼女の名前を呼んだのもあるだろう。無意識ではあるが、命を拾った。

質問に対し、どうなのだろうと悩む。一方的に知っているだけで、“ケイ”が俺を知っている訳がない。

「どう返答すれば伝わるのか判断付かないが……お前は何をやってるんだ？」

俺が考え込んでいるうちに、ケイは答えを待たずに剣の柄を握りしめた。彼女が持つ剣ではなく、あの散々放置していた剣だ。

……俺の警戒とは何だったのか。と思える程あっさり引き抜いてしまう。

「剣を抜いてる」

「行動じゃ無くて意図を……いや、魔力をどうにかしに来たのか」

「なんだ、知ってるんじゃない」

「まあ……言っておくが、俺はただ警戒して、剣を抜くかを保留していただけだ。何かあれば、この身体じゃ何も出来ない」

「ふうん……。それで、さ」

な、剣の事はどうでも良いのか……？ そうと言っているかのような態度で、何かを促すように俺を見る。

「……何だ？」

「最初の質問。なんで私の名前を？」

「ああ、そうか。そうだったな……。とりあえず、俺はお前を知ってる」

「簡潔だね、でも曖昧」

「言葉が見つかからないんだ……」

「怪しいヤツ」

もう一度言葉を探してみるが、ケイと俺の関係を言い表す方法はとても少ない。ケイの創造者だ、などと言う気が無い今は、何も言えない。

そういえば、ケイの口調や声は、俺の想像していた物と殆ど同じだ。ケイの方を見れば、武器防具を例外としても、あのノートで見た格好と全て同じもの。

確かにあの姿をこのアバターに写したのは俺だが、瓜二つと言っても良い。

「じゃあ質問を変える。キミって人間？ この世界の人って人形みたいな姿が普通なの？」

これも説明が難しい。プレイヤーにとっては、確かキャラメイキング中の仮の姿として一度は経験している筈だ。

だが普通では無い。この世界に降りた時点で、彼らは既に姿身を獲得している。NPCを含むのであれば、間違いなく一般的な姿では無い。

「何というか……とにかく、元人間だ。気絶して、起きたらこうなった。一部の人間にとつては、真つ白な姿の人形というのはある程度馴染みがある筈だ。自分の姿になると

なると、難しいが」

「へえ。……やっぱりよく分からない」

人間社会の中に、俺のような人形は馴染めないだろう。ツルツルプラスチックスキンで身を包んだ俺としては、声に戻って来た事の方に歓喜している所だ。……人間の身体に備わっている筈の器官は、どれもこれの備えられていない様だが。

呼吸の感覚も、呼吸による肩や胸の動きもある。……そう考えると一層謎だ。

「……狂暴化の様子もなさそうだ」

狂暴化？ 俺の何処が狂暴だと言うのだ。これでも俺は温厚で静かな性格で有名なんだぞ。友達居ないが。

「どういう事だ？ 狂暴化？」

「悪しき魔力に蝕まれ、意識は狂気に塗り替えられて、その姿は悍ましい何かに変貌する。これは似てるけど……」

「……けど？」

「……キミが聞いても何にもならないよ。こつちの世界での話。……ああもう、独り言の癖がまた付いた」

……待て、“こつちの世界”と言ったか……？

そんな言い方をするのは、複数の世界を認識していることになるが……もしかして。

「まあとにかく、キミは無害みたいだね。疑って悪かったよ」

ケイの持つている剣が鞘に納められる。

「そうだ、友好的な関係を目指すなら、第一にこのダンジョンから出してほしいんだが」
「分かったよ。こつちも用事は済んだから」

用事とはやはり、この剣を抜いて悪しき魔力とやらをどうにかする事だろう。引き抜かれた剣は、放っていた筈の光が弱まっていた。

ケイの手にある剣は、一見すると大きさと体格が釣り合っていない様に感じた。買い換えたばかりのあの剣より、一回り大きく長い物だからだろう。立派と表現するには、やや無骨すぎるが。

「へえ、面白いね。この剣は。……なるほど、あの不自然な洞窟はそう言う事か」

「どう言う事だ？」

「ん、ああ、また独り言の……。魔力が土や石に馴染みやすい特性がある。少しだけど、植物にも」

「なるほど。土属性の魔剣って奴だな」

所謂、魔剣。杖と同じ様に魔法の補助に利用できる種類の剣であり、悪魔の剣だとか呪いの剣だとか、そういう意味は含まれていない。

これの場合、土属性魔法の補助で特に効果を発揮するだろう。魔法剣士には嬉しい品

物だ。

「……予想は出来た事だけど、言葉の定義も違うらしいね。じゃあ地上に出るよ、人形」
「人形？」

「そうとしか言いようが無いでしょ、キミの姿は。ほら、私の手を握って」

「あ、ああ。握るんだな」

多分、普通に脱出するつもりではないのだろう。先程ケイが現れた瞬間のことを思い出す。

理解に及ばない技術だが、きつとまた同じことをするんだろう……。

「分かった、握り潰さないでくれよ」

「大丈夫、目が眩むだけ」

だったら目を瞑っておこう。その前にケイの手を握って……、これで良いのか？

「良いか？」

「ん、『転移』」

転移とか言う得体の知れない技術だが、ケイならきつと大丈夫な筈だ。

不安を信用で押し殺して、瞼を貫く光に耐える。

「う……本当に、転移したのか」

目を瞑っていても容赦なく目を突く光に怯んで、少しすると空気の匂いが変わった事に気付く。

石レンガの部屋から変わって、むき出しの岩肌に囲まれた洞窟。それも、この場所は見覚えがあるような……。

「手足や指が欠けた感覚は無い？」

「さっさと恐ろしいことを言わないでくれ。……五体満足だ」

この世界のケイならば、本来知らない筈の魔法。やはり俺の予想は合っているのだろう。

彼女は異世界からやってきた事は確信しても良い。隠すつもりもなさそうだが、だから何だという話になりそうだが……。彼女の事を多く知れるに越したことは無い。

「転移の魔法か。どこで覚えたんだ？」

「何処でっていうか、普通に作った」

「作る時点で普通じゃ無いんだが……」

まあ、時間遡行を行う魔法を作り出すぐらいだ。これぐらい屁でも無いって事か。辺りを見ると、崩れた石がごろごろと転がっているのが見つかる。上には縦穴があり、そこから青い空が見える。

「()は……」

「さ、手首を掴んで」

言われた通りに握る位置をずらす。互いに手首を掴む形だが……。

「あー、ケイ」

「何？」

「心の準備で何秒か用意してくれるか？」

「一秒なら。はい終わり」

「ば」

馬鹿！ 本物のケイっていう奴もこんな性格なのか?!

急速に持ち上げられた地面に突き飛ばされて、穴を通って地上に出る。……が、勢いがまだまだ残っているせいで、残った勢いに地上5メートルぐらいまで持ち上げられる。

「高……っ」

『『塞げ』』

あ、地面の穴が塞がれて……手を離された?!

「ちよ」

「つと」

「ばっ」

……………痛い。鼻の無いマネキンだったら鼻っ面を痛めなくて済んだのに。

「よし、魔剣とやらのお陰で魔法も好調だ」

「……俺は絶不調だが」

「ああ、ごめんね。着地しづらいだろうと思っただけだ」

ごめんねで済まされる話だろうか。いや、ケイなりの考慮があつたのなら良いのだが……。

「はあ……」

記憶のために、これからケイと関わっていくつもりだが……この調子だと、何時か勢い余って死ぬかもしれないな。

「それにしても、地上も中々の魔境だね」

「……さっきのダンジョンから地上に流れ出た魔力が、森の異常成長の原因となってい

るらしら」

「ふうん」

さて……。このケイなら都市の方向や、近くの村への方向も知らないだろう。俺も地図が無い以上は分からないのだが……。真つ直ぐ一方向に向かえば、取り敢えずは森を出られる筈だ。

「確かに森の中は真つ暗だ、『照らせ』」

「……万能だな」

ケイの手から光が生み出されて、ひとりでに森の中へ進んでいった……。ケイはランタンを持っていてる筈だが、これならランタンでも照らせない遠方を見通せる。

「ま、これぐらいは長生きしてればね」

「お前16だろう」

「ん」

……笑みで返された。俺はそれで惚れたり誤魔化されたりする人間じゃないぞ。改めて辺りを見れば、見覚えのある場所だった。確か、レイナと一緒に来た時、最初にダンジョンへ飛び込んだ所だ。

よかつた。居場所が分かれば、記憶を頼りにルートを決められる。物覚えが特別良い方でも無いが、あの日は散々地図と睨めっこしていた。

「とりあえず、北西の方向に向かうぞ。ここからだが一番早く外に出られる。方位磁石は持つてるか？」

「この方向かな」

「あ、そう、道具要らずか……。道中のモンスターには一応気をつけてくれ。触手で足を絡ませるネットプラント、人狼や魔法使いの霊体が出てくる」

「物知り」

「この森を通らないとダンジョンには入れないからな」

「そっか」

道中の戦闘は、ケイの中身が俺だった頃と比べて極めてあっさりしたものだだった。

いや、戦闘とすら呼べない。ケイが一声上げると、暗闇に飛び込んだ一筋の魔法が命を刈り取る。先制攻撃と一撃必殺、そして遠距離の索敵手段と攻撃射程。これらの条件さえ揃えば、最早モンスターを視認する必要も無かった。

「……」

「……」

先頭で死の鎌を振るってくれるケイの後ろで、唯一俺が気をつけるべき事と言えば、土から浮き出た木の根に躓かない様気をつける事ぐらいだ。

「……」

ほら、たった今魔法が飛んでいった。きつと向こうで一つのモンスター生が潰えたの
だろう。南無。

「詠唱要らずの魔法か」

今しがた放たれた魔法は、『放て』や『貫け』などと言った、詠唱の体を成しているのかすら怪しい言葉すら無かった。

無言で魔法が放たならば、もはやモンスターが殺されたという事にすら気付けない。

「ああ、そつか。居たんだ」

「ケイ？」

「やだなあ。冗談。私を知っている人をほっとく訳ないでしょ」

「一方的に知っているだけでもか」

「ケイは優しいからね」

「そつか」

優しい人は「ああ、居たんだ」等と言わないが、俺は口を閉ざすことで真実を封じる。

俺は心優しい人なのだ。

「それに少し考えたんだけどさ。キミには協力してもらおう事があるかなって」

「何だ？」

「私、記憶喪失みたいな物だからさ」

「……」

「だからキミには教えてもらいたいんだ。私の過去を。この身体が経験してきたことを」

その言い方だと……もう認めている様な物ではないか？

「二つ目に、私が」

「この世界のケイであれるように、手伝えと？」

「……察しがいいね。その通り、私が別世界のケイだと悟られない様に、手伝って欲しい」

所謂秘密の共有というヤツだ。あの憧れのケイさまとそんなことが出来るなんて、ああ震えてしまう。

しかも。しかもだ。……俺とケイが、お互いに同じ事を求めているのだ。ケイは俺の知る過去のケイを求めて、俺はケイの知る過去の俺を求めている。

奇妙で、面白い話だ。これなら落語家になれるかも知れないな。俺は存在しない筈の

口角を上げてしまう。

良いさ。構わないし、むしろ大歓迎だ。

まずはレディーファースト。お前の記憶を教えてやろう。

「まずは、あの果物を幾らか回収してくれ。そうそれ、その薄く光っている果実だ」

「……食べたいの？」

「勝手に食べてろ。だがそいつは約束の品だ。お前の友人のための、お土産だ」

「友人の……。いわゆる、友達？」

「ああ」

先ずは、大切な約束を果たしてもらわないとな。

「その人の名前は……」

「名前はレイナ。錬金術士兼魔法使い。無垢な性格で、人懐っこい。男への苦手意識は

有るらしい」

「そっか。レイナ……」

「あと、呼ぶ時はレイちゃんだ。頬を膨らませて怒ってくるぞ」

危なかった。これを忘れていたらケイが怒られてしまう。

なぜ機嫌を損ねたのか分からずにあたふたするケイも、見たい気がしなくもないが。

そうだ、他の友人について教えておこう。一気に覚えさせても、大魔法使いなら覚え

切れるだろう？